

---

# 真剣で私に恋しなさい！～新たなる人生の始まりpart 2～

メルクリウス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！〜新たなる人生の始まり part2〜

### 【Nコード】

N9265P

### 【作者名】

メルクリウス

### 【あらすじ】

まず最初にこの作品はオリ主最強、原作レイプ、などが含まれております、原作を壊したくない・汚したくない方は読むのをやめるのをオススメします。

……この作品は『新たなる人生の始まり』と繋がっている為にその話で出てくる『真・恋姫十無双』メンバーが出るのでご要所ください。

この世界では『川神』『鉄』『九鬼』『橘』『久遠寺』『霧夜』などど世界に名を知られている中に新たに『櫻井』というのが現れたのであった。

櫻井は軍事、商業、政界など色々な部門で活躍している……だが、その多くは女性なのだ。

でもその中に唯一一人男がいるのだ……

この話はその男……櫻井紫郎が織り成す物語である。

ヒロインがとても多いので混乱するかもしれませんがそこは……すいませんとしか言えません。

各作品の主人公は一応出します。主人公のフラグが立つかは……考え中です。

紫郎はこの世界の知識はありません。作者は原作を全部やりました

ww

プロローグ 紫郎の行方 ( ) ( ) (前書き)

思いつくのに書く暇がないのをどうにかしたいものです。

## プロローグ 紫郎の行方 ( )

櫻井 紫郎は今とある女性の前に立っている。

「どうだった…？ “あの世界”は…？」

「とても良かったよ。 “大事な人達”が多くできたからな。」

紫郎はその女性の言葉にとっても良い笑みで返した。

その女性はその言葉に満足したのか笑みを浮かべて立ち上がった。

「じゃあさっそく次の世界に行つて貰うよ。」

その女性は指を軽く動かした。

紫郎の前に亀裂が入り亀裂の先には亜空間みたいのが見える。

「ちょっと待て、お前や他の神達に特訓を受けて、今疲れているんだが？」

紫郎は困ったように頭を掻きながら目の前の女性に呆れていた。

「そんな事は知らん。」

さもそんな事はお構い無しに言っただけだ。

「言っと思ったぞ……」

紫郎は予想していたのか掻いていた手で頭を押さえていた。

「そういえば確か……あの世界で何人が忘れたが……契約を交わしたんだろ？」

「はい。」

紫郎はなぜだかその言葉を聞いた途端、見るからにイヤそうな顔をしていた。

そして“マリア”は上から目線にやけていた。

「さぞやモテる男は辛かろう」

紫郎はマリアからの目線に対して視線を逸らしていた。

「まあ“あの子達まで”落としたのは予想がだったんだよね。」

マリアは一瞬顔を歪めたがすぐにニヤけ顔に戻った。

「さっきの話とまるっきり話が変わっているぞ。」

紫郎も紫郎で黙っていたいなかった。

「んゝ すまないな、ついな！」

マリアのニヤけ顔はいまだに続いていた。

「そこで話に戻るが、次行く世界ではお前にはちよつと弱体化してもらつ、簡単に言えば身体能力半減、身長半減、魔力半減…もう全部半減だ」

マリアは一人で爆笑していた。

「お前なんで一人でそんな笑っているんだ？」

「いやなんでもない。」

ほんの数秒で真面目な顔に戻った。

逆にそこにびっくりしてしまっている紫郎であった。

「それでなんだが、最初は辛いと思うから契約したものを何人が連れて行っていいぞ。だが、お前が成長すればするほど能力が戻るから何人でも契約者を呼べるんだがな。」

つまり次の世界では全て半減しているから前の世界の契約者を連れて行っていいそうだな。

後は自分が成長すればするほど能力は戻るみたいだな。

……成長……？

「次の世界では当初は小学一年生ぐらいの設定だからヨロシク！」

親指を立てて笑みを浮かべていた。

紫郎はそれに対して拳を握りながら笑顔でいた。



「ああ、了解した。」

紫郎はしぶしぶ拳を緩めて了解した。

なぜ拳を緩めたかというところ……紫郎はマリアに一回も勝った事がないからだ。

特訓中でもボロ負けしたのだ。本気でやりあって。

「じゃあ行ってこい。」

マリアがさういうと目の前にあった亀裂が消えて紫郎の真下に現れ、紫郎は不意な奇襲におくれをとってしまった。

「急過ぎやしないか？」

紫郎はそれに落ちて行ったのであった。

プロローグ 紫郎の行方 ( ) ( ) (後書き)

―話を急いで書いているのでお待ち下さい！―

世界設定 (ネタバレ含む) ( ) (前書き)

一話は順調に書いていますが……超絶文章がなくなっています。

## 世界設定（ネタバレ含む）

この世界は全ての原作のクロスオーバーです。

学校は竜鳴館と川神学園は合併しています。

『真剣に私に恋しなさい』を土台に作るうと思っていますので、『君が主で執事が俺で』や『つよきす』のメンバーは同学年や一つ上の学年になっています。  
教師陣も合併していますので一緒になっています。

（詳細）

学校名：川神竜鳴学園

校長：川神鉄心  
副校長：橘平蔵

九鬼揚羽、鉄乙女、久遠寺夢、川神百代、サブキャラの稲村圭子、アナスタシア・ミステイナは川神学園の三年生です。

つよきすメンバー、対馬レオ、鮫氷、新一、伊達スバル、蟹沢きぬ、霧夜エリカ、佐藤良美、橘瀬麗武、楊豆花、浦賀真名はマジ恋の2年F組と一緒のクラスにいる設定です。

近衛素奈緒このえ すなお、西崎紀子にしざきのりこ、村田洋平むらたやうへいはマジ恋の2 - A組とする。

椰子やしなごみはまゆつちの1年C組に居る事にします。

教師陣やあまり2 - F組のメンバーの接点もあるようにします。

竜鳴館りゅうめいがんという生徒会がある。

原作内で起きたイベントが出ないときもあります。

何か修正する時はタイトルに（ ）を乗せます。

世界設定 (ネタバレ含む) ( ) (後書き)

なんか短い文で切った方がいいのか、長い文でやった方がいいのか、分からなくなってきた。

## 第一話 開戦、風間ファミリー、対馬ファミリー

紫郎が異世界に飛ばされて10年が経過した。

(この十年間はいずれ書きます)

くとある内戦地域

銃を乱射する音や大砲の轟音が響く戦場。

紫郎は軍服を着て腰掛けができる椅子に座りながら戦場を見ていた。

「紫郎さん、そろそろ終わらせないと転校初日から遅刻してしまいますよ。」

「ご主人様、凧の言うとおりですよ。遅刻はいけませんよ。」

紫郎の背後からゆっくり現れた二人は美少女であった。

一人は軍服を着込んで顔に傷があり、真面目そうな顔をしている銀色の髪の美少女であった。

もう一人も軍服を着込んで美しい黒髪をなびかせており、誰もが見惚れてしまうほどに美しい美少女であった。

「そうだな。早くあいつ等に会いたいしな……でもあいつら俺の事覚えてるかな…？」

紫郎は空を見ながら何かを懐かしんでいた。その顔は何かを期待している表情であった。

「それは大丈夫だと思いますよ、つい一ヶ月前に京殿がわざわざ会いに来たではありませんか。」

「そうだったな。あれはさすがに驚いたよ。」

紫郎はその事を思い出して笑っていた。二人の美少女もそれに吊られて笑っていた。

紫郎は京の事を思い出していた、見た目は可愛いのだが自分の前と親しい者以外の前ではとにかく無口で人付き合いが悪いのだ。そこが紫郎の悩んでいる所らしい。

でも紫郎にはベタ惚れらしく、様々な方法でアプローチをしてきたのを紫郎は思い出して笑っていた。

……紫郎は小学生の頃に京を色々な面で助けたりして、なんだかなだで好意を持たれたらしい。

その他に紫郎は色々とお節介をしていたらしい。



「それに他にもメールや手紙でも来ていますし忘れていたことはずないと思いますよ。」

黒髪美少女が週に三回は届く手紙の事を言った。

「そうだったね。それより華琳や雪蓮は凄まじい勢いで世界に進出しているな。」

「そうですね、華琳様も雪蓮様も行動するときには自重しませんから、でも退き際は心得ているのがさすがだと思います。」

紫郎は世界で活躍している家族の事を話し始めた。他二人もその話をして盛り上がった。

「あっ！そうでした。」

銀髪美少女が何かを思い出した。

「クリス嬢と瀬麗武嬢も一緒に転入するそうですよ。」

その事を聞いた紫郎は嬉しい反面、頭を悩ませる事が頭を浮上した。それはもう頭痛になるぐらいの悩みだ。

「じゃあ絶対に“親父さん”達が来ているな……」

紫郎はそれに溜め息をついた。女性二人も何かを思い出したのか、盛大に溜め息をついていた。

その親二人は一人娘であるクリス、瀬麗武を溺愛<sup>できあひ</sup>しているのだ。それはもう盲愛<sup>まうあひ</sup>、愛情の比ではない。

「……今悩む問題じゃないな。今は目の前の戦闘に集中するべきだな。」

紫郎は何回か頭を掻き揚げてから目の前の戦場に向き直った。

「“愛紗<sup>まじあ</sup>”、部隊を退かせてくれ、俺達が討て出て早急に終わらせるぞ。」

黒髪美少女がその言葉を聞いてすぐさま動き出した。

「愛紗が戻ってきたら、俺、凧<sup>なぎ</sup>、愛紗、三人でこの一帯を鎮圧する

ぞ。」

「御意！」

銀髪美少女の拳にはいつの間にか手甲が装備されていた。通信兵に指示を出して帰ってきた愛紗の手にもいつの間にか青龍せいりゅう偃月刀えんげつとうを持っていた。

「七割撤退完了です。」

「よしっ、その調子で撤退させる。以後俺達が出てからは戦場には入るなと伝えておけ。」

紫郎は通信兵にそういつと戦場の方に歩いて行った。愛紗も凧もそれに付いて行った。

通信兵がすぐさまに全兵に通信した。

「今、櫻井閣下が出撃した、総員に通達するこれから戦場には絶対に入るな！繰り返す、これから戦場には入るな！」

その数分後に戦場にはものすごい轟音とともに複数のクレータが出来

ていた。

・ ・ ・ ・

戦場から移り変わって現在此処は川神竜鳴学園。

）直江大和 side ）  
なおえ やまと

こんちわ、俺の名前は直江大和なおえ やまとっていうんだ、宜しくな。

好きなものはヤドカリ。趣味はヤドカリの飼育と観察だ。

此処でヤドカリの魅力について話したい所なのだが……今はそれどころではないのだ。

今、俺たちは体育館で集会があるらしくて移動中なのだが……

「大和……？」

今、俺の隣で話し掛けて来たのは椎名京しーなみやっていうんだ。

見た目は可愛いんだけど無口な所が傷でな。

俺も最初は話しづらかったのだけれど、紫郎のおかげで話しやすくなったんだけどな。

「大和お〜元気ないの〜？」

今、話しかけてきたのは川神一子かわかみ かずこ、通称：ワンコ。

元気な娘で常に前向きで男女問わず人気で友達が多い。

我ら風間ファミリーの一員である。言い忘れたが京も風間ファミリーの一員である。

……我らが風間ファミリーのリーダー、風間翔一かほら しょういちはこの場には居ない。通称：『キャップ』。

多分寝坊だろう……キャップは自由人だから、常に何をしているのか、したいのかがまるつきり読めないのだ。

でもそこにのカリスマがあると俺は思っている。

まあ、いつまでも子供って感じなんだがな。

「大和ー……元気出せよ、マシユマロあげるから。」

今、話しかけてきたマイペースな奴は櫻井小雪さくらい こゆきという。風間ファミリーの一員である。

俺の親友で風間ファミリーの一人の櫻井紫郎さくらい しろうの家族である。小雪は紫郎が小学生の時に保護したらしい。

なんでも「親が自分の子共に暴力を振るうのは最低だ。だから家庭の事情など関係無しに俺が無理やり奪ってきたZ E」とか言っつて、自分の苗字をあげていた。

でも翌々（よくよく）考えると……それって拉致だよなと思ったのは俺が中学生のときだった。

小雪もその時は嬉し涙を流していたの、ふと思い出した。旧姓は『榊原』。

後、京の家にも何かしてきたらしいな。

小雪は普段からボツツとしており、天然というより電波系に近いな。でも昔に比べて表情が良くなってきたのが分かる。でも紫郎と俺達

の前では明らかに違いがある。

小雪も二年F組なんだが、二年S組の奴等と仲が良いのだ。なんで仲が良いのか小雪に聞いたのだが、なんでも紫郎繋がりで知り合っ  
たみたいだ。

「お前さっきからぼう〜っとしてんぞ。」

こいつは島津岳人しまつがくと通称：ガクト。

常に女の子にモテたいと思って行動しているのだが、見た目のゴツ  
さから女の子には敬遠されている存在だ。

俺もコイツに付き合わされて散々な目にあっただぞ。

コイツも風間ファミリーの一員だ。

「お前は女子にモテる方法でも考えておけ。」

大和は岳人を軽くあしらう感じに言っただけだ。

「ははは〜岳人じゃ無理だよ。」

今、話に入ってきたのは師岡卓也もろおか たくやあだ名は『モロ』だ。

モロも風間ファミリーの一員だ。

見た目は普通だな。でも漫画やアニメ、ゲームなどに詳しい。アニメやゲームじゃないリアルリアルの女性と仲良くしたいと思っているが、仲間以外の女性とは目線を合わせることも出来ずにいるシャイな性格なのだ。

「なんだ、全員……いや二人ほど居ないな。」

今、発言したのは川神百代かわかみ ももよ。俺は姉さんって呼んでいる。

「姉さん、朝も女子達と一緒に登校したのか…？」

「ああ、また新しい子が増えてな。だっはは!!！」

姉さんは盛大に笑っていた。

姉さんはそこら辺の男よりか断然男らしくて、女子にエラくモテているのだ。

何をいうのも姉さんは世界に名を知られている川神鉄心を祖父に持ち、武術の総本山『川神院』の後継者なのだ。



圧倒的な戦闘力と素手であるのに明らかに別次元の存在である一人。

「うちのリーダーはどうした…?」

「さあ、寝坊か、どこかうろついているかのどっちかでしょう。」

二名ほどいないが此処に風間ファミリーが集合した。

一人は海外にいる紫郎だが最近では連絡がないんだよな……紫郎の奴本当に大丈夫か…?

「そういえば朝に強い気を感じたんだがすぐに消えてしまったんだよな。しかも私が後を追跡しようと思ったのだが、気をまったく感じられなくて無理だったんだ。」

姉さんは自分の拳を見ながら言った。

「ああーそのせいで闘いたくてもしょうがない!! 欲求不満だあ」

やばいな……姉さんが暴れたらこの場の人じゃ抑えられない。

大和が少し焦っていた所に……

「川神姉、此処では暴れるなよ。」

体育館入り口にいたのは生徒会副会長兼風紀委員長で武道四天王の  
くろがねとめ  
鉄乙女さんが居た。

ああ〜なんか嫌な予感がしてきたぞ。

はあ〜紫郎がいればどうにかなるのによ〜!!早く帰って来いよ!

……そういえば隣に居る京が島津寮からずっと笑みをたやさないで  
いるのだが……何か嬉しい事でもあったのか……?

・ ・ ・  
く直江大和 なのおえ やまと side out く

く対馬レオ つしま side く

なんか体育館の入り口で何かあったみたいだな、騒がしい。

ああ、俺の名前は対馬つしまレオっていうんだ、宜しく。

「なんかモモ先輩と乙女先輩が小競り合いしているみたいだぞ。」

「それってやばくないか…？」

今、最初に話したのは俺の幼馴染兼親友の伊達だてスバルだ。

俺の兄貴みたいな存在で仲間思いで、ルックスも非常によく女子にも人気だ。後喧嘩も強く俺の後ろをいつも守ってくれている。

次に話した奴は俺の幼馴染で悪友の鮫氷さめすがしんいち新一だ。自分で『シャーク』  
って言っているが、周りの連中は『フカヒレ』って呼んでいるがな  
ww

「あつ！鉄心てつしんの爺ちゃんへいぞうと平蔵へいぞうが止めに入ったぜ。」

今のは蟹沢かにさわきぬっていうんだ、周りからは『カニ』や『カニっち』  
の愛称で呼ばれたりしている。

言葉遣いが悪くて短気なうえに負けず嫌いな性格なんで、俺やスバルやフカヒレも女とは見ていない。他の連中も女とは思っていないと思う。

下の名前を呼ぶとキレて飛び掛ってくる。

そうそう、カニも対馬ファミリーっていうのに入っているから。

いつも俺達四人と一緒に居るからっていつから姫に命名されたのだ。

でもうちのクラスにも風間ファミリーっていうのがいるのだが、そいつらも中々に良い奴等だ。

でも俺達は四人じゃなくて本当は五人だったんだがな……ホントに紫郎の奴は何処に行ったのやら……

「早く集会始まってくれないかしら」

今日の姫はご機嫌が良い様だ。なんでだ……？

今、言ったのが霧夜エリカ。周りからは『姫』と呼ばれている。

『姫』と呼ばれている理由は容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群な上に高飛車な振る舞いをするからである。だがその振る舞いのせいで嫌っている者もいるが、彼女に憧れを抱くものも居るのだ。俺もその一人だ。

俺達四人が入っている竜鳴館という生徒会の会長様である。

「なんでそんなに機嫌がいいの、エリー……？」

姫の隣には常に佐藤さんがいる。佐藤良美、愛称は『よっぴー』なのだが姫以外の人に呼ばれるのを嫌がっているみたいだ。

クラスの委員長をしており、真面目で誰にでも優しく接してくれるので人望はかなりある。

「時期になれば分かるわよ」

姫は学校に着てから満面の笑みですつといる……これは絶対に今日は何かあるなと俺は悟った。

後、姫の笑みに見惚れていたのは余談だ。

佐藤さんも生徒会に入っている。位置は勿論姫の補佐である。

「まったく川神姉にも困ったものだ。」

溜め息をつきながら歩いてきたのは竜鳴館副会長で風紀委員長、俺の従姉の鉄乙女先輩だ。俺は乙女先輩って呼んでいる。

学園の風紀を守っているゆえに『鉄の風紀委員』と恐れられている。

常に日本刀『地獄蝶々』を持っており一騎当千と呼ばれる武家の出でもあり、身体能力はずば抜けてよい。拳法部の部長でもあり、その実力は全国大会優勝。

姉御肌でとても面倒見が良いが反対に頑固で融通が利かない。

「それにしても今日は姫の機嫌が良さそうだな。」

乙女も姫の異常な機嫌の良さに気付いたらしい。

「乙女先輩も後で分かるわよ。」

姫はそういつと体育館にある自分のクラスの椅子に座り脚を組んだ。

乙女先輩は姫の言葉を聞いて少し考えたみたいだが、さっぱり分かっていなかったようだ。

乙女先輩も自分のクラスの所に行き、俺達四人や風間ファミリーの連中と談笑していると校長と副校長が来たので、喋るのをやめて前を向いた。

）対馬<sup>つしま</sup>レオside out）

紫郎達の軍服のイメージはナチス親衛隊に似ている軍服着ている。

**第一話 開戦、風間ファミリー、対馬ファミリー（後書き）**

急いで書きましたので誤字があるかもしれませんので報告をお願いします。

話的には完全オリジナルです。



主人公設定（ ）（前書き）

誤字があったら報告をお願い致します。

## 主人公設定（ ）

前作品と一緒に：櫻井紫郎さくらいしろう

性別：男性

血液型：A B型

一人称：俺、自分、私

武器：色々

職業：学生兼軍人兼ヴァイオリニスト

好きな食べ物：納豆

嫌いな食べ物：特になし

趣味：料理、読書、武器の整備、株

大切なもの：家族

嫌いな人：命を軽く見る人

尊敬する人：エルヴィン・ロンメル

座右の銘：「願うよりも抗う方が夢への近道」

称号：愛すべき希望

## （容姿）

顔：上の上

髪：金色、腰まで伸びている。

瞳：真紅

身長：180？

体形：痩せマツチヨ。筋肉は目立つほどではない。

（モデルはDies iraeのハイドリヒ卿）

（性格）

顔立ちが非常に整っておりイケメンとしか言い様がない。でも寝ている時やボオ〜としている時は女性っぽく見えてしまう。髪の毛を結ぶと完全に女性に見えてしまう。

誰にでも優しく好かれやすい為に人望はある。懐も深く器も広く、親友や恋人にしたいと人に思われやすい。

誰にでも親切にしてお節介な所もあるが引き際は心得ている。

切り替えが早く冷静に物事を見ている。人の表情から何を考えているのか読み取るのが得意である。

人をからかって困らしたりするのだが、その人は本気で受けてしま  
う。

女の子が大好きである。

マリアのせいで力を大幅に失った状態。

パラメーター（F a t e 風）

【筋力】 A      【魔力】 B

【幸運】 ????      【耐久】 C

【敏捷】 A      【宝具】 A

【保有スキル】

気：S

まだ力が戻っていないが相当の気がある。

肉体強化はもちもんの事だが、色々と気配察知や気配遮断などとかしている。

百代の瞬間回復も気でも出来るが魔力でもできる。

最近ではレムリ インパクトの練習中。

魔力：B

格段に魔力が落ちてしまったが使えないことはないがこの世界ではあまり使っていないらしい。

魔術や魔法を唱えてみたら疲労感が溜まる為に使ってはいない。

幸運：????

周りの環境がどうなっているかによって変わり良い時はいいのだが、不幸な時はとことん不幸だ。  
だが、大抵が良い事だ。

耐久：C

爆撃を喰らっても掠り傷程度だが、女性陣に毒を吐かれたら………精神的に死ぬ。

気で強化したら大抵の攻撃は無傷でいるが、愛があるもので攻撃をされた場合、強化とか関係無しに直撃する。

夜の事になると……三段階上がる。

敏捷：A

走ってもかなりの速さを出せるが技を使った移動法をすると閃光に見える。

でも自分で速度を制限できる。

宝具：A

歴史にある武器は何でも使える。また持てば使い方も体が分かってくる。

マリアに飛ばされた時に自分の持っている全ての宝具が世界中に散らばってしまったが、十年間で集めなおした。

自分でも武器を作るようになったが明らかにオーバースペックになっている為に自分か家族しか扱えない。

運命：?????

紫郎を中心として世界が動いていってしまい、またそれにより環境が大幅に変わってしまう。

特に女性には絶大な効果がある。男性にも効果はある。

## 創造・想像

マリアのせいで制限を掛けられたがあまり気にしていない。

自分が思い描いた物はなんでもできる。だが疲労が溜まって使いすぎると倒れてしまう。

(金ピカ王の王の財宝もできる)  
ゲート・オブ・バビロン

この世界に来てからはあまり使っていない。

天然たらし

これは常時発動している。

抜けている所もあり、そこがなぜだか女性にはグッと来る。意中の相手だけではなく、男女関係なく惹きつけてしまい、好意を持たれる。

最近では女性になら誰にでも優しくなってしまうている。

その分嫉妬心のは敏感になっており、誰もが幸せであって欲しいと願っている。

〈技能〉

オールラウンダー

触ればあらゆる武器を熟練者並みに扱える。

部隊の指揮も攻勢から撤退戦まで完璧にこなせる。

神眼

マリアから使用を禁じられている。

この世界に来てまだ一回も使っていないが……使ったら未来が見えるらしい。

だが代償に視力を失っていき失明をしてしまう。

無限倉庫

亜空間にある倉庫で今では色々とあり、歴史上で消失したという物がある。自由にもものを出し入れ出来る。

中は時間の概念が無いため、食べ物を入れても腐らない。

神達から貰った本やマリアから頼んで色々な本を置いている。

教育

自己流で編み出した教育方法を実践したり、マリアから教わった教育方法を実践したりして、人に色々と教えている。

この世界では魔法の教えはしていないが、気や自分の技を教えたりしている。学問の方も教えられる。

カリスマ

見た目でもあるが……部隊を指揮したり、人の前で話すときも堂々として威厳がある態度をとっているために周りの人間からはカリスマ性を感じてしまう。

自然体でも人を引き付ける何かを持っており、自分の行動すれば自然に付いて行く気分にさせてしまう（特に女性には絶大な効果がある）

〈櫻井流〉

紫郎が前の世界でもマリア達の修行でも開発した技である。

まだ登場していないが使用する予定。

「櫻井」という名前の者は勿論使えるが、紫郎の教育を受けた者も使える。



## 第二話 転入生（ ）（前書き）

誤字があつたら報告をお願い致します。

誤字を発見したので直しました。

## 第二話 転入生（ ）

大和やレオが体育館で集会を受けている頃……

「やっと着いたな。」

軍服を纏った紫郎が川神竜鳴学園の門の前に着いた。

戦場からそのまま来たみたいだ。美少女二人も紫郎の後にちゃんと付いて来ている。

「制服まだ貰っていませんでしたね。」

凧が申し訳なさそうに謝罪した。

「いや、俺が鉄心の爺さんに言い忘れていたのが原因だから気にしなくていいよ。」

紫郎は凧に対して怒るはずもなく、優しく頭を撫でてやっていた。

この二人からはとても甘い雰囲気を感じる。

……何故かこの二人はもう一人の存在を忘れていた……

「ご主人様、イチャついてないで行きますよ。もう始まっているみたいですよ。」

軽く拳を握って、いかにも怒ってますという雰囲気にじを滲み出している愛紗がいた。

凄<sup>ひ</sup>い威圧感を出していて一般人が見たら逃げ出してしまいそうなくらいだ。

「あ、すみません。愛紗さん。」

「なんだ……？ヤキモチか……？」

凧は愛紗の事を見てすぐさま謝罪をした。紫郎はそれに苦笑いしながら愛紗を急かすように言っただけだ。

「べ、別にヤキモチなど妬いていません！」

愛紗の態度を見て「妬いている」と二人は一緒の事を思っていた。

「かなり長い付き合いなのにまだ素直じゃないんだな…」

紫郎は昔の事を少し思い出しながら今の愛紗を見た。

昔もずいぶんツンな所があったな……でも今もだいぶんツンな所があるがなww

紫郎は自分の中で愛紗について思っているみたいだ。

「いや、あのですねー／＼／＼………」

愛紗が頬を掻きながら何かを言おうとしている。

「……私が素直になったら……も、物凄いく主人様に甘えそうなので……／＼／＼」

頬を染めながらそう言った愛紗の表情は……男が見たら誰でもときめきしまいそうな表情であった。

紫郎は一秒もしないうちに愛紗に抱きついていった。

「相変わらず愛紗がデレたら可愛いな」

紫郎は抱きつきながら、自分の胸で照れている愛紗を見て笑みを浮かべていた。

予想以上に愛紗のデレは効いたらしい。

「あの〜紫郎さん、時間が無いと思われるのですが…?」

凧は冷静にこの場を静めようとしている。さすがに愛紗みたいにヤキモチは妬いていないみたいだ。

「おっと、そうだったな。そういえば愛紗は「ご主人様」って呼ぶのは禁止な。もし家族以外に聞かれたらどうなることやら……」

紫郎は人前でそんな事を聞かれたら……どんな目で見られるかとちよっと心配しているらしい。

「はいっ／＼／＼……では紫郎さんと呼びます。」

愛紗は頬を染めながら満面の笑みでそれに応えた。

「じゃあ行くつか。」

紫郎は正門を通って気が集まっている体育館に脚を進めた。紫郎はなんとなく職員室より先に体育館に行こうとしていたらしい。

・ ・ ・ ・

〔百代 side〕

朝から体育館に集合して集会とかめんどくさいとしか言いようがないぞ。

私の睡眠時間が削られてしまっではないか。

「川神の。朝から何をピリピリしているのだ…？」

体育館の席に座っていると後ろから話し掛けてきたのは、武道四天王の一人、九鬼揚羽<sup>くきあけは</sup>さんである。いつでも軍配団扇<sup>ぐんぱいうちわ</sup>を持っているのが特徴的だ。クラスは私と違い三年S組だ。

世界的に有名な九鬼財閥の娘でもある。

後、私を暴れた時に止められる一人である。

揚羽さんは正々堂々真正面から闘って来てくれる一人でもあるので、私も敬意を評して「さん」付けしているのだ。

「そういえば、朝にとても強い気を感じたのであるが……それは我だけか……？」

その言葉を聞いて私は一番に反応したのであった。

「やっぱり揚羽さんも感じていましたか……私はそれを追跡しようかと思っただけですけど、気の気配が完全に消えていて無理でした。」

私は素直な感想を揚羽さんに言ったのだが、揚羽さんは軍配団扇を口に当てて何かを考えていた。

「そうか、川神の、でも無理ならそやつは相当な強者であるな。」

揚羽さんの言葉に私は頷くしかできなかった。朝に乙女さんにも聞いたのだが……乙女さんも感じていたらしい。

「その様子では鉄にも聞いたのであるな……？」

私が少し考え事をしていると揚羽さんに読まれてしまっていた。さすがは将来は九鬼財閥の軍事を受け継ぐだけの事はある。

「まったく揚羽さんも人の心を読まないでくださいよ。」

私は苦笑いをしながら揚羽さんに言った。

「フハハハハ！これぐらい出来て当然である。」

私達二人はそこで笑っていたのだが……

「二人共々静かにしないと怒られちゃうよ。」

今、話し掛けてきたのは久遠寺夢くおんじ ゆめという。久遠寺三姉妹の三女である。

温和な性格で平穩を好むのだが、私達とよく行動を共にしているのだけだな。

クラシック界で有名な久遠寺森羅くおんじ しんらさんを姉に持っているのだが、三姉妹揃って個性的な性格で姉妹なのかと思わせてしまう。



「こらっ！揚羽と百代、少しは静かにせんかあ！！」

私の祖父である川神鉄心かわかみてつしんが舞台に立って喋っていたのだが、マイクも使っていないのに体育館中に響いた怒鳴り声。五月蠅過ぎるぞ。

なんでも爺おじいは数十年前までは最強と言われていたらしい。私や私の妹も住んでいる川神院のトップである。今でも世界各国の人から恐れられているらしい。

私を止められる一人でもあるな。

まあ、今では私が最強なのだが……いや、一人居たな……私が唯一勝てなかった奴が。

「揚羽よ。百代よ。今は集会であるゆえに私語は慎んでくれ。」

今、注意してきたのは橘平蔵たちばなへいぞうという。平蔵さんも私を止められる一人である。竜鳴館という生徒会の館長である。ゆえに皆も『館長』と言っている。

ウチの爺と互角に戦える人でもある。なんでもウチの爺と戦っていた無人島を沈めたり、海を割ったとかいふ噂を聞いたのだが、私が平蔵さんに聞いてみたら……実話だった。

米軍から「彼が戦争に参加していたら勝敗は分からなかった」と言

われている超人的な人だ。

私の鍛錬の時も稀に見てくれている。

なんでも自分でも学校を作ろうと思ったのだけれど、ウチの爺とブルマの話をして一緒に作るうって事になったらしい。ウチの爺はもちろん、平蔵さんもブルマ好きである。

「静かになった所で、今日の本題に入る。二年生に転入生が五人ほど来た。」

五人だと……！多いような気がするが……別に気にはしないぞ。さてと可愛い女の子はいるかな

百代の表情は誰が見ても上機嫌だった。

〔百代 side out〕

・ ・ ・ ・

校長である鉄心が言ってからすぐに舞台袖から二人の女性が現れたのだ。

誰が見ても美少女だと分かったのであった。男子生徒はその容姿に見惚れており啞然としている。

女子生徒も見惚れている人もいるが……

「\*:.:.。 . .。 \* . . ( n ' ( ) n . \* : : . . : . .  
: ( 訳 : 上玉キターー!! )

……約二人ほど大声を上げて喜んでいる。その二人が誰かは……

「さすがモモ先輩反応しましたね!!」

「そついつエリカも私と同じ反応しているくせに。」

……姫と百代であった。姫と百代の反応はなんとなくこの場に居る全員が納得できる反応であった。

でもこの体育館に居る全員が疑問に思うことがあった。

なんで二人だけなのかと……

「学長、宜しいでしょうか…?」

学長とは鉄心のあだ名である。そのあだ名が広まって今では学園の全員がそう呼んでいる。

学長に質問をしたのは教師陣の所に居る。小島梅子こしまうめこという教員であった。あだ名は『ウメ先生』。

二年F組の担任であり歴史教師である。弓道部の顧問でもある。生徒思いであるが、指導はとても厳しく私語や道を踏み外した事があると、いつも装備している鞭で打たれる体罰がある。

別名『鬼小島』。

やる事さえやっていれば優しく接してくれて、それなりに優しい人である。

「梅子先生が言おうとしている事は分かる。なんでこの場に二人しか居ないのかだろう…?」

鉄心と平蔵は少し困った様子でいる。

その時だった……

体育館の扉が開いて入ってきたのは

「 丁度だったかな……？」

黒い軍服を着て黄金にも見える長い髪をなびかせ、烈火のような瞳をしている……風間ファミリーや対馬ファミリーに属している

櫻井紫郎であった。

幼馴染メンバーや知り合いの人達や教師陣も目を疑った。もちろん、転入生二人も驚いている様子だ。

……何故この場に彼が居るのか……

堂々としてきた紫郎に全生徒が唖然としている中……何人か紫郎

の方に動いていた者がいた。

紫郎は髪を掻きながら言った。

「これはマズったかな……？」

この場には合わない言葉を言った紫郎はちょっと焦っていたが突然前と後ろから誰かが抱きついてきたのでそれを受け止めたのだ。しかも二人……いや、もう一人背中にいる……

「おかえりなさい。紫郎」

「ただいま。待たせて悪かったね。」

紫郎の胸で満面の笑みを浮かべている京が居たのだ。心の底から嬉しそうな笑みでいる京を見て紫郎も笑みを浮かべていた。

京は一ヶ月前に新聞で紫郎がドイツに居る事知って、会いたい衝動にやられたらしくドイツまで行き、紫郎にわざわざ会いに行ったのであった。

その時に転入するという事を言ったらしくこの日をずっと待っていたらしく、京の部屋のカレンダーにちゃんともハートマークがついていたらしい。

「やっと帰ってきたんだね」

「小雪、髪の毛随分と伸ばしたな。まあ、綺麗だから良しとするよ。」

もう一人小雪も京と同様に紫郎の胸で幸せそうな笑みを浮かべていた。

小雪は紫郎からの電話で転入の事を聞いたらしい。その日から一ヶ月間この日が来るのを待っていた。

今の小雪はとても良い表情をしている。それはクラスのメンバーが見たことない表情であった。

「まったく待たせ過ぎよ。来ないかと思ってたわよ」

「すまなかったな。こっちも色々と忙しかったもんでな。」

紫郎の背中から首に手を回して抱きついているのは霧夜エリカであった。

彼女が何故紫郎が来るのを知っているのかというと……世界的に有名なキリヤコーポレーションとこれまた世界的に名を知られている『櫻井家』は協力関係であるためにエリカは紫郎の事を良く知っている。

そこでエリカは紫郎とちよくちよく会っているので知っているのであった。

紫郎はエリカの親族間の権力闘争の事を知っていて、いつかそこで頂点に立ち世界を牛耳る野望をエリカが抱いてる事を本人から聞いているので、かなり親しい仲でもあるのだ。

突然起こった行動に啞然としていた生徒達は騒ぎ始めた。

「なんだ！あのイケメンは！！」、「後ろにいる二人可愛くないか……」、「キヤーノノノ」、「なんであの三人は抱きついているんだあ！！」とか色々と話が出ているらしい。

幼馴染メンバーも紫郎に会いに行こうとするのだが

「喝っつっつっ！……！」



その言葉は体育館を超えてこの川神市全体に聞こえるんじゃないかと思うほどの声であった。

二、三年は慣れたものだが今年入学したばかりの一年はそういうわけにもいかないらしく、鳥肌がたったものやある者は器用にも立たまま気絶している。

「まったく最近の若い者はたるんどるな。そう思わないか、平蔵よ。」

鉄心は隣にいる平蔵に話を振った。

「まったくだ。たるんどるとしか言い様が無いぞ！」

平蔵は鉄心の言葉に頷きながら言った。

そう言われて生徒達は静まり席に着いた。

「紫郎よ、早く舞台上上がって来い。丁度良く今から転入生の紹介をする所だったんだぞ。」

紫郎は抱きついていていた三人に席に戻るように言って戻した。

「紫郎さん、早く舞台上に上がりましょう。」

「じつ目立っているのは恥ずかしいのです……」

後ろに控えていた愛紗や凧は生徒達からの視線に耐え切れない模様である。

二人が恥ずかしそうにしているのを苦笑しながら見ていた紫郎であったが、生徒達の中から知り合いを発見したのだ。

その子は美人なのだが周りの連中が近寄りたくないという雰囲気を出しているためにクラスで浮いてそうだなと紫郎は内心で思っていた。

紫郎とその子の目が合ったらしくその女子は一瞬だけ綺麗な笑みを見せてくれたので紫郎もそれにつられて笑みを返したらその子は頬を染めて下を向いてしまった。

……その子の近くに居た女子は被害を受けてしまい、顔を真っ赤に染めてしまっていたのに気付いたのは、紫郎の後ろに居た二人だけだった。

紫郎はそのまま体育館の真ん中を歩いて舞台に向かって行くのであったが……

ドーンという轟音と共に紫郎の髪が揺らめいた。

一般生徒達は急な轟音に驚いたがそれよりも転入生に殴りかかっている三人の方に驚いていた。

「紫郎おー帰って来るなら一言ことば言ってくれてもいいんじゃないかな  
く？」

紫郎は右手で川神百代の拳を止めていた。

百代は誰から見ても分かるようなぐらいの邪悪な笑みを浮かべながら紫郎を上から目線で見ていた。

「うむ、またもや腕をあげておるの……紫郎よ。我は嬉しいぞ」

左手で九鬼揚羽の拳を止めていた。

揚羽は満足したように何回も頷きながら笑っていた。

「……お前が帰ってきたのは非常に嬉しいのだが……お姉ちゃんに一言ぐらい言っておけ!!」

右足で鉄乙女の拳を止めていた。

乙女はなんだか怒っていた。それはもう表情を見たら絶対に分かるってぐらいに。

でも刀を使わなかったからそこまで怒っているとは……思わない。

「あのおーお姉様方……殺す気ですか……?」

紫郎は冷や汗を掻いていた。武術の達人クラスが三人も襲い掛かってきたのだから。

「お前は私を打ち負かした男ではないか、このぐらい出来て当然だろ。」

百代は悪気がなかったかのように言っただけだ。百代の攻撃は本気ではなかったにしろ、周りの生徒が少し飛んだぞ。

「いやはや、まさかこれほど簡単に止められてしまうとは……誠に

天晴れであるぞ!！」

軍配団扇を口に当てて高笑いをしている揚羽がいる。紫郎の気持的には「まったく」という感じであった。

「すまない、“つい”手が出してしまった。」

乙女は怒っている表情は消えており、頬を掻きながら困った様子でいる。

紫郎の内心で“つい”ってなんだよというツッコミが入っていた。

「ごらあつ!!お前達早く席に着かんか!！」

またもや鉄心の怒鳴り声が響いた。朝からこんな事されていたらたまったもんじゃない。

「ほら、お姉様方。後で幾らでも話せるので今は席に戻ってくれま  
すか…?」

紫郎は三人に問いかけた。

「もう何処にも行くつもりはないので……」

紫郎は三人を見ながら言った。その言葉に嘘偽りはないと三人共分かかった。

何故なら今の紫郎の目を見たら一目瞭然であった。

三人共紫郎の言うとおりに席に戻ったのを見た紫郎は舞台に足を進めた。

愛紗と凧はあらかじめ紫郎に言われていたので手を出していなかったのである。

紫郎はようやく舞台上に上がったのだが……

「「紫郎おー!!」」

顔見知り二人に突撃されたのであった。

紫郎的にはもう疲労が溜まり始めていた。

## 第二話 転入生（）（後書き）

一人謎の人を入れました。その人はまだ出る機会はないと思います  
が……いずれ出して紫郎を撃沈させる存在です。

今はマジ恋を重点的にやりながら、ゆっくりと恋姫をやっている  
と思っているので宜しくお願いします。

もしも誰か攻略して欲しいヒロインがいましたらドシドシ意見を言  
って下さいね

第三話 美少女転入生は誰でしょう…？ ( ) (前書き)

今回は短いです。

誤字脱字があった場合は報告を御願います。



第三話 美少女転入生は誰でしょう…？（ ）

） ??? side ）

まったく父様とことまにも困ったものだ。

私の転入初日に戦艦せんかん初日はつひで学園に突貫しようとしていたのだ。

……尊敬している父様とはいえ、それはさすがにまずいと思い、私が進言したら辞めてくれたのは幸いであった。

はあー……それにしても紫郎の奴は今頃何をしているのか……

四年前から会っていないし、携帯の電話番号だけ分かっていたから良かったものだが、一ヶ月前から繋がらない……一体どうしたというのだ。

……何時いつ如何いかになる時にでも電話に出てくれていたのに……戦闘の真っ最中や部隊の指揮している時や追撃されている時にも もしかして嫌われたのか…？

……そんな事は……考えたくないものだ……はあ。

今、私は川神竜鳴学園の校長室で待たされていた。

「瀬麗武よ。緊張しているのか？」

「いえ、少し考え事をしていました。」

今、話し掛けてきたのは私の父親であり、この学園の副校長である  
たちはなぞう橘平蔵の兄である橘幾蔵だ。  
たちはなぞう

左目に眼帯と体に無数の傷があるのが特徴的だ。今でも現役海軍司令官でもある。

どんな窮地でも必ず勝利を呼び込むと称され、不可能を可能にする漢とも呼ばれているのだ……私の父は。

私にも時には厳しく、時には優しく接してくれる。自慢の父でもあるのだが……

……私と紫郎の電話を盗聴したりして嫌いになりかけてしまった時もある。その時は愛刀である『まんじゅしゃげ曼珠沙華』を抜刀して斬り掛かろうとしていた。

私が唯一、心休まる時は紫郎との電話のときだ。何でなのかは分か

らない……でもこれだけは言える……

紫郎と話していると胸が暖かくなる。

……本当は直接会って話したいが……何分紫郎は忙しい身であるからな。

声を聞けるだけでも良しっと思っっている。

話が変わってしまったが、先程まで父様と叔父様が殴り合っていたのでそれを見物していたものだが凄まじかった。

学長殿に止めに入ったおかげで周りへの被害は……ほぼない。

そして校長室にはもう二人いる。

「父様日本の男性はあんなにも勇ましいのですね。」

一人は私と同じぐらいの年齢に見える。金色の髪をしており、私とは武器は違うが傍らにはレイピアを持っている。

「さすがは武士の国だ。」

少女の隣に座っている軍服を着ている軍人……一体誰だ……？

「クリス、挨拶しなさい。」

「おっと、そうでした。」

クリスと呼ばれた少女が立って私に言うてきた。

「自分はクリスティアーネ・フリードリヒだ。これからヨロシク！」

元気良く挨拶をして握手を求めているクリスに大して……

「橘だ。」

私はそれだけ言って握手に応じた。

「「橘だとお……！」」

目の前に居る親子が驚いて声を上げていた。

「もしや貴方があの『松笠の古狼』の娘さんかね…?」

軍服の男性が聞いてきた。

「いかにも…：：：我の娘、たかはしはなむね橘瀬麗武であるぞ。」

父様が軍服の人に言った。

「やはりな!!紫郎君が君の事を良く話してくれてな。」

「紫郎が言っていた通りの外見をしています。」

その軍服の男は何かを思い出してそんな笑みをこちらに見せてきた。少女の方も納得したという顔をしている。…：：：ま、待て、い、今…

…：：：紫郎と言ったか…?」

…：：：私の中で紫郎という奴はアイツ一人しか居ない!!

） 瀬麗武 side out ）

）　　？　？　？　s i d e　　（

私は今、橘瀬麗武たちせはなれむすという女性に両肩を掴まれている。

肩を掴んでいる手には結構な力が入っていて、ちょっと痛いのだがな。

「紫郎の事を知っているのか!!」

物凄い形相で迫って来て聞いてきた。

「ちょっと落ち着け！そして肩が痛いぞ！」

肩に入れる力が徐々に強くなってきており、私はそれに耐えられなかった。

これでも鍛えているのだが……これは痛い。

「瀬麗武よ。落ち着くのだ。」

幾蔵が止めに入るが……

「父様は黙っていてくれ！紫郎は今何処に居るんだ！？ちゃんと生きているのか！？」

父親を邪魔のように言っただけの瀬麗武はクリスの肩を握る手を緩めたが、紫郎の事に関しては追求はし続けている。

「橘嬢。紫郎君から伝言を受け取っているから落ち着いて話そうではないか……？」

父様は懐から手紙を取り出した……手紙があつたなんて私は何も聞いていないぞ……！

「そういえば自己紹介していませんでした。私はフランク・フリードリヒだ。見ての通りドイツ軍人だ。」

父様が自己紹介をしながら手紙を彼女に渡したのが、手が掠めて見えるほどの速さで手紙を取っていたのに私は驚いた。

そして素早くスカートからナイフ取り出して手紙を開けていた。

そして彼女は手紙を凝視して見るからに必死であると伝わってきた。

そして三分ぐらい経った時に手紙を全て読み終わった彼女が口を開いた。

「……父様、この手紙には私の実家（母艦）に一回電話を入れていると書いてあるのだが……どうゆう事が……！」

彼女は刀に手を触れて何時でも抜いて斬りかかりそうな雰囲気である。見るからに怒っていると分かる。

「そういえばそうであったな。忘れておったわ。わはははっ……！」

橘殿はそれを何も気にせず高笑いをしていた。

私と父様と顔を見合い同じ事を思っただろう……「絶対に抜刀する」と……

そして今まで感じられなかったのが嘘のように物凄い気が一瞬放出され……そこからは皆様のご想像にお任せします。



そして五分後

地面に倒れ伏している橘殿が無残にも居た。

「すまなかつたな。見苦しい所を見せてしまい。」

彼女は私達の目の前で頭を下げて謝罪してくれている。

「自分は気にしていないからいいぞ。」

「私も面白いものが見れたと思っているので気にしなくて結構だ。」

私も父様も別に気にしてはいないが……それよりか学長殿の部屋がボロボロになっている方が気になってしまった。

・ ・ ・ ・

それからしばらくして学長殿と副校長殿が来て、幾蔵殿が怒られていた。

……そして場所は変わって体育館。

体育館に向かう時になんて呼べば分からなくて困っている自分を見て、「気軽に瀬麗武と呼んでくれ」と言われて私は嬉しかった。それから紫郎の事について話をしていた。出会いや思い出を色々と話したのだが、なんでも瀬麗武は紫郎に「もう少し明るくなれ」と言われたらしく、それを意識しているんだが中々に出来ないらしく困っているらしく、自分はそれを聞いていち早く反応して瀬麗武の性格改善に協力すると言って友達関係になった。自分がこの学園に来て初めての友達だ。

……自分も紫郎に「もっと日本の常識を学べ」と言われたのである程度の常識を学んだつもりだ。

実を言うとだな……自分の愛馬である浜千鳥でこの学校に来ようとしたのは自分の心にしまっておくことにする。

学長殿呼ばれて舞台袖から舞台に出て行ったのだが、全校生徒の前に出るのはさすがに緊張するが、自分のプライドと騎士道が許さないため自分は堂々と人前に立った。隣にいる瀬麗武はまったく緊張していないように見えた。

父様達は舞台袖の奥にいる。さすがに人に目立つので恥ずかしい。

そして学長殿が気になる事を言っていた……自分達以外に転入生が  
三人居るといふ事を……一体誰なのだ。

自分達が待っている間には誰も来なかったのだが……

そして自分は体育館の扉が開く音がしてそちらに目をやった。

そこで私は目を疑った。

三週間前にとある内戦地帯の鎮圧に向かった……自分の　　の櫻井  
紫郎が居たのだ。

自分も隣に居る瀬麗武も驚きを隠せずにした。

自分達が驚いている間に何者かが紫郎に抱きついていたので見て、  
自分はなんだがムカつときてしまった。紫郎があんな笑みを他人に  
見せるのはよくある事なのは分かっているのだが……何故だかイラ  
ついてしまう。

紫郎の登場が原因で五月蠅くなってしまったのを学長殿が怒鳴ってその場を静めて三人が離れたのを見て少しイラつき感が治まった。そして紫郎が舞台に向けて歩いていたので……またもや違う女性に笑みを向けていたので、自分は紫郎から教わった高速移動法の一つである瞬動しゅんどうで紫郎を叩きに行こうとするがそれもまた阻まれてしまった。瀬麗武も体が少し動いていたので同じ事を考えていたに違いない。

今度は三人の女性が殴りかかっていた。でも紫郎はそれを軽々と止めていた。

それを見て自分は「さすがだな」と思っていた。女性三人は相当できる奴だろうと私は思っていたが、さすがは私の　なだけはあるなとも思った。

そしてやっと舞台に来た紫郎に抱きつこうとしたが先に瀬麗武が動いて自分もすぐに抱きついていた。

三週間ぶりの温もりを私は感じていた

） クリス side out ）

### 第三話 美少女転入生は誰でしょう…？ ( ) (後書き)

皆さんの予想道理だったでしょうか…？

文章中の の部分は次の話で分かります。

学校が始まったせいで更新するのが遅くなるかもしれませんが、そこは申し訳ありません。

もしも恋姫を見たい方がいたらそちらも同時に進めていくので意見があったらどうぞお気軽にしてください

第四話 自由人と俺様、担任紹介（）（前書き）

誤字脱字があつた場合は報告を御願ひします。

#### 第四話 自由人と俺様、担任紹介（ ）

紫郎に抱きついてきたのは……

一人は四年振りに会って女性特有の所も成長して、とても美人になっている美少女である。紫郎がプレゼントした黒いリボンを髪に巻いてくれている事から紫郎はすぐに分かったのであった。

この紫色の髪の子は……橘瀬麗武だと。

そしてもう一人は紫郎を軍隊に入れたドイツ軍人のフランクさんの娘さんであるクリスティアーネ・フリードリヒであると。

「あのお二人さん。人前だぞ。人前。」

紫郎は指を全校生徒の方に向けて二人に意識させようとしているのだが……

「もう少しこのままにさせてくれて……」

瀬麗武が少し目に涙を溜めて抱きついているので、紫郎はその表情

にドキツとしてしまい、無理矢理振りほどくのをやめてしまった。

「やはり此処は落ち着くな。」

クリスマスも紫郎の腕の中で幸せそうにしているために瀬麗武と一緒に振りほどけないでいた。

ゾツと悪寒がして紫郎は生徒の方を向いて……もう終わったと思ってしまった。

男子生徒の殺気が籠った視線はもちろんなのだが……それ以上に異常な気の放出を感じていた。

顔見知りの者、お姉様方、妹みたいな存在が異常な視線を紫郎に向けている。

それはもう視線だけで殺せそうな程に……

カニはレオが止めていてくれて、京は大和がどうにか止めてくれて、エリカは満面の笑みで親指を下に向けている。お姉様方も気を高めている。とある子は刀を強く握っていた。



「あ、あっ、後で幾らでもできるから今は我慢してくれよ。鉄爺てつじい」  
鉄心てつしん）早く自己紹介してくれ！！」

紫郎は冷や汗だらだらで動揺しながらこの場の雰囲気きふうきに我慢できず早く進めてくれと鉄心に言った。

「ほっほっほっ。相変わらずじゃのう。では、転入生を紹介するぞ。」

鉄心は紫郎を見て笑っている。

「まずは今紫郎に抱きついている見ての通り刀を背中に持っている子が、橘瀬麗武たちせりぶという」

鉄心がそういつと瀬麗武は紫郎から離れて前を向いて頭を下げた挨拶をした。

「それで次の子がクリスティアーネ・フリードリヒという。」

クリスマスも同じように挨拶をした。

「そして一番問題なこやつは櫻井紫郎という。」

紫郎も一歩前に出て一礼をしたのだが、皆の視線が集中して内心ビクビクしていた。

だが、生徒達視点から見たら全然印象が違ったのである。

：制服を着てないにしろ何か異質的なものを彼から感じており、寝ていたものも起きて凝視してしまうほど、美しいと思ってしまう髪をなびかせて堂々とした態度で、それがとても魅力的に感じてしまい、男女問わず見惚れてしまっていたのだ。

「そして櫻井愛紗だ。」

次に紹介された愛紗も一歩前に出て最初の印象を良くする為に綺麗な笑みを浮かべながら一礼した。

だが愛紗の笑みは男子生徒には大ダメージを与えてしまったらしく、胸を押さえている生徒が何人か居たらしい……そして極僅かだが……下半身を押さえていた奴が居た。

「そして最後に櫻井凧だ。」

次に紹介された凧も愛紗と同様に一步前に出て一礼をした。

愛紗とは違い女子なのに堂々としており一部の女子が頬を染めていたようだ。

「以上だ。それとこやつらに質問があるなら後にしろ。各自クラスに戻って授業の準備をしたまえ。」

鉄心に変わり平蔵が解散の言葉を言って、全生徒がクラスごとに帰ろうとするのだが……

俺が先だあ！！

我が先だあ！！

ダツダツダツと誰かが物凄い勢いで体育館に走ってきているのが分かった。

何故だか無性に知っている奴のような気がするのだが……

ドォーンと勢いよく扉が開いて目に付いたのは

「ふっん！ 俺の勝ちだなあ！！」

「何を言うか！ 我の勝ちであろう！」

二人の男が言い争っていた。

そしてすぐに舞台上に居る紫郎の存在に気付いた二人は……

「おおおー！！ 紫郎じゃないかーよ！？ 元気にしてたかー！！」

「紫郎ではないか！？ 久しいな。姉上あねうえがとても心配し  
ゴハッ！！」

キャップは紫郎を見つけるなり飛び跳ねながら手を振っていき  
た。

そしてもう一人は九鬼揚羽の弟である九鬼英雄くまひでおである。

二年S組に所属しており超絶俺様主義である。尊敬している人以外  
は全て庶民と呼んでおり、なんでそう呼ぶのかと聞いてみた所「見  
下しているのではなく、上に立つ者として愛おしく見ているゆえに」  
と言っていたそうだ。……それはそれで腹が立つが心配りができる  
ために意外にも上に立つ資質はある。

将来は九鬼財閥で商業を統べる。そのせいか『櫻井家』の商業担当  
である蓮華れんがにライバル視しているらしい。

ちなみに九鬼財閥の軍備を統べるのは揚羽である。そして二人の妹  
が政界に出るらしい。

そして話を戻すと英雄は揚羽に殴られていた。

「この馬鹿者おー！！ 余計な事は言わんではいいわあー／／／」

揚羽は英雄の頭を鷲掴みにして体育館を去った。それに付いて行く  
人影を見て紫郎は軽く挨拶をするぐらいの動作をした。それを見た  
メイドは揚羽の後を追っていった……正確に言えば英雄の後である。

その人物はメイド服を着ており、「メイドモード」と「通常モード」

というものを使い分けており、英雄の前では「メイドモード」なのだが、それ以外の人物だと「通常モード」になっているのだが、紫郎の方を見たメイドの顔はツンツンした表情であってまだマシな通常モードであった。

メイドモードとは……心底敬愛している英雄や九鬼家のご家族には万能メイドとして仕えていて九鬼家の使用人達の統括役を務めるくらいな立派な状態だ。

通常モードとは……気が強くなり、かなり黒いキャラになる。目つきも悪くなり、言葉遣いも悪くなるという最悪モードだ。

名前は忍足おしたりあずみである。元傭兵という実績を持っている故に相当強い。

「もう集会は終わりじゃい。風間もクラスに戻りなさい。」

鉄心が言ったのを聞いて全生徒が動き出してクラスに帰ろうとしたが、どうにも転入生が気になってチラチラ見ながら歩いていた生徒が大半だ。

顔見知りメンバーは頭を少し下げて笑みを浮かべて体育館を去っていた……だが一部は最後まで残っていたが鉄心や平蔵に強制的に体育館から出された。

カニが紫郎に会いに行くのをレオ、スバル、フカヒレが止めていたの見て紫郎はそれを笑っていた。フカヒレは止める間もなくカニに蹴られてノックダウンしていた。

キヤップも紫郎に会いに行こうとして大和に止められた。京はすんなり大和達と一緒に去っていった。大和は一番問題なると思っていた京が去っていったのに対して相当驚いているようだ。

そして全員去った後、残っているのは転入生と教員人だ。後は……

「久し振りだね。紫郎君：とはいっても三週間ぐらいしか会ってなかったぐらいだね。そういえばまたもや功を立てたみたいだね。これでまた昇進もありえるんじゃないかな？」

舞台袖から親が子を見る感じで登場したのはドイツ軍人のフランクであった。

「紫郎！ 貴様ああー瀬麗武に何を抱きついておるー！！」

そしてもう一人舞台袖から殴り掛かる勢いで現れたのは幾蔵であっ

た。

「フランクさんも来ていたのですね。さすがは娘さんを溺愛している事がありますね。そして幾蔵さん、私から抱きついたのでありませんよ。」

紫郎はフランクに敬礼をして挨拶した。幾蔵は落ち着かせようとしていた。

「何時も言っている様に普通に接してくれていい。いずれ君は私の事を“父さん”と呼ぶのだから。ハハハ!!」

「父様ツ／＼!!」

フランクはサラッと凄い事を言った。クリスは照れるようにフランクに詰め寄ってこれ以上喋らない様に口を塞ごうとしていた。本当に仲が良い親子だと紫郎は思っていた。フランクの言葉に対しては反応しない紫郎であった。

「貴様あー!! 瀬麗武という“嫁”がいるのに何を浮気をしておるかあつ!!」

「と、父様っ!?! わ、私が、し、紫郎のよ、よ、 “嫁” というの



はどういうことだ！？ 私は初耳だぞ／＼」

幾蔵はフランクの発言に反応してまたもや凄いを言った。瀬麗武は顔を真っ赤にして自分の親に問い詰めた。

「強き血を求めるのは当然であろう！ それに幼き頃から紫郎のと好いていたではないか。」

幾蔵は瀬麗武が恥ずかしがっているのにもかかわらずに言ってしまった。  
った。

それに対して瀬麗武は耳まで赤くなってしまい、下を向いて恥ずかしそうにしていた。

……瀬麗武も否定をしないという事は……もしかして……

「兄者よ。それぐらいにしておけ。紫郎達をクラスに行かせなくてはならないのでな。」

そこに平蔵が割り込んできた。

「五月蠅いわ！！ この愚弟があー！！」

会話に入ってきた平蔵に幾蔵は殴りかかってしまい、そこからは二人共兄弟喧嘩が勃発した。

「私も長居し過ぎたようだ。では私はここで失礼する。」

フランクは娘に迷惑をかけまいと教員方に挨拶をしてからすぐに去ろうとしていた。やはり子供の事を考えていると紫郎はフランクに尊敬の眼差しで見っていたのだが……

「クリス、何かあればすぐに戦闘機で駆けつけるからな。それに私の部隊も動かそう。」

前言撤回だ。溺愛し過ぎだ。

……何か凄い事を言ってから去って行ったと思ったら……

「それから言い忘れていたがマルギッテを派遣する予定なので宜しく。」

そう言うってから帰っていった。クリスは嬉しそうに喜んでいたが紫

郎は新たな問題が出てきた為に頂垂れていた。だが、今はそれ所ではないという表情をしていた。

先ほどから瀬麗武とクリスがこちらを見ながらコソコソと話しているのだ。しかも頬を赤くさせて……紫郎はそれを聞き取れてはいなかったが何か恥ずかしい事でも言っているんだろうという解釈をしていた。

だが、実際は違った。あの二人は婚約について話していたのだ……そうなのだ。付き合っを素っ飛ばしてもう結婚している話をしているのだ。それよりか二人で結婚するかと妄想が入ってきてしまりつつある。

「ほっほっほっ。昔と変わらずやるではないか紫郎。」

鉄心もその光景を見ながら微笑んでいた。

「紫郎よ。百代もお主の事を好いておる故に……孫の顔が早く見てみたいのじゃがな！」

鉄心はとんでもない事を言ってしまった。紫郎は頭を痛めるしかな

かった、次から次へと問題が起こってしまうからだ。幸いクリスマスや瀬麗武には聞かれていなかったからよかったものだ。

「（俺の味方はいないのか…）」

紫郎は内心自分の家に帰ろうかと思っってしまった。後ろにいる愛紗や凧もニコニコしていてそれが以上に怖かったのだ。

「まだ授業が始まるまで時間があるから、お主の担任になる先生と副担任を紹介しとこう。梅子先生と祈先生じゃ。」

鉄心が紹介したのは二人の美女教師であった。紫郎は疲労の極みにあった心と体が一瞬で癒された感覚を感じた。

「貴様等の二年F組の担任になる小島梅子だ。担当教科は歴史だ。宜しく。」

一人は凜々しくとても魅力がある先生であった。腰に鞭を装備しているのが気になるのは別の話だ。

「私は副担任の大江山祈と申します。担当教科は英語ですわ。そし

「てこの子が土永さんつちながっていいいます。これから宜しく御願いますわ。」

もう一人の美女教師は大江山おおやま祈いのりという。生徒からは「祈先生」「祈ちゃん」と呼ばれている。

見た目からしてマイペースそうに見えるが実際もそうである為に遅刻常習者である。梅子や風紀委員長である乙女からも毎度注意されている。だが、意外にも授業はスパルタで成績が悪い者には補習を行なうほどである。

「祈も紹介したが土永だ。呼ぶときは『土永さん』と呼べ。分かったか餓鬼共！」

そして印象的なのが祈先生の傍にいるオウムである。名前は土永つちながさんである。

人間とコミュニケーションを取れるほどボキャブラリーが豊富である。やけに古い知識を持ち、よく人生について渋く熱く語るがある。露天で売れ残っていたのを祈が十円で買ったらしい。

紫郎以外四人は頭を軽く下げて挨拶をしたのだが、紫郎はというと

……

「これからお世話になります」

紫郎は美女二人の前で片膝をつき女性の片方の手を取り、その手の甲に軽くキスをした。

その行為に二人の教員は頬を染めて驚いた様子で反応した。だが、他に二人ほど……どす黒いものを纏っている者がいた。もう二人は「またかッ!？」という表情をしていた。

「なっ!?! なぁ、何をするッ!?! (わ、私とした事が、せ、生徒に動揺してどうするうー/ / /)」

梅子は紫郎から手を振り解いてすぐに後ろを向いた。だが、後ろから見ても分かるぐらいに耳が赤くなっていたのを紫郎以外の人が見ている。梅子はこうゆう事に対しての免疫がない為にとて初心なのだ。

「まあ」 どうもありがとうございますー (やっぱり私の予想通り素敵な殿方ですわねえー/ / /)。

祈はゆつくり口調で礼を言った。そして紫郎にキスをされた甲を大事なものを見るかのように見ていた。その表情はまるで恋する乙女であった。

「ほうー、中々見所のある男じゃないか。」

土永さんは滅多に照れない祈を照れさした事に対して褒めていた。土永さんにしては人を褒めるのは珍しい事だ。

だが、紫郎は後の事を考えていなかった……

突如、ガシツと効果音が聞こえるぐらい勢いで紫郎の両肩を二人の少女の手が掴んでいた。しかもギシギシと骨が軋むんじゃないのかというぐらい手に力を入れているように見える。

「紫郎、今の行為はどうゆう事だー!!」

「あれは自分以外にやるなと言っただろうー!!」

瀬麗武は殺気を孕んだ瞳で紫郎を睨んでいた。クリスは……何か物凄いい事を言った気がするが……気のせいだろう。

「あれは挨拶だが、何かダメだったか？ それとクリス、毎回言っているがそんな理不尽な事聞けるか！」

紫郎は外国に長年居た為にそれが普通だと思ってしまったらしい。

「いやダメではないが……（そうだった、紫郎は完璧そうに見えて抜けている所があったんだ。）」

瀬麗武は困った様子であった。でも内心では紫郎が昔から抜けているんだったという事を思い出していた。例えば塩と砂糖を間違えたり、醤油とソースを間違えたり、男子更衣室だと思っていたら女子更衣室に入ってきたり、男湯と思っていたら女湯に入ってきたりと数知れずに事件を起こしている。でもそのどれもが無自覚だったのだ。

「いやでも……（まったく人の気も知らずで……）」



クリスは泣きそうな表情になっていてしまった。だが、内心では紫郎への愚痴を言っていた。

「……分かったよ。ここは日本だしあまりしない様にするよ。」

紫郎はクリスの泣きそうな表情を見て罪悪感を感じてしまったのか、やもなくクリスの要求に了承してしまった……だが『あまり』と言っていたのだがいいのだろうか…？

「本当だな！ 約束だぞ！」

クリスの表情は一転して嬉しそうに笑みを浮かべていた。それほど嬉しかったんだと紫郎は内心で思っているながら頭を撫でていた。

……クリスも『あまり』という言葉聞いていなかったのか…？

「んっ！ そろそろクラスに移動したいのだがいいかな…？」

そこに咳払いして梅子が言葉を挟んだ。ちょっと目つきが怖いが何かあったのかなと紫郎は自分とはまったく関係ないなと思っていた。祈はいつもの様に微笑みながら紫郎がクリスを撫でていているのを見ていた。

「すみません、では宜しく御願います。小嶋先生。」

紫郎は申し訳なさそうに頭を少し下げて御願いした。瀬麗武もクリスも忘れていたみたいだったので少し頭を下げていた。

「……わ、私のことはウメ先生か、う、う、梅子……先生と呼んでくれてかまわないぞ。」

梅子は呼びなれていないものより呼びなれている方を呼んで欲しいみたいだ……だが、名前を言った時の一瞬の間はなんだ…？

「私も祈先生か先生を付けずに“祈”って気軽に呼んで貰ってもいいですよ。」

祈は頬に手を当てて少し照れながら言ったのだが、それは他人から見たらまるで名前を呼んでもらいように見えてしまっていた。

「おい若造！ 期待に応えろよ。」

土永さんも何か言いたげな言葉を言った。

「ははは。（土永さんがああ言ったものなんて呼べばいいんだ……しかも瀬麗武やクリスはともかく……愛紗や凧にも何かやられそうな予感がするのだが……やっぱり教師だから失礼のないように……）ではウメ先生と祈先生と呼ばせて頂きます。」

紫郎は名前で呼んだら四人に何をされるかと粗方予想がついていたので、此处は空気をよんで普通に呼んだ。

「う、うむ。では行こうか……って私は何を期待しているんだー！」

「……そうですね。皆さんクラスで待っているんですもんね……（はあ、私とした事が何を期待していたんですかね……）」

二人は見るからに淋しいそうな表情をして紫郎に背を向けて二年F組に向かおうとしたのだった。

……だが、紫郎は二人が前を向く瞬間に二人の表情が見えたらしく、悪い事をしたのかと心の中で整理して……結論

「梅子、祈。」

「「ツツ!!!?」」

紫郎の取った行動は一瞬で二人の背後に近付いて二人の耳元で名前を呼んであげた。紫郎が悩んだ結果これが一番良いと思ったのであった。これも無自覚で成せる業わざなのか？

そして前方の二人は……

「さあ、行きましようか、祈先生（ちょっとやばいかもしれん／＼／＼）」

「ですね（も、も、もう一回言っわって欲しい……／＼／＼）」

笑みを浮かべながら上機嫌であった。どれほど上機嫌かというところの場でスキップしそうなほどであった。

……だが、二人は上機嫌だから見ていなかったが紫郎は瀬麗武とクリスに頬を抓られていたのだ……それも全力で。

そして愛紗達は深い溜め息を吐いていた。それはもう見るからに苦勞していますと見えるぐらいに。

そして行くこととするが……

「これえ！ 待たんか！ お主らそのままの服で行くつもりか？」

鉄心の手には制服が三着あった。

（マジ恋の制服です）

「そうだった。さすが鉄爺、助かったよ。」

紫郎も愛紗や凧もすっかり制服の事を忘れていたのだった。

「ほれ、向こうに男女の更衣室があるから着替えいてまいね。」

紫郎が指を指した方に紫郎達は行った。

余談であるが……更衣室に入った瞬間に愛紗と凧に蹴られたのであった。

### 五分後

これ似合っているのか…？

ええ、とても似合っておりますよ。

愛紗さんの言う通りですよ。

更衣室の扉から微かに声が聞こえたので来るといっものが待っているメンバーにも分かった。

ガチャという音と共に三人が出てきた。

「すみません。お待たせしました。」

紫郎を筆頭に愛紗と凧も出てきた。

「どうだ？ 似合っているか…？」

紫郎は漆黒の軍服から白を強調してある川神竜鳴学園の制服を着ている。

（この学園の生徒は全員マジ恋の設定です。）

だが、この場にいる全員が思ってしまった事がある……何故だか服装が乱れているのに似合っていると……

紫郎の服は中にタンクトップの着ているのが分かるぐらいにワイシャツのボタン開けて、ブレザーをボタンを閉めずに全開でいる状態だ。

愛紗はリボンまでちゃん閉めて百代みたいに乱れてはいない。だが、百代と一緒に胸が強調されている感じがする見た目だ。

凧は愛紗と一緒にちゃんと着ているが一子と一緒にスパッツを履いている。

「白もやっぱり似合うんだな……そ、その、か、カッコイイぞ。」

「……やはり紫郎の部隊の軍服は白にするべきだと自分は思っぞ。」

瀬麗武とクリスは二人で紫郎の服を顎を押さえながらじつくり見ていた。二人共頷きながら似合っていると云ってくれた。だが、クリスは何ともないのだが、瀬麗武は頬を赤く染めて目をチラチラ逸らしながら紫郎の事を見ていた。

「教師として言える立場ではないが……似合っているぞ。（カッコイイな……って私は教師なのに注意しないのだ！）」

「とてもカッコイイですよ。（ああ、益々魅力的になりましたね……これは本格的に……うふふ）」

「ふん。小僧が、お前は男にとって敵になる存在だ。」

教師でもある梅子や祈も大変褒めてくれている。そして土永さんがなにやら意味ありげな事を言っている。

だが、紫郎は二人の教師の内心までは分かっていた……これが今後にごう影響するのか……

「お主はやはり堂々と目立った方がよいわ。」

「はっはっはっ。もう目立っているのにまだ目立つ気だな。紫郎よ。鉄に注意されぬように注意しとくべきだな。」

校長と副校長の立場であるにも関わらずに注意せずに逆に褒めてい



た。

「…では行くか。」

梅子が歩き始めたのを合図に紫郎達も梅子の後を歩き始めた。

鉄心と平蔵だけになった体育館では……

「どう思う平蔵。」

いつも目を閉じている鉄心が目を開いて真剣な表情で平蔵に問う。

「あやつは完璧に気を隠している上に気の量もハンパではないぞ。儂とお主の全盛期以上の力を持っているに違いないぞ。」

「やはりお主も感じておったか……それに血の臭いもしおった。側近である二人からだ。」

二人は真剣な顔で重苦しい空気がこの場にながれていた。

「だが、あやつならちゃんと理解していると僕は思っている。」

「ワシだってそう思ったわい。紫郎が道を踏み外すまいとな。」

二人はまるでわが子を思っているのかのような表情で言った。

だが、二人は紫郎が本気を出したらどうなるかという最悪の想定を  
していなかった……

#### 第四話 自由人と俺様、担任紹介（）（後書き）

制服のモデルはマジ恋のです。つよきすのセーラー服ではありません。

いや、梅子と祈の性格が壊れているような気もしますが……気にしないようにします。

恋姫の方も少しずつ書いていますがマジ恋をできるだけ優先にしていますので……

「文章が読みにくい」「や」「もつと文章を工夫してくれ」という感想もあれば言うてください。自分の悪い所を知っておきたいので……  
どんな小さな事でも良いのでご意見・ご感想よろしくお願いします。

第五話 霧夜エリカという存在、二年F組、決闘（）（前書き）

誤字脱字があつた場合は報告を御願ひします。

第五話 霧夜エリカという存在、二年F組、決闘（ ）

紫郎達は教室に向かって歩いていった。

） エリカside ）

紫郎達の紹介が終わってクラスに戻ると転入生の話がすぐに出て、私やミヤミヤ（京）とユキっち（小雪）が問い詰められていた。

「なんで姫は紫郎のこと知ってたんだ？ てかなんで抱きついてたんだよ！」

カニつちが五月蠅くてしょうがない、それにミヤミヤやユキっちも知りたそうにこちらを見ているし…

「それは俺も思ったぜ。俺達は幼馴染だから分かるし、風間ファミリーだって幼馴染だから同じだし…何でだ？」

伊達くんも対馬くんも知りたそうに私に言ってきたるし、これならあの場で抱きつくくんじゃなかったわよ！

クラス中の視線が何故だか私に集中している。よっぴーまでそんな

目で見ないでよお。

「俺の予想だが…姫はキリヤコーポレーションを通して知り合ったんじゃないか？」

……さすがは風間ファミリーの軍師様だわ。その通りよ…

・ ・ ・ ・

私と紫郎の出会いは八年前…私が九歳の時だったわ。

私はまだよっぴーや対馬ファミリーや風間ファミリーに出会って居なかつた頃だわ。とある社交界に私は招待された所に紫郎は居たのそれが私と紫郎の初めての出会いだった。最近急激に世界に名を知られ始めた『櫻井』だった。私も櫻井という人物に会ってみたいと思っていたのだが、櫻井の周りには大勢の人が居たのだ。私はあれを知っていた自分達の名前を知ってもらうために近付いていると…私だってキリヤコーポレーションの令嬢なのだから近づいて来るやからは大勢居たのだから…でも、それより多かつたのが親族同士での抗争だったわ。身内が全て敵という事に対して私はもう誰も信じられなくなっていたわ。あのままだったら今とは逆の性格でいたに

違わない。だからあの場で紫郎に会ったのは本当に幸運だった。

話を戻すけど、私は会場に一人だけ私と同年代に見える男の子を見つけたの。その子の周りには誰も近付こうとはしていなかった。でも私は何故だかその子に近付いていた。本能的に？ いやその子の存在が私には異質的に見えて興味を引かれたからだ。私の足はその子に歩いていた。そして私から話し掛けていた。

「こんにちは。」

私は近付いてやっと分かった。その子は確かに異質な存在だった……でも私は見惚れていた。金色の髪に燃える様な瞳がとても印象深かった。

「こんにちは。やっぱり君から来たね。」

その子は私を見るなり微笑んでいた。やっぱりって来る事を予想していたって事…？

「自分の名前は紫郎って言うんだ。気軽に呼んでいいから。気になっっていると思うけど苗字は言えないからごめんね。」

紫郎という子は私に手を出して握手を求めてきた。でも苗字が言え

ないっていうのはどうゆうこと…？ 私は頭の片隅で疑問を浮かべたが、握手を求められているのにそれに応じないのは失礼だと思いつぐに応じた。

「私はキリヤ⇨エーリカ⇨スカイウィンドと申します。」

私は握手をしながら彼を見ていた。彼は私の名前を聞いてどうゆう反応するのかと気になったの。彼もやはり驚いた表情であった。彼も私の名前を聞いて態度を変えてしまふのかと思っていたのだけれど…次の言葉に逆に私が驚かされた！

「ふうくん、まあいいや。これから宜しくなエリカ！」

素っ気無い反応…私は驚いた。キリヤと聞けば近付いて来る人しかいないと思っていたから…こんな事は初めてであった。それにエリカって…？

「えっ！？ え、エリカって私…？」

私は自分の事を言われるのだと分かっていたのだけれど…

「そう、キリヤだと他の人と分らないからエーリカを略してエリカだ。」



紫郎は私の了承もなしに勝手に決めていた。でも私はとても嬉しかった…普通に接してくれる紫郎に対して。

それからは壁に寄りかかりながらのんびり談笑していたのだけど私は自分に驚いていた。今は普通に笑ったり、本音を言ったり、心の底から楽しいという気分を味わっていた事に…これも紫郎と話しているおかげだと私は紫郎に感謝していた。

「どうぞ。」

私達二人にウェイターが飲み物を持ってきてくれた。私は話に集中しすぎて喉が渴いていたので何の疑いもなくジュースを飲もうとしていた。

「待てエリカ!! それを飲むな!」

私は急に怒鳴った紫郎に驚いてグラスを落としてしまった。

「ちっ！ この糞餓鬼があ！」

私達に飲み物を持ってきてくれたウエイターが懐から銃を取り出して私に向けてきた。私は油断していた。私を守るSPは私が外して言ったので私の近くに居なかった。私は自分のミスで死ぬのかと心の中で思っていた。せめてもう少し早く紫郎と出会って居たかったと後悔していた。そしてもっと話したかったと……

…でもそれは私の想定もしない事で終わった。私はちゃんとその光景を今でも覚えている。

「糞は誰だよおおー！！！」

隣で壁に寄り掛かっていた紫郎がいつの間にかウエイター頭を掴んで壁に叩きつけようとしていた。私は自分の目元を何回も擦こすった。

「俺の友達に銃を向けてんじゃねえー！！！」

そう言いながら紫郎はウエイターの頭を壁に叩き付けた。ズドーンという音とともに壁に頭だけ刺さった状態でウエイターは動かなかった。

「ま、まさか殺しちゃったの？」

私は紫郎に抱きついた。体が勝手に動いていた……脳で理解するよりも先に体が動いていたのだ。

「殺してはいないぞ。っておい、何を泣いているんだ？」

私は紫郎に抱きついた時に自分が涙を流しているんだと気付いた。でもなんでだと思った？……怖かったから……？……違う……紫郎が助けてくれたから……？ それもある。でも紫郎が友達って言うてくれたからだと思った。

それからは大人達がその場をどうにかしてくれてどうにかなったが、今回は本当に紫郎のおかげで助かった。

そして時間が経ち……紫郎と別れる時が来た。

「紫郎。飽きたから帰るわよ。」

私と紫郎の前に現れたのは紫郎と同じ金髪でまるで深海のように青い瞳で見たただけで上にいる存在だと分かってしまうぐらいの覇気を纏っていた女性がいた。

「そつだ！！ 早く帰るぞ！ こんな所一秒でも早く出たいぞ！」

「姉者。怒つてばっかりだとシワが増えるぞ。まあ、姉者はどんな姿でも綺麗だな。」

その人の後ろにはいかにも護衛という存在の二人の綺麗な女性が居た。一人は蝶ちょうの模様の眼帯をしていてアホ毛が特徴的な女性がいた。もう一人は水色の髪にいかにもクールと分かる女性だった。

「紫郎も私達に付き合わせてしまつてゴメンなさいね。」

「紫郎：私はキレてもいいか？」

次に現れた人の変化を見て驚いていた。先ほどまで鋭い目で大勢の人と会話してたのに、紫郎に対してはとても穏やかな笑みを浮かべている桃色の髪をしている女性が紫郎の頭を撫でていた。

もう一人の人は鋭い目つきで、あれで睨まれたら普通の人なら逃げてしまうという感じの女性がいた。何故キレているのかという自分護衛対象に気安く話し掛けていた男共に対してらしい。

「じゃあ、俺は此処で」

紫郎はそれだけ言って家族？みたいな人達と帰ろうとしたのだが……

「待ってっ！」

私は紫郎の手を掴んで止めていた。

「…ま、また会えるのよね？」

私はまた会えるか心配だった。このまま別れたらもう会えない気がした。

「そりゃ　「貴方、紫郎に目をつけたのね。」っておい、人の会話に入ってくるなよ。」

紫郎は何かを言おうとしたけど、それは金髪の女性の言葉で聞こえなかった。

「貴方、大物になるわよ。それといつでも私の所に着なさい。貴方の内に眠る野望を成就させてあげるわ。それに紫郎にも何時でも会えるわよ。」

私は目の前の女性に唾然としていた。この人は私が心の中でだけで立てていた野望を一瞬で見抜いたというのかという真実で頭がいっぱいだった。

そう…それが私の

「私の名前は櫻井華琳よ。」

師匠であり、私が唯一頭が上がらない存在である。

華琳さんは『桜井家』では政治担当である。そして政界に出て一年で日本にとって必要なならざる地位まで登り詰めたのだ。そして今では天皇家でも逆らえないほどの権力を有すると言われている。

「そして俺は 櫻井家当主の櫻井紫郎だ。」

そして私は紫郎と出会ったのだ…

• • •

そして今現在紫郎とは同盟関係以上の関係で結ばれている為に私は全力で野望を果たす為に着実に力を付けている。そして師匠である華琳さんからは巧みな話術、他者の見方、常に気品でいるためのコツを習ったりと色々と教わった。

そして華琳さんが言った言葉の中で一番心に残った言葉が…「貴方は私と似て類稀なる才能を持っている完璧超人になれるわ。でもその分他者からの期待が全部押し掛かってきて潰れてしまつかもれないわ。私もそうゆう時期があったから…その時は紫郎を頼りない。私や他の人もそうだけれど、紫郎が居れば何故だかプレッシャーを感じなくなって自分に自信がつくのよね。紫郎はそれほど懐が深くて私達を甘えさせてくれるのよね。」と言った時の華琳さんの照れた様な表情を私は今でもはっきりと覚えていた。

「え、エリー？ 大丈夫…？」

私を心配したようによっぴーが話し掛けてきた。私は昔の事を思い出していたせい、心ここにあらずという表情をしていたらしい。

「大丈夫よ 私と紫郎の関係は」 「ほら、席に着け！ HR

ホームルーム

を始めるぞ。」 あら、先生が来ちゃったみたいだからこの話はまた

ね。」

私が話し出そうとしたら丁度良くウメ先生が来てしまったので、私はそこで話を中断した。カニっちゃんやミヤミヤやユキっちゃんは納得できないという表情をしていたが、ウメ先生が来たら自分の席に戻って行った。

さすがにウメ先生が来て、まだ話していたら「教育的指導」を受けてしまうので皆分かってる。

それにして……私の目にはウメ先生も祈センセも上機嫌に見えるのだけれど……クラスの皆も顔を見合って「何事だ？」というのを思っているに違いないわ。

） エリカ s i d e o u t ）

• • • •



梅子や祈や土永さんが教室に入っている間に紫郎達転入生組は少し話をしていた。

「そういえば先ほど決めたのだが、私は紫郎の家に住むので宜しく。ついさつき父様に連絡をして荷物を送っておいて貰ったから耳に入れといて貰おうと思って今言っぞ。」

「自分も父様が島津寮という所から変更して紫郎の家に荷物を送るとメールを貰った事を今言っ。」

この二人は堂々と言った。愛紗や凧は驚いていた表情をしていた。そしてもちろん…

「はあ？ ちよつと待て！？ 一言言ってから普通はやるものだろう？ 勝手な事をやりやがって…まあ部屋はまだ何個か空いていたから良いと思うが、他の皆がなんと言っか。」

紫郎は正直二人の強引っぷりに怒りそうだったが、もう起こってしまった事ならしょうがないと心を落ち着かせていた。

そして家にいる家族が動揺していないかと心配していた。

「…先ほど紫苑から電話があつて「空き部屋に運んでおきます。」と言っておりましたから、大丈夫だと思いますよ。後「もちろん、

夜のお相手をしてくださるのなら何も聞きませんから安心して下さい。」とも言っておりましたよ。」

愛紗がそういつと紫郎は何かを決心したかのように瀬麗武とクリスに言った。

「家の主である紫苑からのお許しがあったから住む事を許可するが…決して“決して”逆らうなよ。重要なので二回言ったからな。」  
俺も家を結構空けていたし、相手するのは当然かな。」

紫郎は家を紫苑に任せきりで紫苑には頭が上がらない存在であった。その事を二人にも十分分かってもらうために二回言ったのであった。そして内心では申し訳なさそうにしていた。

瀬麗武もクリスも紫郎の真剣な表情を見て分かったのか頷いてくれた。

入って良いぞ！

教室の中から梅子の声が聞こえたので瀬麗武やクリスが先頭になって先に入って行った。そして紫郎も入ろうとするが

袖を愛紗と凧に掴まれていたのであった。

「あの…その…」

「私達も相手してもらってもいいですか…？」

頬を染めながら愛紗と凧が言った。紫郎から見たら二人はちよつと下を見る感じなのだが…それが大打撃を受けてしまったのだ。

愛紗達は意識はしていないだろうが上目遣いで紫郎の事見ていたのだ。その上頬を染めながら言われたら大半の男は撃沈してしまうだろう。

「…分かった。いいぞ。そのかわり明日学校行けなくなっても知らないぞ。（やべえーこれは非常にやばいぞおー！ 結構な付き合いなのに愛紗と凧のあの無自覚でするのはどうにも慣れないな。）」

紫郎はそういつと瀬麗武とクリスの後を追うように教室の中に入っていたが、表情に出さないようにいつもの様に堂々としているが心臓の鼓動が早くなっているのを必死に顔に出さないようにしている。もし我慢が出来なかったら…廊下で抱きついていただろう。

そして愛紗達は耳まで赤くしていたが、深呼吸をして心を落ち着かせて顔の火照りもなくして教室の中に入っていった。でも体の火照りは落ち着いてはいなかった。だが、二人は家に帰るまで我慢しようと思っていた。家に帰ったら………ねえ

・ ・ ・ ・

「先ほども自己紹介にしたと思うが転入生達だ。」

梅子が五人を並べて教室の前に立たせていた。

まず最初に自己紹介をするのは瀬麗武であった。

「橘だ。」

「アホー！ それだけだったらもっと叩くぞ。」

「櫻井の言うとおりだ。もうちょっと自己紹介をしろ。」

瀬麗武は短く自分の名字だけ言って終わろうとしたのだが、紫郎が頭を軽く叩いてもっと自分の自己紹介をしろと言ったのだ。梅子もさすがに短すぎなのが納得できなかったらしく紫郎と同じ事を思っていたらしい。クラスの中はそのやり取りを黙ってみていた。

「…橘瀬麗武だ。見ての通り背中に背負っているのは私の愛刀だ。これからよろしく。」

瀬麗武は何を言っていていいかわからなかったので自分の特徴を言って挨拶をして終わった。紫郎もよくやった方だと思いきそれで満足してみた。

次に自己紹介するのはクリスであった。

「クリスティアーネだ。改めて宜しく！ドイツのリューベックで日本人の友達が居た故に日本語に違和感はないと思うので気軽に話し掛けてくれて構わない。」

「クリスはさすがだな。」

「なるほど。だから日本語に違和感がないわけだな。」

クリスはとても明るく堂々と自己紹介をした。瀨麗武みたいに簡潔には終わらなかつたからよかつた。紫郎は内心で満足していた。梅子も納得している。

そして紫郎が自己紹介しようと思っていたのだが……

「ああもうダメだ！！　今までずっと我慢してたけど言わせて貰うよ！　なんでユキとカニとワン子と京が抱きついているのに紫郎はそんなに平然なんだよー！」

モロが急にその場に立って紫郎の方に指をさして言ったのであった。モロの言った事にクラスにいる全員が頷いていた。

その紫郎の背中にユキとカニが右腕に京が左腕にワン子が抱きつい

ているという状況だ。

「モロモロ〜うるさいぞ〜 僕がこうしたいんだがらこうしてんだよ〜」

小雪は背中から抱きついて紫郎の首に手を回して肩に顔を乗っけているのだ。でもとても幸せそうな笑みをしていたので紫郎はあえて降ろしてはいなかったらしい。

「ユキの言うとおりだぜ。ボクもしたい事をしたいからしているんだよ」

同じくきぬも紫郎の背中から抱きついていた。紫郎は四〜五ヶ月もきぬや幼馴染達に会っていなかったなので甘えたいんだと思っていたが実はきぬはまさに凶星であったのだ。本当は体育館で抱きついてやろうと思っていたみたいだが、レオやスバルに止められたのでフカヒレに八つ当たりしたそうだ。

「私は紫郎の近くに居ないと死んじゃうの」

京は何時ものように自然体に紫郎の腕に抱きついて絡めていた。紫郎も何だかんだで慣れてしまつて嫌がる素振りもせずになつていた。もはやこれが自然体になつてしまつていたのだ。

初対面のクラスの人は唖然、先生方唖然、転入生二人唖然とこの場で正常なのは幼馴染達ぐらいだった。エリカは今回はあえて動かずに傍観していた。

「うわあ〜久し振りの紫郎の感覚だ。相変わらずイイ匂いだし落ち着くわ〜。」

一子は犬耳と尻尾が生えているみたいに犬属性全開で紫郎に抱きついていていた。それはまるでご主人に撫でられて喜んでいる犬のようであった。一子は昔から紫郎に特に甘えていたのでその光景を久し振りに見た幼馴染メンバーは自然と笑みを浮かべていたとか。

「さすがツツコミ&驚き担当だけはあるな……感服するぞ。」

誰もがツツコミたい気分になるだろうとクラスにいる全員が思っていた。



「モロの言うとおりだな。流石にちょっと動きづらいし恥ずかしいぞ。四人共離れてくれないか？」

紫郎は恥ずかしいと言っているが頬を染めたり、困った様子を感じさせていなかった。そして紫郎に言われた四人はさすがに言う事を利いて自分の席に戻ってくれた。

「さて、軍服から制服に着替えただけ……先ほど紹介にあがった櫻井紫郎だ。気軽に紫郎って呼んでくれ。これから宜しくな。」

紫郎は結構な人達と出会っているので笑みを作るのは御手の物なので、第一印象を良くする為に笑みを浮かべながら言ったのであった。

『（笑みが素敵過ぎます）』

女子勢がさすがに紫郎の綺麗な笑みを見て頬を染めていた。本当は声を出しそうだったのだが、梅子先生に何をされるか分からなかったので声を出さなかったのである。そして梅子や祈も頬を染めていたのだった。男子勢は紫郎存在に圧倒されていたが、女子四人の方が気になっていたのであった。

「私は櫻井愛紗です。櫻井と呼ばれるとご主人様と呼ばれては困りますので愛紗とお呼びなして下さい。」

紫郎さんと被

愛紗は何か口走りそうになったが瞬間的に思い出して言い直していた。紫郎が内心で冷や汗を掻いていたのは言うまでもない。

「私は櫻井凧と申します。私も同様に凧とお呼びになって結構です。」

手を後ろに組んで軍隊の時のように堂々と穏やかな笑みを浮かべて言った。

「全員の紹介が終わった所で何か質問がある奴は挙手しろ。」

梅子が全員終えあつたのを確認して次の提案をした。

「はいはい……」

と二人の馬鹿がすぐさま手を上げていた。

「では、まず島津からだ。鯨島は後だ。」

岳人は喜んでいたが、フカヒレは落ち込んでいた。

「オッスオッス！ えーと、くりすていあーね？」

「ふっ」

岳人の言い方に対して紫郎は少し笑ってしまっていた。

「おい、紫郎！ 今、鼻で笑いやがったな！」

「悪い。お前の言い方がちょっと変だな。」

紫郎は謝罪をしたが内心では爆笑していた。でもそれを表情に出さないのはさすがだ。

「自分はクリスと呼ばれるのを希望する。リユーベックでもそう呼ばれていたの。」

確かに毎回クリステイアーネなんていうのはたまったものじゃない。

「クリスは彼氏はいたりするのかな？」

紫郎はフランクが居たら絶対に反応していたなと思い、一人苦笑していた。

「彼氏はいないが…フィアンセならいるぞ。」

「私にも質問が来そうなので言わせて貰うが私にも許婚がいる。」

紫郎はその場で固まった。クリスはまだしも沈黙を保っていた瀬麗武までも発言してきたのだ。この勢いだと……

「えっ！？ 誰々（だれだれ）？（この展開は……エロゲーだと主人公の名前をいうはずだ……もちろん俺かな。）」

フカヒレが聞いてきた。紫郎の心中では「終わった…」と「フカヒレを殺す」と思っていた。

「紫郎だ！」

「……………」

『ええー！！？』

フカヒレ、岳人撃沈。クラス全員驚き。

「紫郎おー！ てめえーなんでそんなにモテるんだよ！」

「お前はあれか！！ どこのエロゲーの主人公かあー！？ 今度は魔王と神王の娘でも嫁にしてきそうだな！」

岳人とフカヒレは怒鳴りながら紫郎の事を言ったのであった。そして大和は「またか」という感じで頭を押さえていた。キャップは笑っていた。モロも「理屈じゃない」と連呼している。京とワン子は啞然としている。

「黙れえー！！ 次に質問したい奴は手を上げる！！（はあー婚期が……）」

梅子先生は持っている鞭を地面に叩きつけて生徒達を黙らした。だが何時もより強めに鞭を振るっていたのに気づいたものはいなかった。

そして啞然としていた一子と京が生き返ってたのだが……

「アタシはアンタなんて紫郎のフィアンセなんて認めないから決闘よー!!」

「ワン子の意見に同意!!」

席から凄い勢いで立ち教壇に向かって来た二人を紫郎は静観していた。此処で動けば俺が何かされそうだったので…

「クリス！ 川神竜鳴学園の決闘の儀式があるの。」

「決闘の意思を伝えて、自分のワッペンを机に置く。」

一子と京の説明を二人は真剣に聞いていた。あいつ等は普通に応えたのだからけど……普通は許婚やフィアンセがいるなんて堂々と言うもんじゃないと紫郎は頭を押さえていたのだった。

「クリス！ 勝負よ！ 体育館から気になっていたのよ。腰に付けているレイピアが何より武術をやっているっていう証拠よね。橘さんも背中にある日本刀で分かるわ。」

「私は橘さんに挑む！ 紫郎の妻を語るなら、私を倒してから言うて！」

一子と京は教壇に自分のワッペンを置いた。そして二人を威圧していた。だが、京の言っている事は決闘に関係があるのか？ いつも冷静な京がこんなに暴れているのに対して幼馴染メンバー以外は啞然。

「挑まれた以上勝負は受ける！」

「良かるう。全力で勝利してこの手で紫郎の“嫁”の座を奪ってみせよう！！」

クリスと瀬麗武もやる気満々という雰囲気を出してワッペンをその上に重ねた。

「なんだか凄い事になってしまったが、決闘が受理されたぞ！！」

今、発言したのは写真屋の息子で常にカメラを持っているのが印象的な福本育郎だ。あだ名は「ヨンパチ」だ。なぜヨンパチと呼ばれているかというところ…48手を全て言えた事から「48（ヨンパチ）」と呼ばれているわけだ。女子からはキモがられている。岳人とフカヒレと非常に仲が良いという。

「……マジ！ 決闘久し振りに見れるんだ！（ああ〜紫郎君狙おうかなって思っていたのになあ〜）」

女子高校生特有の話し方をしたのは、小笠原千花である。あだ名は「チカリン」

である。彼女はクラスのアイドル的存在であるために男子からとてもモテている。彼女の家は和菓子屋さんでありその和菓子は絶品である。名物の久寿餅を普及させようと頑張っている。

「（ら抜き言葉が…学の無さが良く分かる）」

今、内心で千花に愚痴を言っているのは大串スグルという。あだ名



は「スグル」とそのままである。二年F組のオタク男子である。恋人は二次元の美少女と恥ずかしげもなくいう所からフカヒレとは特に仲が良い、モロモアアニメやゲームの話をしている。

「彼から何か甘いにおいがする。」

彼の名前は熊飼満くまがしほみである。あだ名は「クマちゃん」と呼ばれている。何時も何かを食べているので食に通じている。美味しい物について詳しく知りたいならクマに聞けと呼ばれているほどである。食い意地を張ったキャップである、風間翔一と非常に仲が良い。

「ワン子ちゃん強いのに大丈夫なのですか？ 京ちゃんも強いのに大丈夫なのでしょうか？」

きぬと同じ身長で扱いがまったく違う存在である子の人の名前は甘粕真与かすまよである。あだ名は「委員長」である。きぬとは扱いが天と地の差ほど違い、クラスのマスコットキャラであり皆から微笑ましい目で見られている。見た目は小学生であるが、本人は自分がお姉さんキャラであると信じており、周りから見たらそれがまた微笑ましくみえてしまっているらしい。そして他にもう一人の委員長である佐藤良美と二年F組の世話をしている。

「けっ！（やっぱり紫郎が帰ってくると騒ぎになるな…俺は関わらない様にしないと…勘違いするな！ 馴れ合いはゴメンなだけだ。俺はアイツの事なんて気にしてねえ！）」

このツンデレ気味の男子は源忠勝みなもたかつという。あだ名は「ゲンさん」である。目つきの悪さや、口の悪さ、生い立ちから不良と思われがちだが、家庭スキルが高く、意外と優しい所もあるし、子供にも優しいので、翔一や大和などには非常に懐かれている。紫郎とは意見がぶつかり合ったり、喧嘩もした仲なので非常に仲が良いのだが…一匹狼の為強く当たっているのだ。

「これは何か物凄いラブの匂いがするネ!!！」

だいぶおかしな言葉が聞こえるこの女子は楊豆花やんとうかという。あだ名は「トンファー」である。中国からの留学生だが日本語は堪能で成績は上位である。会話はやや苦手みたいだが、古文や現代文を教えられるほど得意である。千花とはオシヤレが好きな同士なので仲が良い。そしてもう一人仲が良い人がいる……

「アホか！ 誰が見ても分かる事やる。ウチは一瞬で分かったんよ。」

怪しげな関西弁を話すこの子は浦賀真名ついでが真名という。あだ名は「マナ」である。先ほどの話にも出てきた豆花とんがわとはよく行動を共にしている事が多い。空気が読めないのと頭が悪いのが真名の特徴である。でも運動神経は飛び抜けている。

クラスの面々がそれぞれ思っている中……

「エリー、あれは大丈夫なの？」

よっぴー改め佐藤良美がエリカに話し掛けていた。

先ほどから無言になっているエリカが気になっているらしい。

「大丈夫！ 寧ろバンバンやっちゃって！ っていう感じだから私的には大歓迎よ！（紫郎がモテる事は承知の上だから。私は華琳さ

んに言われた作戦をじっくりやらせていただきます」

このときに良美が見たエリカの笑みはとても清しい笑みだと思っ  
てしまったほどだ……だが、尚更裏なおもひがありそうで怖いと思っ  
てしまっていた。

「それによっぴーだって紫郎の魅力にメロメロになるの間違いない  
と思うわよ」

エリカは良美の耳元でそう言った。

「えっ!?!……ちょっと!? え、エリー!?!」

良美は一瞬思考が停止したが、すぐに顔を真っ赤にしてエリカに詰  
め寄っていた。

「待て、肉体を使用する場合の決闘の場合は職員会での了承が  
いいよ。ワシの特権で了承する。今すぐやんなさい」…学長、いつ  
に間に……」

梅子先生が話している時にはもうクラス内に進入していた鉄心であった。だが、紫郎や愛紗達には気付かれていた。

「ワシと紫郎が責任を持って見届けよう。」

「えっ!?!」

突如鉄心が自分の名前を出したので紫郎は驚いていた。

「それはお主が原因で始まった事だからお主が見届けずに誰が見るのじゃ。」

それは鉄心さんや平蔵さんがやるべきだろうと紫郎は内心愚痴を言っていた。その間にクラス中では大騒ぎになっていた。

「二対二の異例の決闘じゃからおもしろくなりそうではないか！  
ほっほっ！」

とても面白そうにしている鉄心であった。

「よしゃー！ 日本 対 ドイツってわけねー」

「こっちは正妻を掛けた勝負。」

一子は元気いっぱいに手を上に上げてやる気満々に対して京も顔には出していないが拳を握っていた。京の言葉に何か引っかかるが……気のせいだろう……

「はあー分かりました。武具は教室に飾ってあるレプリカを使い。」

梅子に言われて四人がそれぞれ自分の武器を取った。

一子はもちろん薙刀を選んだ。

京は弓を選んだ。そして弓矢を三十本矢筒に入れて装備している。

クリスはフランクが用意していた物を梅子が預かっていたのでそれを装備した。

瀬麗武はやはり日本刀のレプリカを選んでいた。

そして梅子先生からレプリカを触るなどの忠告を受けたので皆はそれ領いていた。触った場合は退学だそうだ。

四人は視線で火花散らせながらグラウンドへ出て行った。

「各自、グラウンドへ出る。」

そして風間ファミリリーリーダーである風間翔一が動いた。

「決闘トトカルチョ！ どっちが勝つか張ってくれ！！ 今回は異例の二対二のチーム戦だぜ！」

翔一は賭け事をし始めたのであった。

「紫郎…これだけ言わせてくれ 　ご愁傷様。」

大和とレオは紫郎の目の前まで来てそれだけ言ったのであった。

「ありがとうございます。」

紫郎は肩を落としながら礼だけ言ってグラウンドに出た。

第五話 霧夜エリカという存在、二年F組、決闘（）（後書き）

まだ恋姫の話で登場していないキャラが登場します。

マジ恋に力を入れすぎて恋姫を疎かにしてしまいがちの自分が情けない。

最近ゲームを積み過ぎているのでそっちも気になるという大ピンチな状況なので大変だww

ではご意見ご感想とかあれば待っています〜



## 第六話 ツンデレクイーン（前書き）

誤字脱字があった場合は報告を御願いたします。

先に謝っておきます。スイマセンでした。

後小説内に出てくるキャラに違和感がありましたら、是非ともご報告を御願いたします。

## 第六話 ツンデレクイーン

） ??? side ）

あたしは今、教室にいるが体育館から顔には出していないが内心では嬉しくて嬉しくて昇天しそうであった。

何故ならあたしの…大っ！ 大っ！ 大っ好きな人が帰って来たからである。

「や、椰子さんも嬉しいのですか？ そ、その、紫郎さんが帰ってきて…？」

今、あたしに話し掛けてきたのはまゆみゆみ黛由紀江という子だ。あたしと唯一仲が良い子である。自分でも言うのはなんだが…あたしは人付き合いは嫌いだ。常に一人で居た方がいいと思っていた。そう、あの時まで…

…今はその話は関係ないですね。

なんで黛さんと仲良くなったかというと、あたしの大切な人である櫻井紫郎さんが切っ掛けである。あたしは週に三回ほど紫郎さん宛

てに手紙を書いてあるんですけど、ちゃんと手紙を返してくれるのであはしは素直に嬉しいと思っていました。そしてあはしが川神竜鳴学園に入学する一ヶ月前に手紙にこう書いてあった。「黛由紀江というものが居たら仲良くしてくれ。」と、あはしは入学式の後のクラス紹介の時に探そうとしたのだが、同じクラスである事が分かった。そして向こうから話し掛けてきたのだ。最初はなんだか物凄く慌てようど話しかけてきて、ろくに会話もできなかったけど、紫郎さんの話を振ったら…穏やかな笑みに動揺もまったくない話し方をしてくれて、あはしは心の中で「紫郎さんの存在がこの子には大きいんだ」と、肌で感じました。それから少し挙動不審なところもありますけど、仲良くこの学園で過ごしています。でも黛さんの目標は友達百人作るうという目標なのですけど、あはしには協力できないと思っっているのが最近ずつと気に病やんでいたんです。でも黛さんは「気になさらないでください」と言っていたんですけど、気になって仕方がなかったのを手紙で紫郎さんに報告したところ…「由紀江がそう言っているなら気にしていないんだと思うぞ。」と手紙に書いてあったので、あはしは気持ち的に楽になりまいした。あたしにも紫郎さんの存在が大きいのだと改めて再認識しました。それから今通りに仲良く過ごしている。

黛さんの性格は本当に初心はつこです。正直に言ってしまったら先ほど話したところで言っていないところがある…それは最初の頃は挙動不審で口下手くちへたで引込み思案な為に会話もままらならず、その行動があたしの中ではちよつとイラつときてしまっていたが、紫郎さんとの約束があるので我慢をしていた。でも違ったのだ、彼女と話しているうちに全て分かった。黛さんは友達というものが分からなかつ

ただ。それでどうゆう話し方をしたらいいか、どうゆう付き合いをしたらいいか分かっていないと、あたしは判断した。あたしも人付き合いは“大”が付くほどに苦手であるから…

そしてそれからあたしも心を入れ替えて接している。話を戻しますが、黛さんは一言で言えば大和撫子である。心優しく、家事も完璧にこなし、清楚せいそで凜とし、慎ましやかで甲斐甲斐しい尽くしてくれそうだと私は感じた。まさに大和撫子である。そしてもう一つ特徴的なのは常に日本刀を持ち歩いて、そして印象的なのが

「まゆつち！ 見て分からないのか！？ なごみんな嬉しそうにしているのを！？」

そして今話し掛けてきたのは馬の携帯ストラップの「松風」である。あたしも最初の頃はちよつと退いてしまったほどの印象がついてしまった。これは黛さんが腹話術で喋っているんだとすぐに気付いた。そしてこれが原因でクラスメイトからは変な娘と思われる。まあ、あたしが言えた義理じゃないけど…

「あたしは顔に出ていたのか？」

松風の言葉が気になりあたしは黛さんに聞いた。

「はい。体育館の帰りから嬉しそうに笑みを浮かべていましたが？」

あたしは先ほどから思っていた疑問が晴れた。クラスの連中があたしのことジロジロと見ている事についてだ。見られているのが不快だったので睨んで蹴散らした。顔に出ていないと思っていたら結構前から顔に出ていたのだと、今更後悔している。

クラスメイト達は幸せそうな笑みを浮かべているなごみを見て相当驚いていたらしい。

「いや、なんでもない。そういえばさっき放送があったみたいだけど、どんな内容だったの？」

あたしは久し振りに紫郎さんを見たせいか…急に初めて会った時の事を思い出していた。

そう…あれは三年前だったかな。

・ ・ ・ ・

あたしが中学二年生の時だった…何時もの様に夜遅くに街をうろついていたのであった。

「その彼女！ 俺達と遊ばない？」

いつもように絡んでくる連中が居た。

「うるせえ！ どっか行け!!」

あたしは怒鳴り睨みつけて蹴散らしていた。

大抵の奴はこれで逃げて行くからである。

「ひいー」

そして今の連中もそうして逃げていた。

はあく何時も何時もダルすぎる。

・  
・  
・  
・

それから三十分ぐらいしてからだ。

雨が急に降ってきたのだ。でもあたしは降っているのにも構わず雨に当たりながら歩いていった。

でも急に体が重くなり、目に見えているものが霞んできてしまったのだ。そしてあたしは今朝から熱があった事を思い出して、風邪を引いていたのだと今更気付いた。

そんなことを思っていた所に話し掛けてきた人が居た。

「おい、大丈夫か！？ まったくこんな雨の中を傘をささずに歩いてるなんてな。」

そしてあたしはその人に言われて気付いた雨がいつの間にか強くなっていたことに…

そして何時の間にかあたしに雨が当たっていないのに気づいて話し掛けてきた人の傘に入れられているのだと気付いた。

「はあ、はあ、勝手な事してんじゃねよ！」

あたしはその人に向かって怒鳴ってしまった。頭が何を言っているか理解していない、目も霞んで助けてくれた人の顔も見えずにいた。かなり重症だと自分でも分かった。

「…馬鹿なのか？ こうゆう時は普通は「ありがとう」「って言うもんだろ。」

その人は髪も服もずぶ濡れ状態のあたしのことをもっと雨が当たらないように自分の方に寄せてくれていたのだ。その人の服に体が当たる感触もするのです。間違いないなと思っていた。

「風邪引いているな。うわあーなんだこりゃー！ お前物凄い熱あるじゃないか。」



その人はあたしの額ひたいに手を触れて熱を測たいってくれたみたいだ。その手は冷たくて気持ちよかった。

「はあはあ、あたしに構こわずにどっか行って下さい。」

私はもうこの人に迷惑めいわくをかけたくないと思ったので無理やりその人から離れようとしたのだが

「あっ」

その人に寄りかかる様に抱かきついてしまった。

足もいうことを利きかなくなってきたままでいて立つ事もできなくなってしまうのだ。

「これは重症じゅうじょうだな。すまないが我慢まんしてくれよ。」

あたしは体が急に浮ういたような感覚かんかくに晒さらされた。そして私は抱かっこされているのだと気付きいた。それもお姫様抱かっこだった。そしてあたしはその人の顔かほを見た。とても整ととのった顔で赤く光る瞳ひとみ、金色の髪かみがとても綺麗きれいだったと思った所ところであたしの意識いしきはそこで終わおわった。

そして次に目が覚めたのはその人の家であった。

あたしはベットで寝かされていたので起き上がろうとしたのだが、下半身がいうことを利いてくれずに起き上がれずにいた。そしてまだ熱もあつて体がだるい状態であった。でも目はちゃんと開けられてさっきよりかは楽になっていた。

「目が覚めたようだね。でも絶対安静してなきゃいけないよ。」

部屋の扉が開いてそちらの方に顔を向けた時に初めてその人を確認できた。やっぱり意識を失う前に見たとおりだった。でも髪を後ろで縛っていたので私はこう思ってしまった…美しいと。

「今はゆっくり寝てなさい。」

その人はあたしの目の前まで来て椅子に座って手に持っていた洗面器からタオルを取り出して絞しぼって、あたしの額しほに乗せてくれた。

「すみません。迷惑をかけてしまって…」

あたしは無理して起こそうとしたのだけれどその人が強制的に寝かせてきたのでそれに従った。

「気にしなくていいよ。俺は昔から目の前で困っている人が居たら助けてしまう質たちだからさあ。まあ、お節介すぎるんだと思うんだがな。」

その人は苦笑いしながら優しく話しかけてきてくれた。私は一瞬だけ今は亡き父の事を思い出してしまった。

「それと…服は洗つといたから。」

あたしはその事を聞いて一瞬困惑したのだが、すぐに理解した。布団の中を見てみたら男物のスウェットを着せられていた。そしてあ

たしは考えた…もしかして着替えてあるってことは…脱がされたのだと…!!

「俺が脱がしたんじゃないけどな。ウチの家族が手伝ってくれたから大丈夫だ。まあ、今は出かけてしまっで一週間は帰ってこないんだがな。」

あたしの心を見透かされてしまったのかと思いましたが。あたしは熱があるのも分かっていただけののだが、脱がされたと思いい顔を真っ赤にしてしまっていた。

「さすがに乙女の柔肌やわはだを見知らぬ人には見られたくないもんだろ？」

その人は頬を掻きながら照れたようにあたしに言ってきたので、あたしは頷いた。あたしはその人の表情を見て「可愛い」と内心で思っていた。

「そういえば名前言ってなかったね。自分は櫻井紫郎というんだ。宜しくね。」

櫻井さんという人は穏やか笑みをあたしに向けてきてくれた。あたしはそれを純粹に綺麗な笑みだなと思ってしまうていた。

「あたしの名前は椰子なごみって言います。」

さすがに寝ているのは失礼だと思い上半身だけ起こして言った。でも櫻井さんが心配そうにしてくれていたのがあたしにはとても嬉しく思えた。あたしの事をこんなに心配してくれて。

「椰子…もしかして!? のどかさんの娘さんか?」

櫻井さんの口から母さん名前が出てあたしは驚いていたと同時にある疑問が解けた。母さんがよく話してくれる人ってこの人のことだと…母さんは「紫郎さんが今日も手伝ってくれたの!」って嬉しそうにあたしに話してくれるからあたしも気になっていたのだけれど…まさかこんな出会いをするとは思わなかった。

「なるほどな。どこか似ている所がある。」

櫻井さんの発言にあたしは疑問を持った。母さんとどこが似ている

のかと？

「今何処が似ているかって思っただろう？」

またあたしの考えている事を読まれてしまった。この人は一体なんなんだと思ってしまった。

「容姿、声、それと椰子は隠しているかも知れないがのどかさんと同じで優しい所だな。」

この人はいかにも普通に言っただけだ。その表情から嘘をついているとも思えなかった。

「のどかさんから聞いているよ。「なごみちゃんには私にはとっても優しいのよ!」「そう自信満々に言っていたよ。」

あたしは自分でも母さんには優しくしていると思っている。あたしは母さんの事は大好きである。

「まあ、椰子はのどかさんとは違いのんびりしていないところが似ていないがな。」

櫻井さんは苦笑していた。あたしは直感的に桜井さんは母さんの事を思い出していたんじゃないかと思いました。確かに、あたしは母さんとは違いのんびりした性格ではない。

「そつえばまだ連絡をしてないから、電話してくるから寝てなよ。」

櫻井さんはそう言うと椅子から立って部屋を出ようとするが、あたしは櫻井さんの服を掴んで部屋を出ようとするのを止めた。

「待つてくださいい！！ 母さんには言わないでください！ 心配を掛けたくないの……」

あたしは最初は大きな声を出していたのにだんだん小さくなっていつてしまっていた。

あたしはこれ以上母さんに心配をかけたくはないと思ってした行動であった。

「…なあ、椰子。」

櫻井さんはあたしが寝ているベットに座って話し掛けてきた。その話し方はとても優しくかった。

「自分の子供を心配しない親はいないと思うぞ。逆にその行為が親に心配を掛けているんだと自分には思えてしまうんだが？」

あたしは出掛ける際に一瞬だけ母さんが暗い顔をしている表情を思い出してしまっていた。なんでもあの時に出掛けてしまったのだと…

あたしはそれから目頭めがしひが熱くなるのを感じてしまった。

「だからいいな。電話してくるから。」

櫻井さんはそう言ってあたしの頭を三回ぐらい優しく撫でてから部屋を出て行ってしまった。

その時思ってしまったことが父さんのように頭を優しく撫でてくれ



たことによる安心感であった。

・ ・ ・ ・

それから母さんが来てくれて泣きながらあたしに抱きついて来た。母さんはあたしが高熱で倒れたと櫻井さんに聞いたらしく、走ってきたのが分かるぐらい汗をかいていたのが分かった。あたしは本当にバカだと思った。なんで大事な母さんを泣かしてしまっているんだと…

その時にあたしは父さんが死んでから、私は自分勝手になってしまっていたと思い、心の中で後悔していた。自分をいつも見てくれている母さんにも気付かず自分勝手な行動ばかりしていた事について涙が出てきて、抱きついていて母さんに抱きついて泣いた。その時部屋にあたしと母さん二人だけしかいなかったのに気付くのは少し時間が掛かった。

そしてあたし達が落ち着いた時に櫻井さんがお粥を作ってくれたらしくそれを食べて、櫻井家自慢のお薬を貰い飲んで寝たところ、一日で風邪が治ってしまった。

それから櫻井さんにお礼も兼ねて一週間家の人がいないと言っていたので世話をしました。

でもあたしはなんでか嫌な気はしなかった。逆に嬉しいと思ってしまった。なんでなのかは分からなかったけど、これだけは分かってしまった。櫻井さんに惹かれているんだと。

そして櫻井さんの事がもつと知りたくて、あたしから喋ったりしたりしていました。一番驚いたのがあたしと一つしか離れていない事についてだ。櫻井さんはとても大人びていたので二十歳ぐらいだと思っていた。母さんもそう思っていたらしいのだが、「後四年待てば結婚できるわね」と言っていたので、あたしはすかさず反応していた。なんでも母さんは櫻井さんに好意を抱いているみたいだ。そういうあたしもかなとその場では曖昧な気持ちでした。

そして今現在世話をしようと決めた一週間内の六日目である。

あたしは信用されているのか、合鍵をもらっているので簡単に家に入っているのだ。櫻井さんも最初の時の様な敬語から、最近では普

通に話してくれるのであたしも普通に話しています。

櫻井さんの家は結構な豪邸です。プールや動物達が放し飼いにされているぐらいの庭も持っているので凄い豪邸である。でも警備はちゃんと厳重である。あたしは警備に引掛からないように登録してあるので大丈夫そうです。五日間で相当信用されてしまったらしい。

「櫻井さん、起きて下さい！」

今日は日曜日だから少し遅めに起こしに来たのだがぐっすり寝ている。でもあたしは無理やり起こせなかった。それはということ

「可愛い…」

寝顔がとても可愛いのだ。まるで子供が寝ているようであった。何時もの櫻井さんは凜々しくて、大人びっていて、惹かれる存在なのだが、寝ている時は子供のようにな无邪気な表情を浮かべて寝ているのだ。六日間でこれを見るのがあたしの習慣になってしまっていたのだ。

そして櫻井さんは朝が苦手らしく起こすには手間が掛かってしまう。

あたし的にはもうちょっと寝顔を見ていたいのだけれど、早くしないと朝食が冷めてしまうので起こすのであった。

「早く起きてください。朝食が冷めてしまいますよ。」

あたしは櫻井さんを体を揺らしながら起こそうとした。でも

「ッ!？」

あたしは声をあげる間もなくいきなり体を揺らしていた腕を掴まれベットのの中に引き摺り込まれた。何が起こったのか未だに理解出来ていない状況である。

「四日前からも言っているが櫻井じゃなくて“紫郎”って呼べよな。」

今、あたしの措おかれています。状況は紫郎さんの顔が眼前にあるのだ。それはもうあと少しでキスができるぐらいであった。

あたしは恥ずかしいので胸がいっぱい顔を真っ赤にして紫郎さん

とは反対の方を向いてしまっていた。

「さすがにこれは失礼だったね。ごめんな。」

紫郎さんはそういうとあたしの髪を優しく撫でてくれた。なんてあたしは紫郎さんに撫でられただけで、こんなにも嬉しいんだろう。

「別にいいです。それより朝食が冷めてしまうので早く顔を洗ってきて下さい。」

あたしはそのまま立って部屋から出て行った。そうしないとあたしはあのまま撫でて貰いながら和んで、ずっと動けなかったと自分で分かってしまっていたからである。でもあたしは紫郎さんに撫でられた髪の部分を触りながらキッチンに向かって歩いて行った。

それから朝食食べて、家の掃除、洗濯物を干したり、動物達に餌をあげたりしていた。六日間で大いぶこの家を把握できたけど、地下室みたいなどころだけは行っていない。何故なら扉が開かなかつたので行きませんでした。

そして紫郎さんは部屋に籠って色々な書類の整理をしたりしていた。

あたしと一つしか変わらないのに紫郎さんは世界中を飛び回ったりして忙しい身であるのだ。でも一週間休暇みたいのを貰ったらしくゆっくり家で過ごしているのが今、家にいる理由だと言っていた。あたしは思ってしまった事がある。あたしなんかが大切な休暇中に居ていいのかと思い、紫郎さんの部屋にお茶とお菓子を持って行くついでに聞いておこうと思って向かっている所だ。でもこの不安な気持ちはなんだろう。

部屋に入る前にノックをして入った。

紫郎さんも丁度いい所で思ったらしく休憩しようと思っていたところだった。

「あの…一つ聞いてもいいですか？」

あたしはお茶を注ぎながら紫郎さんに勇気を出して聞いてみた。

「あたしって邪魔ですか？」

「んっ!？」

紫郎さんはお茶を飲んでいたので吹きかけていた。あたしは何かいけない事でも聞いてしまったのかと思ってしまった。

「急にどうした？」

紫郎さんは驚いて様子であたしに聞いてきた。

「紫郎さんの休暇中なのに部外者である、あたしなんかと過ごして…いやではないんですか？」

「いや、全然。むしろ感謝しているぐらいだぞ。」

紫郎さんの答えは即答だった。一秒という間もなくすぐに応えてくれた。

「今は家族が出掛けて誰も家にいないから、普通は全部俺がやらなきゃいけないかったのけれど、全部なごみがやってくれて本当に感謝しているんだぞ。ありがとうな。」

そう言ってからまたあたしの髪を撫でてくれる紫郎さんにあたしは胸の鼓動が高まってしまった。やっぱりあたしは紫郎さんの事が好きになっていたのだと今気付かされた。

「……………えへへ。」

あたしは本当に嬉しかった。今のあたしは満面の笑みであろう。自分でもこんな表情ができるなんて思ってもいなかった。

「そういえば、さっき“紫郎”って呼んでくれたね。まださん付けなのを改善すれば完璧なんだが、ありがとうな。」

あたしは自然に紫郎さんと呼んでいた事に今気付いた。でも紫郎さんを呼び捨てで呼ぶことは一生できなさそうだとあたしは思った。

それからはあたしが素直になったからなのか、あたしは耳掃除や肩を揉んであげたりと色々とやってあげました。あたしは紫郎さんが笑えばとても幸せな気持ちになるので何でもしてあげたいと思っっているんですけど、紫郎さんは中々あたしに甘えてくれないのであ



しから甘えるようにしてみたら、紫郎さんもあたしの事を受け入れてくれてカップルみたいにイチャイチャしていました。

「紫郎さんはどうゆう女性が好きなんですか？」

今の状況はあたしが紫郎さんの膝に乗って後ろから抱きつかれている状況である。

そしてあたしは優しく頭を撫でてくれている紫郎さんに聞いてみた。あたしはもう…紫郎さんから離れられないから、紫郎さんの好みになって一生尽せる女になろうと決心した。

「好みね…強<sup>し</sup>いて言うなら今のなごみだな。」

紫郎は撫でるのを止めずに自然の流れのように言っただけだ。

「ほ、本当ですか!？」

なごみは後ろを振り返り、紫郎を真正面から見る体勢になった。体は密着状態で顔もかなり近付いている状況だ。

「事実だ。今こうして抱き合っているのがなりよりの証拠だ・・・  
本当なら襲ってしまいたいぐらい愛おしいのだがな。」

あたしは自分の胸の鼓動が早くなるのを感じた。頬も赤くなって恥ずかしいのだと思った。でも紫郎さんの最後の言葉まで全部聞こえていたので意識してしまっているんだと自分で解釈かいしゃくしてしまった。紫郎さんが我慢しているのならあたしがするべき事は

「紫郎さん!!」

「んっ!?!」

あたしから紫郎さんに・・・き、キスをしてしまった。一回目は軽く触れる程度だったのだが、二回目、三回目と間を開ける暇もなくキスをしてしまった。でもなんでだろう、体が疼うずいてしょうがない。何十回は軽いキスだったのだけれど、あたしからディーブなキスをしていたのだ。どんどん紫郎さんを求めてしまう。止められない。

「ハアハアハア。」

あたしは紫郎さんにもたれながら息整えようとするのだが、整えるどころか息が荒くなっていた。もう何を考えているのか分からない状況になっていた。脳が紫郎さんを求めていた。

「紫郎さんあたしの初めてあげます。」

あたしは紫郎さんを押し倒して服を脱ごうとした。だが

「ちょっと待ちいっやー！ 久々に帰ってきてみたらなんなんやー  
！」

「紫郎さん〜 私達というものがありませんよ それ  
と自分の特異体質について分かっているのですか〜？」

「女性を連れ込むなら玄関の靴を片しておくべきでしたね。主。」

胸を隠すようにサラシを巻いた女性と胸が飛び出そうなチャイナ服を着た一言で言う女性と髪が水色で凜とした女性に邪魔された。他にも女性がいた。

なんでも帰ってくるのが早くなつたから驚かせようとしていたらしく気配をなくして家に来たらしい。それからして続々と家族の人達が家に帰ってきたのだが、あたしが思ったことは一つ…

…なんで女性しか居ないのかと家族にしては多すぎるだろうということだ。

それから家族の人達になんであんな展開になつたのかという事を聞かれたり、どうやって出会つたのかとか色々と事情聴取されてしまつた。

一応皆さん納得してくれたみたいで食事をしながら打ち解けられたとあたし的には思いました。あたしより年下に見える子やあたしと同年代に見える子や姉的存在の人やお母さんの存在の人や色々な女性が紫郎さんの家にいることが分かりました。

そしてあたしは家に自由に入れる許可を貰いました。

でもある条件を出されました。

その条件とは…「結婚ができる年齢までは性行為は禁止」という条件でした。最初は納得できなかったけど、紫郎さんに会えなくなる苦しみに比べたらそのぐらいどうにかなると思いい了承しました。

・ ・ ・ ・

「椰子さん、椰子さん」

あたしは思い出<sup>ぶ</sup>老けていたせいなのか、周りの音が聞こえていなかったらしい。そして周りを見ると教室にはあたしと黛さんしかいなかった。

「おい、大丈夫なのか？ なごみん？」

松風にも心配されている。

「大丈夫です。ちょっと昔の事を思い出していて。」

黛さんの顔はとても心配そうにあたしを見ていた。

「それよりクラスの間中は何処に行つたんだ？」

あたしは何時の間にか消えていたクラスメイトの事を聞いた。

「先程アナウンスで決闘が行なわれるらしく全員それを見に外に出て行きました。」

黛さんの話を聞いて理解した。グラウンドを見るとかなりの生徒が外に出ている。

「それと決闘の審判をする人が学長さんと紫郎さんみたいですよ。」

それを聞いてあたしは席を立ち、すぐさま外に出ようと走った。

） 椰子 なじみ side out ）

） ??? side ）

走って行ってしまった椰子さんを見て私は啞然とするしかなかった。  
紫郎さんの名前を出した瞬間に目が輝いていたのを私は見ていた。

「松風。椰子さんにとって紫郎さんはとても大切な存在なのですね。」

「それを言うならまゆっちだってそうだろ！」

私は誰もいない教室で松風を手に乗せて話していた。

実をいうと私も久し振りに会ってさらに存在感が増している紫郎さんを見て魅了されてしまいました。昔も存在が凄かったですけどそれに磨きが掛かっていました。

「まゆっちも早くグラウンド出ようぜ！」

私はつい思い出に浸ってしまつとこゝろでした。

「そうですね。では私達も行きましょうか。」

私はそういつと席を立ち校庭向かって足を進めた。

） 黛 由紀江 side out ）





## 第六話 ツンデレクイーン（後書き）

いや本当に申し訳ありません。気持ち悪くて・・・

あとまゆっちが手抜きになってしまったので、何話かしたらまゆっちの過去の事も話したいと思います。

なごみんは・・・序盤はツン：五割、デレ：五割：5：5です。

最後ら辺は・・・ツン：零、デレ：十割：0：10でした。

なごみんの声優とのどかさんの声優は同じの海原エレナです。

まゆっちとなごみんと此処では登場してませんが大和田も一緒のクラスという設定です。

今回は文句を言われていいぐらいに自分勝手に書いてしまいました。マジでスイマセン。

第七話 一子&京 対 クリス&瀬麗武 前半戦 ( ) (前書き)

誤字脱字があつた場合は報告を御願ひします。

後小説内に出てくるキャラに違和感がありましたら、是非ともご報告を御願ひします。

戦闘の表現の仕方が全然分からなかつたので、分からない所が多くあるかもしれません。

そのときは分からない場所の報告を御願ひします。

第七話 一子&京 対 クリス&瀬麗武 前半戦 ( )

アナウンスが流れてグラウンドに次々と見物人達が集まってきていた。

見物人達は本人の自由参加なので別に来なくてもよいのだが全校生徒が見に来ている。まるでお祭騒ぎである。

「朝御飯をぬいた人におにぎりはいかがですか？」

料理部が部活動の如く食べ物を販売しているという祭だ。

そして決闘の原因を作った張本人は…

「やっぱりこうゆう日には外で寝るのが一番かもな」

今は四月の下旬なのだが、ちょっぴり肌寒いが日差しが当たって暖かい季節だ。

紫郎はグラウンドに出てのんびりしていた。その周りにはいつもの幼馴染メンバーや知り合いのメンバーが揃っていた。そしてもう一人…

「そうですね、紫郎さん。あ、今日からは“センパイ”って呼んだ方がいいですね？　そう呼びます。　それと寝るなら膝を貸しますけど…？」

今紫郎の隣にいる子は首を少し傾げて可愛らしい表情をとりながら自分の膝を叩いて「どうぞ」と言わんばかりの行動をしていた。そして紫郎もその行動を可愛らしいと思いつつ頭を撫でていた。

この子の名前は椰子やしなごみという。あだ名は「ヤシ」「なごみ」「コナツツ」、エリカからは「なごみん」と呼ばれている。紫郎より一つ下であり一年C組である。第一印象は背の高いきつめの美人なのだが、紫郎の前では思いつきりデレている。スポーツも出来て、勉強もそれなりに出来るのだが人間関係の面でだいぶ問題があり、孤独を好み、友達を作らずにいつも一人で行動しているのだ。なごみの性格を治したいと紫郎は思っている。

「そうだね。じゃあお願いできるかな」

紫郎はそう言つと彼女の膝に頭を置こうとしたのだが

「人の目の前でイチャつくんじゃねえー!!」

きぬが紫郎目掛けて飛び蹴りをしてきた。

「言ってくればお姉ちゃんもしてやってるのにー！」

乙女も蹴りを放って来た。きぬと違い当たったら骨でも折れそうな威力だ。

紫郎達のカップルみたいなりとりにキレてしまったらしい。

「はいはい。スイマセンでした。じゃあ今度は乙女姉さんに頼みますよ。きぬは口調を治してからだな」

紫郎は瞬時になごみの前に立ち、きぬの攻撃を華麗かたいに受け流して、乙女の攻撃を受け流しつつ背中から抱きついたのであった。そして

きぬは地面を叩いて悔しそうにしていた。そしてもう一人の乙女はあたふたしながら顔を真っ赤に染めていた。

「あ、う、な、なんで抱きついてるんだ!？」

紫郎は抱きついていたので乙女の体温が徐々にあがっているのを感じていた。紫郎は乙女の体に抱きついて思ったことがあった「乙女姉さんは拳法部で鍛えているのにそんなに筋肉がついていないんだ」と思いつつ乙女の体の感触を確かめていた紫郎であった。

「センパイ。そろそろ離れて下さい。抱きつきたいなら私に抱き付けてください!」

「乙女よりも我の方が抱き心地は良いと思っぞ」

「あー! 揚羽ちゃん。抱きしてめて欲しいから自分に誘導しているっー。というか紫郎くん! 夢にも抱きついてよ」

グラウンドにいる全員からの視線が集中していて乙女の恥ずかしさが限界に足しそうになった所で紫郎は乙女を開放したのであった。

でも十分に抱き心地を味わえて満足している表情を浮かべていた。

そして開放してすぐに夢と揚羽に両腕に抱きつかれていたのだった。

でもそれ以上に怖かったのがなごみであった。「くふふ」と笑いながらこちらを見ているのだ。

紫郎はああいう行動をする人を知っているのでよく分かっていた。あれは嫉妬で我を忘れているのだと・・・

そして何故だか背中から悪寒がする気がして振り返ろうとしたのだが…

「おいおい、私以外とイチヤついてんじやないぞ紫郎!」

その声と同時に紫郎はグラウンドの中心に投げられた。

今の発言したのは



「姉さん！ あれって本気で投げ飛ばしたでしょ！？」

大和が姉さんと呼ぶ者はただ一人であった　川神百代であった。

・ ・ ・ ・

先程までなにやら揉め事があつたみたのだが、今は全校生徒がグラウンドに集まって見に来ているのだ。

「これより川神竜鳴学園伝統、決闘の儀を執り行つ！　なお今回はワシと平蔵、それから原因となつた櫻井紫郎がこの決闘を見届ける」

鉄心の言葉で周りは騒ぎ出した。

「決闘の儀、決闘の儀だ!!!」

「いいぞー、やれー!!!」

「きゃあー櫻井くんこっち向いてー」

誰かが言っているのが聞こえるがそれよりも周りではそれ以上に盛り上がっている。

久し振りに行なわれる決闘に生徒達は楽しみで仕方ないらしい。

それと転入初っ端から問題になっている紫郎の事もあるらしい。

そして紫郎はもうモテているらしい。

「四人とも前に出て名乗りをあげるが良い!」

鉄心と平蔵は冷静に転入生二人を観察していた。

一子や京の実力は鉄心と平蔵は知っていたが、この二人は今日来たばかりで実力が分からないままであった。故意こいに隠しているんだとは分かるみたいだが、本質までは見抜けてはいなかったらしい。

「二年F組、川神一子！」

「右に同じ椎名京」

一子は元気いっぱいに言ってくれたのだが、京は暗い感じを漂わせる感じで言ったのであった。二年F組のメンバーや他の生徒達も一子達の方を応援しているらしい。そしてキャップの賭けの方も一子側の方が多いいみたいだ。

「今日より二年F組、クリスティアーネ・フリードリヒ」

「同じく橘瀬麗武」

先程の二人と同様であった。見た目からしてもうやる気満々という感じのクリスに対してされほどやる気があるのか分からない瀬麗武であったが目の前の二人を威嚇する様に目を向けていたのであった。二年F組の委員長である甘粕真与や佐藤良美は両方の応援していたのであった。

男子達も今日来た転入生を応援する人も結構居たみたいだ。

「今回は特別にタッグマッチじゃ。どちらか一人が戦闘不能かギブアップをした場合はそこで試合終了じゃ。勝負がつくまでは、何があっても止めぬ。が、勝負がついたにも関わらず攻撃を行なおうとした場合はワシが介入させてもらう、良いな？」

「承知したわ！（分かった）」

「承った（了解した）」

鉄心の説明に四人とも了解したのを確認して鉄心が言おうとしたのだが…

「四人共、一言だけ言っておくぞ “許可”する」

鉄心の後ろに居た紫郎が急に前に出てきてそれだけ言ったのであった。その行動に誰もが驚き、その言葉の意味を理解できないでいた。

「そしてワン子、重りを全部外せよ。愛紗と凧は万が一の為に結果をはっておいてくれ」

「「御意！」」

愛紗と凧は返事をして地面に手を置いていた。ただそれだけであったが武術を極めている者にはちゃんと分かるくらい高密度の気の結界が張られていたのであった。

紫郎の言葉にしぶしぶ一子は両手のリストバンドと足に付いている重しおもをその場に落としたのだ。落ちた重しからドスッと重そうな音が聞こえたのであった。

その音を聞いたクリスと瀬麗武はもちろんだが、生徒達は驚きを隠せなかった。

「面白い！」

「私がどれほど成長したか見ていてくれ紫郎！」

クリスはもちろんだが、瀬麗武もやる気が入ったみたいだ。

「うわあ、体が軽い！ 久し振りにやってやるわよ。見ててね紫郎！」

「私頑張るから紫郎！」

一子はその場で体を軽く動かし久し振りに軽い体に慣れようとしていた。

京は拳を握ってやる気を出していた。

「それではいざ尋常に、はじめいっ……いっ……」

・ ・ ・ ・

「先手必勝おー！」

「……！」

一子が開始と同時にクリスに仕掛けた。そして一子の後ろから京が瀬麗武に牽制代わりに矢を射いた。一子の体の横を矢が通り過ぎているに対して一子はまったく動揺せず当たり前のような動作だった。さすがは長い付き合いだけの事はある。

これに対してクリスと瀬麗武は目と目を合わせてどちらを相手するか決めていたらしい。

だがその間に一子が突っ込んできていたのであった。

二人が前を見た瞬間にはクリスの目の前には一子が瀬麗武の前には矢が飛んできていたのであった。

190

「では、自分は目の前の相手に当たる」

「私は椎名という者を迎撃する」

クリスは迫っていた一子の薙刀にレイピアで受け止めた。

瀬麗武の目の前まで来ていた矢は叩き落とされた。

クリスは言った通りに一子に当たっていた。二人共目にも止まらぬ速さで互いの武器を打ち合っているのだが、両者共相手の様子を伺う程度の力しか出していないと分かった。

一方、瀬麗武はその場から動いた動作も感じられないほど自然体でいた。構えも取ろうとせず左手にある刀を抜く事もせず一体何があったのかと思わせる現象に生徒達の反応は？

(今の瀬麗武は刀を背負ってません)

『はっ？』

一般人には何が起きたか理解できていない。それもそのはずだ。普通の人では見えない速さで抜刀して叩き落して鞘に刀を納めていたのだから、この動作に一秒も掛かっていない。

京もその動きが掠れて見えた程度なのであったが一体何があったのか理解出来ていなかった。



「ふん。この程度で動揺するとは笑止!!」

「ッ!!!？」

京はちゃんと瀬麗武を見ていたのだが一瞬で間合いを詰められていた。瀬麗武は紫郎から教えてもらった瞬動しゅんどうというものを使っていたのであった。そのおかげで高速移動ができ、間合いを詰めていたのだ。

間合いを詰めた瀬麗武は左手に持つ模造刀もぞうとうを京の胴目掛けて抜いていた。

「くっ!!」

京は後ろに飛び退のいた。そのまま距離を取る為に後方飛んでいる最中に瀬麗武に矢を三本放っていた。

「無駄だ」

瀬麗武はそれをまたもや高速で叩き落していた。一般人には瀬麗武の手が一瞬消えたように見えている。

「櫻井流剣術：矜恃きやうじ」

そついうと鞘に刀を納めていた。京は目を凝らしてよく見たら手の動きが見えることに気付いた。

「紫郎の技を使うなんて反則」

「紫郎が“許可”すると言ったではないか」

二人はそついうと構えを取った。瀬麗武も構えを取っていた。

「じゃあ私も」

京がそつ言った瞬間に瀬麗武はもう矢を弾いていた。

「速いッ!!?」

京が超高速で矢を放っていたのであった。それはもう矢が見えないほどだ。

「櫻井流弓術、疾風<sup>はやて</sup>」

京はそう言つと四本ほど間を開ける暇なく放っていた。

・ ・ ・ ・

） 百代 side ）

今私の目の前では壮絶な戦いが起こっていた。一子とクリスという子が激しく打ち合っているのも壮絶だが、それよりも京と橘瀬麗武という者の方が気になってしまった。

さすがは橘という名を持つだけのことはある。

「おいおい、転入生達の強さ異常じゃないか!？」

「僕には何が起きているんだかさっぱり分からないよ」

岳人やモロはまったく何が起きているか見えていないらしい。あれを見れる者はかなりの武術を極めている者でないと無理だ。

「姉さん、一体何が起こっているんだ？」

私の舎弟である大和が聞いてきた。キャップは一人で盛り上がっているみたいだ。

「あれは一般人に見えるものではない、多少武術を極めた者でもあれを見るのは不可能だ」

私の後ろから揚羽さんが言ったのが聞こえた。

「そうだ。あれはもはや達人クラスの戦いだ」

川神院にいるルー師範代でもあの瀬麗武の技を見切るのはキツイだろう、私はそう思ってしまった。

「そうだろうな。あれは八割ぐらいの完成度だが瀬麗武は見事に使っている。さすが教えた甲斐があつたよ」

私達の近くに審判員である紫郎が寄って来た。紫郎の表情は嬉しそうであつた。

「それにしても京の技もキレがいいな。さすがは地道じみちに磨みがいてるだけの事はあるな。後で撫なでてやるつ」

紫郎は顎に手をやり真剣な表情で京と瀬麗武の戦いを見ていた。

「それより紫郎！　なんで京はあんなに強くなっているんだ！？  
京がお前の技を使っているのを見たことがないぞ！！」

私は紫郎の肩を掴み寄せ抱き寄せた。

紫郎もあまり意識していないのかその行為を受け入れていた。

私はこれでもかというぐらい胸を押し付けているのだが紫郎はまったく反応してくれないのだ。昔と比べてだいぶ大きくなっているのに！！　今でも大きくなっているというのになんだんだ紫郎は！！

197

紫郎は紫郎でヤバイほど気になっているものの顔に出さないようにしているだけであった。

「それはアレだよ。俺の許可なしに櫻井流を使っではいけないって  
言っただけだからな。非常時の時は別だがな！」

紫郎はいけしゃあしゃあと言っただけだ。コイツは故意こいに隠させて

いたのだな。

「じゃあなんでそうやって隠していたの？」

夢が私とは反対側に抱きついて紫郎に聞いた。

「それはな。強者を求めている百代と戦わされる危険性があったからな」

紫郎は夢の頭を撫でながらそう言ったのであった。

くそおー！　なんで私は撫でないんだこいつはああー！！！！

「ハハハ！！　それは確かにありそうであるな！」

揚羽さんが高笑いをしていた。

さすがの私もそれは当たってしまったと思っているとってしまった。

でも…それよりも夢の頭ばかり撫でてないで私も撫でろ！！

「百代姉さんは放課後に俺の家くれば相手してやるから今は我慢してな」

「本当かあ！？」

私はこの事を聞いて先程から考えていた事を撤回した。先程までこの試合が終わったら紫郎を強襲（強襲しつ）して戦いに引き釣り込もうと思っていたのだ。

「ああ。此処に来る前から思っていたからな」

紫郎とは四年間の間戦ってはいない。理由はじじいから止められていたからである。



その為に揚羽さんや乙女さんに相手をしてもらっていたがな。

あのじいさえ居なければ私は思う存分紫郎と戦えるのだがな。

「それとこの事は鉄爺に話してあるから大丈夫だよ」

「ふ、ふ、ふっはっはっ！！！ それは感謝するぞ！」

紫郎からその事を聞いて私はにやけているに違いない。

これほど胸が躍おどるのは紫郎と初めて戦った時以来だ。

「センパイ。川神先輩と戦っても平気なんですか？ センパイが怪我でも負ったら…私は…」

紫郎の前から抱きついてきた者は私は見たことがあった。

私が可愛い一年生はいないかと思いきやと見て周っていた時に見た子であった。だが、その時には物凄く冷たい目で見られて話す機会がなかった。

そして今現在その子が今紫郎に抱きついているんだ。

これは驚くしかなかった。

「なごみん!?!」

「椰子さん!?!」

「てめえーココナッツ!! また抱きつきやがってえー!」

「紫郎は相変わらずモテますね」

「だな」

「くそおー悔しくなんてないぞ。悔しくなんて…!」

私のすぐ後ろに対馬ファミリーや生徒会メンバーが居た。

エリカは口に手を当てて驚いている様子であった。よっぴーもそんな感じだ。カニは今にも殴り掛かりそうであったがスバルが止めていた。そして対馬ファミリーの三人の男共も呆れた顔をしていたが、一人は号泣している。

「ちょ、ちょっと!?!? 一体なごみんなに何があったらあんな表情をするのよ!」

エリカは紫郎に詰め寄り話を聞こうとしたが

「一子が動き出すみたいだぞ」

私はその言葉を聞いて目を一子とクリスの方に向けた。

） 百代 side out ）

瀬麗武と京の戦いは矢を射って弾いての繰り返しであった。

だがもう一方の方で動きがあった

先程まで打ち合っていた一子とクリスであったが一子が後方に少し退いたのだ。

「やるわね。じゃあそろそろ本気で行かせて貰つわよー!」

「それは面白い! 相手の手を探るのにも飽きてきたのでな」

一子とクリスは再度構えを取った。

そして

「 ていつ!」

クリスの背後に一瞬で回り込んで武器である薙刀をクリスに喰らわせようとしていた。

一子が一瞬で移動したのは瀬麗武と同じ技である瞬動であった。

「なっ！！？」

クリスは間一髪の所でその攻撃を避けていた。

だが、微かに髪に掠っていたのであった。

「なるほど。紫郎は私やマルさんや瀬麗武の他にも色々と人に技を教えているみたいだ」

クリスは一人で何かに納得したみたいだ。

「さあーどんどんいくわよ！！」

一子はそういうと瞬動をしながらクリスに容赦ない攻撃をしていた。

またもや一般人にはまったく見えないのであった。

「（この程度なら紫郎やマルさんには遠く及ばないな）」

クリスは一子の攻撃を髪を靡かせながら華麗に避けていた。最初は驚いて対応が遅れていたものの自分も瞬動を見慣れている事により今では冷静に対応しているのであった。

「行けえー押せ押せ押せ押せーっ！！」

「頑張つて！！でもクリスちゃんも頑張つて！」

「忙しいな。委員長は」

一子が押しているのを見て二年F組のメンバーは一子を応援していた。

委員長は両方応援していたのであった。

「避けてばかりじゃ、アタシには勝てないわよ！」

一子は怒涛どたうの攻撃を繰り出す。クリスは避けたり、レイピアで受け流したりと決め手になる一撃が決まらない状況であった。

「なんで当たらないのよ！」

一子は自分の攻撃が当たらない事に苛立っていた。

もう何十回も雑刀を振ったり突いたりしているのだ。

「では行くぞ!!」

クリスは一子の攻撃を受け流して大きく体勢を崩させたのであった。

その際にクリスは突如仕掛けてきた。

「やーっ!!」

クリスは一子の肩を目掛けて鋭い突きを放った。

「!!!? 迅いつ!」

一子はクリスの突きに対して対応が間に合っていなかったのだ。

「くうっ!!!」

すれすれで回避をした一子はそのまま後方に飛び間合いを取った。

先程までのクリスとは違いまったく見えない突きに対して周囲が静まりかえっていた。

「おお!! すっげえー! 四人共やるなあ!!」

「なんなんだ! この戦いはーっ!」

「くうー??」

「ありえないわ!?!」



静まり返っていた生徒達は次々と歓声をあげていた。

頭を押さえている者もいたのだが、大半の生徒達は盛り上がった。

「続けていくぞ！ 次は仕留める」

「上等よっ！！」

二人は武器を構えた。

「行くぞー！（行くわよ！）」

同時に瞬動をして高速で移動して戦い始めた。

武器がぶつかりあう音しか聞こえない状況に生徒達は啞然とするしかなかった。

「間合いには入らせないわよ！」

「そんな事はわかっている」

クリスの攻めに一子は守りながら反撃しているのだが簡単に受け流されてしまっていた。

「（ここは使うしかないわね）」

一子は何かを決意した表情をした。

「櫻井流雑刀術」

一子はその場で高速回転をして

「つじかせ  
辻風！」

その技はクリスのレイピアを持っている手を目掛けて飛んできた。

「これは受け流せないな」

クリスは当たる寸前に瞬時に判断して後ろに飛んだ。

一子の技は外れたのだが一子はまだ回転を止めていなかった。

「避けられた！？ でもまだよ！！」

「ッ！？」

一子の攻撃を避けたクリスであったが後ろに飛んでいる最中に勢いの強い風に急に襲われ体勢を崩していた。その為に着地も無理な体勢になりそうであった。

急な風は一子が高速回転した時に生じたものであった。

「もらったぁー！！」

一子はその隙を逃がさず間合いを詰めて薙刀を振り下ろしていた。

「櫻井流剣術」

クリスは体勢悪く着地したせいなのか体の体重が全部脚にまわっていたのであった。

だが、それでも何かを仕掛けようとするクリスであった。

「麒麟！」

一子の薙刀が接近しているのにも関わらず真っ向から迎え打っていた。

その突きは今までとは桁違いに鋭く速かったまさに神速といえる突きを放っていた。

・ ・ ・ ・

） 由紀江 side ）

私は皆さんからだいぶ離れた木の陰で一人座りながら観戦していました。

でも私は決闘をしている四人よりも紫郎さんに甘えている椰子さんの方に眼が向いていました。

「まゆっち。せめてなごみんの所に行こうぜ」

「いいのですよ。私が行ったところで邪魔になるだけです」

私は松風と二人だけで話していました。

「でもよ」「いいのです。あんなに嬉しそうな椰子さんの邪魔をしてはいけません」「まゆっち」

私は二人だけで決闘を見ていようと思っただけでしたが

「こんな所に居たんだ。ほら、もっと近くで見よう」

何時の間にかすぐ近くに椰子さんが居た。

先程まで紫郎さんに抱きついてたのに…

今私の目の前に立っており手を差し伸べている。

その手が私にはとても嬉しく思えてしまった。

「ほら、紫郎さんも呼んでいるよ」

椰子さんが指を指した方には 紫郎さんが笑顔で手招きしていた。

「紫郎さん…センパイは学長と一緒に審判員だからあの場から動けないらしいからあたしに頼んで呼びに行かせたの」

椰子さんは何時もより口調が優しく感じるのを私は感じていた。

教室で見た笑みよりもさらに嬉しさが伝わってくる表情をしていた。

「でも…いいんですか？」

「何が？」

私の問いに椰子さんは何がなんだか分かっていなかった。

でもこれは私が悪かったのだ、主語を言っていなかったから。

「わ、私が二人の邪魔をしても？」

「二人？」

「紫郎となごみんの事だぜ！」

松風の言葉を聞いて椰子さんは頬を少し染めていた。

「別に黛さんが気にする事じゃない。それに紫郎さんは誰にも拘束できない存在だから」

その時の椰子さんの表情は一瞬だけ暗かった。

自分の好きな人が他の人女性にも絡まれていたりしたらせつなくなりますね。

「…今はその事は関係ない。早く行こう」



椰子さんは手を差し伸べてくれた。

「…で、でもじゃない！」えっ!？」

「謙虚な所は良いと思うけど、謙虚過ぎるのもどうかと思うよ。あたし的にだけどね」

その言葉を聞いて私は後悔していた。

ただその手を握ればいいだけなのになんで私はこつこつ簡単な事ができないんだと…

「遠慮なんてしなくていい。あたしも紫郎さんもそんな事は望んでもないし、要求もしていないんだから」

椰子さんからその言葉を聞いて私はなんだかとても楽になった。

それから心から感謝したいと思ってもいた。

そして私は椰子さんの手を握っていた。

その手がとても暖かくてとても安心ができた。

） 由紀江side out ）

その様子を見ていた者達がいた。

「やっぱり紫郎は優しいね」

「ユキの言つとおりであるな。さすがは“愛すべき希望”と世界中から呼ばれているだけはある」

「良く分かんないけど紫郎くんは凄いよ」

「さすがは私の男だ」

「ココナッツめえーああやって紫郎の好感度をあげるつもりだな！」

「八年間の付き合いだけど紫郎の気配りの良さは凄いものね」

「薫の事は私も気になっていたがこうも簡単に解決するとは！？  
お姉ちゃん嬉しいぞ」

「……（紫郎くんって優しいんだ……エリーが好きになるのが分かったかも）」

小雪、揚羽、夢、百代、きぬ、エリカ、乙女、良美と女性陣が紫郎の行動に対して気付いていた模様だ。

「さすがは紫郎だな。アイツの行動に無駄はないな」

「なんかよく分からないが紫郎がすげえー存在なのは知ってるぞ！」

「キャップらしいね」

「くそおー紫郎は相変わらず天然フラグ建築家かよおー！」

「違つぞ岳人！ アイツは天然女殺しだ！」

「何をやってるんだ？」

「紫郎が優しい事なんて昔から知ってる事だろ」

大和、翔一、モロ、岳人、フカヒレ、レオ、スバルの男子陣も紫郎の行動に気付いていたらしい。

当の本人はというと……

「一子は攻撃の重さ、クリスも重さ、京は技をもっと教えろとして、瀬麗武は「矜持」の時に鞘に戻す時の動作を早くする事かな。後は

」

色々と決闘の事をぶつぶつ言っているのであった。

第七話 一子&京 対 クリス&瀬麗武 前半戦 ( ) (後書き)

一子は一体どうなるかっ!?

っていうか一子が以上に強くなっている様な…

戦いの話よりも他のメンバーが目立っていたかも!

今回は自分の苦手な戦闘シーンだったので全然上手くできた気がし  
ませんでした。なので直した所があったりしたら是非とも感想にし  
て書いてください。

厳しく書いて下さって結構です!

〜技の説明〜

櫻井流剣術：矜持きゆうじ

〜説明〜

鞘に収まっている刀を高速で抜刀して斬り出す技である。  
自分の間合いだけ高速で切り刻む。

完成形態は鞘に収めなくても使える状態である。

櫻井流弓術：疾風<sup>はやて</sup>

〔説明〕

瞬時に矢を次々と放つ技である。  
相当の技量と修練を積んだ者に使える。

ただしに連続して使うと相当指に負担が掛かるのであまり多くは使えない技である。

櫻井流薙刀術：辻風<sup>つしかぜ</sup>

〔説明〕

その場で高速回転して勢いがついた所で相手の武器や手を目掛けて放つ技である。

この技を避けられても急回転して起こった風が体勢を崩させたり、顔に一気に吹き掛けてたりと何かしら起こる技である。

だが急な回転で目が回ったり、高速回転中が隙だらけなので弱点である。

一子は慣れていたので目が回らなかったのであった。

櫻井流剣術：麒麟きりん

〔説明〕

鋭い突きを相手の腹部に放つ技である。この突きは神速にも等しい。威力は人によって異なるが自身の体重をそのまま突きにのせるのでかなりの威力を持つ。

自身の体重が乗っているぶん隙も大きくなってしまふのが欠点。



**第八話 一子&京 対 クリス&瀬麗武 後半戦（前書き）**

今回の話は短いです。

誤字脱字があつた場合は報告を御願ひします。

第八話 一子&京 対 クリス&瀬麗武 後半戦

クリスの技である麒麟きりんが一子に迫っていた。

一子は自分の薙刀を振りかぶってクリスに叩きつけようとしている最中であつたので動作が大きくなっており反応できていなかった。

「避けられないっ!?!(こつなつたら…!)」

一子は自分の薙刀よりもクリスの突きの方が先に当たると判断してとっさに武器である薙刀を離そうとしていたのだが

「クリス!! 退ひけえ!!」

「ちっ!!」

クリスが瀬麗武の声に反応し急に攻撃を止めてその場から後ろに飛んだのであつた。

クリスは常に冷静である瀬麗武が叫んだ事と異様な悪寒がしたのこの行動を取った様だ。

その行動は正解であった。

クリスが飛んで一秒もしない内にクリスが元居た地点の真上から矢が数本降ってきたのであった。

思いっきり地面に刺さっているので相当の威力があった。

「助かったわ京！」

「礼はいいから、目の前の相手に集中」

一子の後ろに張り付く様に背中越しに京が居た。

二人は瀬麗武とクリスに挟まれるような形になってしまっていた。

「瀬麗武ー！ 危うく直撃する所だったぞ！」

「すまない。まさか上空に放った矢があんな軌道になるとは思わなかったものでな」

一子と京を挟んだ二人は先程の京の攻撃について話していた。

京は先程から瀬麗武と戦いつつ一子の戦っている様子をチラチラ見ている様子だ。

そして一子が振りかぶって薙刀をクリスにぶつけようとした時に感付いたのであった。

クリスが何かを仕掛けてくると…

そのことに感付いた京は瞬時に数本の矢を上空に放ったのであった。放った瞬間に瀬麗武が仕掛けて来たのを間髪で回避しつつ反撃して隙を見せず戦っていたのであった。

目の前の瀬麗武にこれ以上の隙を見せたら確実に負けてしまうと判断しつつ冷静に一子とクリスの戦いを見ていた。

そして京の放った矢は上空高く飛んで勢いが弱くなってきて落下してくるのだが、京はこの現象が分かったのか、矢が風に流されてクリスの所に落ちていつているのだ。京は上空の風の流れやどのように吹いているかと瞬時に判断して放ったのであった。

でも確率的に一子にも当たるのを覚悟で放ったのであったが運が良くクリスの方に全部落ちたので「良かった」と内心ではハラハラな気持ちでいたのは京のだけが知っている。

そして瀬麗武が叫んだ隙をついて一子の背後へと移動したのであった。

「ワン子、短期決戦でいくよ」

京は一子にだけ見えるように自分の指の状態を見せていた。

京の右手の？<sup>ゆがみ</sup>をしている部分の指が軽く震えていたのであった。

これは京が使っていた技の“疾風”が原因である。

この技は指に物凄い負担を掛けてしまうというのが欠点であった。

「大丈夫なの？」

一子は心配そうな表情で京に言った。

「後十回も矢を放てないと思う。それに矢もあと十本」

京も応えた。

一子と京は小声でクリス達には聞こえないように話していたのであった。

京の矢筒には矢が十本しかもう無かったのであった。瀬麗武との戦いで相当消費してしまったみたいだ。

「この人達…今の私達よりもかなり強いよ」

「始めてから何回か打ち合っただけで分かってるわ。でも負けたくないわ！」

京は冷静に分析した結果、クリスと瀬麗武は自分達よりも一段階か二段階強い事が分かったのであった。

一子もさっきの一撃や冷静に自分の技に対応してくる動作から察さっしていたらしい。

「言つと思った。じゃあ から して」

京は一子がそう応えると思っていたらしく小声で自分の考えた作戦を伝えていた。

「分かったわー！」

一子は京の言葉に同意して目の前にいるクリスに向かって構えを取った。

京も瀬麗武に向かって弓矢で矢を引いて構えていた。

「じゃあ」

「行くわよー」

二人の行動は誰も予想出来なかったであろう。

二人共一斉に                    クリスに仕掛けたのだから…

京は一子が言葉を聞いた瞬間に瞬動を使いクリスの背後に回ったのであった。

その行動に瀬麗武もクリスも驚くしかなかったのだが京が瞬動を使ってクリスの背後に回っていたのに驚いているようだ。

先程から京は一度も瞬動を使っていなかったので戦っていた瀬麗武はてつきり使えないのかと思っていたらしく、それがちよつとした油断になってしまった為に瀬麗武は少し反応が遅れてしまっていた。

「なあっ!!!?    二対一など卑怯なあ!」

クリスは目の前に一子、後ろに京が自分に攻撃をしてきたのに対して動揺を隠せないでいた。

クリスは元々一子だけを相手にするものと思っていたらしくこの行動は予想外としか言えなかったのだ。



「私は勝ちたいのよ！」

「褒め言葉だと貰っておく」

一子も京もそう言つとクリスに攻撃を仕掛けようとした。

「クリス！ 前の敵だけに集中しろ。私が後ろを守つてやる！」

クリスから見て大分距離があるのだが瀬麗武がちよつと怒っているような声で言つてきたのを聞いてクリスは瀬麗武の方に顔だけ向けたのであつたが

見た瞬間に戦慄せんりつが走つた。クリスは自分の鳥肌が立つたのであつた。

そしてこうも思つたのであつた

完璧に怒っていると……

だが怒っているのにも関わらずちゃん冷静にこちらを見ている事からクリスは背後の敵を瀬麗武に任せると内心で決心したのであつた。

瀬麗武が怒るのも無理はない。自分を相手にもせずクリスに仕掛けた事について非常に怒っていたのだ。

それはもう殺気が滲み出ているほどであった。

その殺気に生徒達は騒ぐのを止めていたのであった。あまりにも殺気が強過ぎて声も出せない状況になってしまっていたからだ。

だが、その殺気を感じて喜びを感じていた者も居たのであった。

「この殺気心地良いな！」

「揚羽さんの言う通りだ。（こんな濃い殺気は久し振りだ）」

「生徒達は少し離れた方がいいんじゃないか」

「橘さん凄いです」

「（けっ！ 最近の餓鬼ガキはこれぐらいでビビるのかよ）」

生徒達の中にもいる武術の達人者メンバーはこの状況でも普段道理に過ごしていたのであった。揚羽、百代、乙女、由紀江、あずみ達は当然のように言ったのであった。

最後の人の言葉は内心で言っていたのであったが表ではニコニコしながら自分の主の近くに仕えていた。

教員メンバーも啞然としている様子だ。鉄心や平蔵もこれほどの殺気を放てるとは思ってもみていなかったらしく冷や汗を掻いていた。

「なんか後ろから殺気がビシビシ当たってくるわね。京、速攻で決めるわよ。」

一子は背後から感じる殺気に恐怖心が出てきたもののそれを振り払い攻撃の動作に移った。

「あの距離から瞬動使っても間に合わない」

京は冷静に分析して距離的に無理だと判断し、一子と同様に攻撃動作に移った。

「川神流」

「櫻井流」

二人共決め技で仕留めるつもりだ。

一子も櫻井流だけではなく自分の名字にもある“川神”を使つつもりだ。

クリスから見ても一子の技が必勝の構えだと感付いたらしい。背後にいる京は完全に瀨麗武に任せたので気にする様子がまったくなかったのだ。

薙刀を大きく頭上に振り上げる一子、そのまま頭へ強烈な振り下ろしが来ると思ったら

「山崩し!!」

「疾　　ツツ!!?　　ぐはあ!!」

薙刀の刃筋は予想を覆し斜めに流れていったのであった

クリスの“脚”へと振り下ろされたのだ。

そしてもう一人の方の京は自分の技である『疾風』を放とうとしたのだが何者かに顔を掴まれて地面に叩きつけられたのであった。

何者かというのはクリスの決闘のパートナーでもある瀬麗武であった。

「!!!!」

クリスは当然驚いていた。

フェンシングの有効範囲は胴だけであり、薙刀は脚すらも攻撃できるのであった。

脚への攻撃が不慣れな人間ならば間違いなくこの“すね技”を喰らってしまっているはずであろうが

「この程度!」

ただ一つの誤算が

「ふ!」

「えっ? そ、そんな事ってありえないわッ!?!」

一子は驚きを隠せないでいた。

そして同様に

『えっ…?』

生徒達も驚くべき行動に啞然として口を開いていたのであった。

クリスは当然のように避けるのではなく当然のように薙刀のうえに乗って攻撃を避けたのであった。

常識人にとってはこんな事態は漫画やゲームの中でしかありえない

と思っていたのが現実でもできるといふ理論に覆されたのであった。

そしてクリスは反撃した。

「セエイ!!!!!」

「ぐあっ!!」

フェンシングには全身有効な種目もあり、クリスはそっちの  
方の専門だったのだ。

クリスの突きが一子の肩に炸裂した。

「~~~~~つつつ!!!」

悔しさと痛みでうめいていた一子。

「げほげほ!!!」

京の方は瀨麗武に勢いよく押し倒されて頭を地面に押さえつけながら刀を首に当てていたのであった。

京は勢い良く叩きつけられたので肺から一気に酸素が出てしまい咽むせていたのであった。

何故、瀨麗武が京を押さえつけているかというところ

「瞬動・極きまぐ…」

瀨麗武は瞬動よりも上の段階の技を使い、超高速移動してクリスに仕掛けようとしていた京の頭を掴み地面に叩きつけたのであった。

「それまで！ 勝者クリス、瀨麗武！！」

鉄心が勝者の名前を言った途端に周りの生徒達が騒ぎ出した。

ウォースゲー！ スゲー試合だった！

何が起こったのかさっぱり分からなかったけどとにかくスゲー！

転入生二人、凄過ぎるぜー！



あれだけの決闘を見たらギャラリー達は興奮するに決まっている。  
ドツと歓喜の声が湧き上がってきたのであった。

一子と京のクラスのメンバーも興奮しているのか、全く勝敗にこだわっておらず四人を物凄い褒めていたのであった。特に委員長二人、真与と良美は褒め過ぎていた程だ。

「うううう痛い」

レプリカとはいえ勢いよくレイピアで突かれたのだから相当痛いと思われる。一子も突かれた部分をずっと押さえながら苦い顔をしていた。

「どれどれ……これは大丈夫だな。少し冷やせば痛みも引くだろう。それと少しは痕あとが残るだろうけどね」

紫郎が一子の突かれた場所を見てすぐ判断して言ったのであった。決闘が終わった事で一子や京の近くに風間ファミリーが寄って来ていたのだ。

「それは良かった」

クリスは自分で突いて痕を残してしまうのが心配だったらしい。紫郎の言葉を聞いて安心したのであった。

「一子、手を挙げる」

「へっ!？」

紫郎が突如この場にあっていない場違いな事を言い出した。

一子や周りにいた人達も何がなんだか分かっていないみたいだ。

一子は最初は何がなんだか分かっていなかったが数秒ぐらいで紫郎が何をするのか理解してしまったのであった。

「手を挙げないなら口で言うがお前まだ腰の辺りにも重りつけているだろっ」

紫郎の言葉に皆が耳を疑った。気付いていた者もいたようだが。

一子は自分の服の下のウエストを黒い重りらしき物を巻いていたのだ。

そして一子は徐おもむろにその重りを外し地面に落としたのだが“ドスン”と重々しい音を立てて地面に落ちたのであった。

始まる前に外したりリストバンドよりも遥かに重いと察しることが出来た。

周りの生徒達もびっくりしている者もいればあんなハンデを背負って戦っていたのかと啞然としている者もいたのだ。

「さあ、今度は本気の本気の」

「バカか、もう勝負はついているし、本気を出さなかったお前が悪いぞ」

一子が怪我を負いながら戦おうとしているのを紫郎は軽く頭を叩いて一子を静止させていた。

一子はまだ元気があるようにも見えているが未だに突かれた場所を

気にしている素振りそぶりをしているのを見逃さなかった紫郎であった。

「一子はまだいい。京は何をしている？」

京は一体どんな行動をしているのか？

第八話 一子&京 対 クリス&瀬麗武 後半戦（後書き）

話の中にもありましたが、<sup>ゆがけ</sup>?とは矢を引く為に道具で指を保護する物です。

マジで決闘した四人は驚くべき強さにしてしまったZE

今回は原作の戦闘シーンを少し参考にしてみただけですけどどうですかね？

あまり上手く表現できていないのが自分の汚点だと思つので戦闘シーンをどうにか得意にしたいと思つている所存です!!

244

zinnさんの要望でこの『真剣で私に恋しなさい!』新たな人生の始まりpart2』のキャラの強さランクを作ってみました!  
是非とも見てください!

このランクは話が進みにつれて変わっていきます。  
まだ出ていない人はフルネームで書いてあります。  
ネタバレが少しあります。

に行けばいくほど戦闘力が低いという事です。  
は戦闘力的に同じという意味です。

紫郎  
家族組（恋姫メンバーの武官組） 百代 平  
蔵いたがきたつこ 〓 幾蔵 〓 鉄心 由紀江 〓 揚羽 〓 乙女 〓 瀬麗武 〓 板垣辰子  
南斗星ナトセ 〓 マルギツテ・エーベルバツハ フランク（メフィ  
ストフェレス状態） 〓 あずみ 〓 ルー師範代 〓 釈迦堂刑部 〓 大佐  
板垣亜巴いたがきあみ クリス 〓 小雪 不死川心 京 一子 エリカ 〓  
板垣天使いたがきえんじ 〓 板垣竜平いたがきりゅうへい 〓 武蔵小杉 上杉レンうえさすき 〓 小十郎こじゅうろう スバル  
〓 キャップ 岳人 〓 レオ 大和 モロ。

紫郎や恋姫組は前の世界の事もあるので相当強い存在になっていま  
す。

まだ実力を隠している人達が何人もいます。  
もしかしたら戦闘要員では無い人も入るかもしれません。  
生きてきた年数や戦闘の経験の差でこの順位が変わるかもしれませ  
ん。

もしも違和感があった場合は是非とも報告して下さい見直して  
みますので！

だいぶ分かりづらと思いますですがそこは言って下されば修正しま  
す！



## 第九話 決闘後、二年S組（前書き）

誤字脱字があつた場合は報告を御願ひします。

後書きの方の強さランクの順位を入れ替えた部分や参戦した人物も  
います。



## 第九話 決闘後、二年S組

一子はまだ元気があるのが分かるが未だに倒れている京はこう言ったのであった。

「立てないから抱っこ」

まるで子供が親に抱っこを求めるかのように京は両手を伸ばして紫郎に抱っこを求めてきているのだ。

京はただ咽<sup>むせ</sup>ただけであって体に怪我を負ってはいなかったのだが抱っこを要求してきたのであった。

「しょうがないな。抱っこしてやるけどすぐに自分の足で立てよ」

紫郎も何だかんだで身内には甘いので要求を呑んでいた。昔から大和達やし才達とは家族みたいな関係であったから紫郎もとても優しく、何でもしてやっていたが、偶に断ったり、怒ったりもしていた。本当の家族のような存在だったのだ。

京はお姫様抱っこ状態になってとても嬉しそうな笑みを浮かべて

いた。

「紫郎：私には何か無いのか（負けたくせになんでコイツがあんなイイ事されているんだ！）」

瀬麗武は紫郎に近付いて問い質した。

そして瀬麗武は京に目を向けて本当に嬉しそうにしている京に対して怒ってしまっているらしい。それはもう不気味に微笑んでいたのであった。

一方、一子やクリスはなにやら口喧嘩にも似た言い合いをしている様子であった。

紫郎には聞こえていないみたいだがとても幼稚的な言い合いのようだ。「クリ！」「犬！」と言いながら睨み合っていたのを紫郎は一切知らない模様であった。

クリスや一子の言い合いに反応している男子も居たみたいなのであった。

「どうなんだ紫郎！何かしてくれるのか？」

紫郎に飛び掛りそんな勢いで紫郎に掴み掛かろうとしたのだが

「ちょっと待て！ 京は抱っこしてやったんだからもう立てよ」

紫郎は瀬麗武を手で止めて京をゆっくり降りして立たせようとしていた。「ぶつ〜ぶつ〜！」といった表情で紫郎に訴える京であったが、その訴えに紫郎は笑みだけを返していた。その笑みに京は何かを察知したのか嫌がるのを止めて自分の脚で立つてくれていた。

何故、京がすんなり立つてくれたか、というと昔から紫郎の事を知っている昔のメンバーなら誰でも知っているのだが、紫郎が笑みを浮かべたら第一警告、次に笑みを浮かべながら話し掛けて来たら第二警告、最終警告である第三警告は笑みを浮かべながら撫でて話し掛けてくるのであった。もしもこれを無視した場合……笑みを浮かべながら相手を言葉だけで泣かせてしまつほどに毒を吐かれるのであった。

それを知っている京はすんなりと紫郎の言う事を聞いていたのであった。それに京は一度これを味わってしまったので二度と味わいたくないと誓っていたので従っていたのであった。

「で、何かやって欲しい事とかあるなら出来る範囲でならしてやってもいいぞ」

瀬麗武の方を向いて言った紫郎であったがその言葉を聞いた瀬麗武は少し考えた表情を浮かべたと思ったら顔を真っ赤にして下を俯いてしまった。

周りの連中から見たらあんな事を言われたら誰でも少しは邪よこしまな事を考えてしまっただろうと心の内で思ってしまった。

「無いなら保留ほいじゆうでいいかな？」

「そ、そっだな。今はまだいい……その代わりいつか保留の件を使わせて貰もらうぞ」

瀬麗武は多少頬が赤く戸惑った様子だったが紫郎の方を向いて言っていた。

保留の件についての事を利用して瀬麗武が何かをしようとしているのは誰にも分からないだろう…

「ねえねえ、ちょっと聞いてよ紫郎！」

「それは私の台詞だ！ 紫郎、私の方から先に聞いてくれ」

落ち着いた雰囲気をごしていた紫郎に揉めていたクリスと一子が素早い動きで詰め寄って来たのであった。

揉めていた事を二人は紫郎に言ってやりたみたいだ。

「そつちの事をまったく気にしていなかったから俺に言われても何かなんだか分からないのだが…？」

紫郎は京と瀬麗武と話していたのでまったく言っていないほど一子とクリスの話が理解できていなかった状況であった。

「その事に関して高貴な此方こなたが説明してやっても良いのじゃ」

その言葉と同時に紫郎はこの声の主が一瞬で分かったのであった。

まず一人称で“此方”という奴は一人しか紫郎の知り合いで居なかったのだ。

「心か……いや、エリカに説明して貰うからいいや」

「な、なんじゃと…！ お主という者は…！ いつもいつも

「その庶民A下がっている」だから此方は高貴な 「はいはい、邪魔ですよ」「ぐわあー！」

今、話し掛けて来ていたのは、不死川心だ。あだ名は『ココロ』。

紫郎とは“櫻井”という事で社交界とかで出会っており、色々心からちよつかいを出してきていたのであつて知り合いみたいな関係だった。紫郎は心の家に呼ばれた時に心の趣味を聞いて可哀想だなつと思つたので自分なりに世話をしたり、話し相手になつてあげたりしていたのであつて今では友達みたいな関係であつた。

心の趣味とはぬいぐるみ作りと影絵だ。なんでも一人でできる崇高な遊びだからだと言つていたので紫郎は内心で嘆いていた…可哀想な存在だと…。

そして紫郎の家族には心はとても嫌われていたのであつた。

特に雪蓮や蓮華といったメンバーが「大嫌い」「殺したい」と断言している程である。

なんでも家柄の事を棚に上げる事が原因のようだ。初めて会つた時なんて話した瞬間に手に持っていた水を心に掛けてその場に紫郎が居なければ殴り掛かつていたのは間違いないであろうという状況になつていたのであつた。

その事を華琳も聞いて政界から不死川家に圧力を掛けて日本の歴史から抹消させようという企みをしていたみたいだが紫郎によつて阻止されたのであつた。

今でも心は雪蓮や蓮華や華琳に会つたら紫郎の後ろに隠れたりして逃げ腰である。

「一子殿の戦いを見て胸が熱くなった！　だが我は久々に紫郎の戦っている所をみたいのだが此処では被害が出るな！」

「さすが英雄様！　周りの人達の事も考えているとは英雄様こそ誠の英雄でございます！」

何やら騒がしい人達が来たと紫郎は内心で思っていた。

「お久し振りです、紫郎君。元氣そうぞ何よりです」

「若、紫郎は何時でも元氣に決まってるじゃないですか！」

「トーマも準も嬉しそうだね」

仲良さそうに紫郎に話し掛けて来たのは葵冬馬と井上準と櫻井小雪であった。

小雪も冬馬や準にとても懐いていたのであった。だが一番は紫郎らしい。

葵 冬馬との出会いは医療関係にも手を伸ばしている“櫻井家”との社交界の時に偶然出会った仲だったのであった。準もその時に出会っていたのであった。

同じ年齢であつたので話も合つたのでとても仲良くなつたのであつた。冬馬は柔軟で捉え様のない人物に見えるが、自分の決めた道を見つけるとそれに一直線になつてしまい自分の退路さえ絶つてしまふほど危うい人物だと頑なほどの性格だと紫郎は認識した。

準も冬馬を“若”と言つて慕っているので、この二人はとても仲が良いと紫郎は分かつたのであつた。

そして川神市に紫郎が居ない時に小雪の遊び相手にもなつてくれつと紫郎に頼まれており、冬馬、準、小雪はとても仲が良いのだ。紫郎も時々遊んだりしていた時に家に入れた時に冬馬は家族に色々とおちよつかい出したり、準が一番酷かつたが鈴々や月に積極的に話し掛けていたのであつた。

「久し振り！ 冬馬も準もユキの面倒見てくれてありがとうよ」

「ありがとう」

紫郎が二人に礼を言いながら小雪もそれに同調して一緒に礼を言つていた。

「いえいえ、僕も楽しかつたのでこれからも宜しく御願ひしますよ」



「俺も若と一緒にで宜しくな！（鈴々ちゃんや月ちゃんは元気かなー）」

冬馬は嘘偽りない正直な気持ちを言ったのであろうが準の方は邪な気持ちが混ざっていると誰の目にも分かるくらいであった。

「英雄様、一子様を保健室に連れて行っては如何どうでしょうか？」

「ほうー、なぜだあずみ？」

紫郎には聞こえないように話している二人であった。

「此処で優しい一面を見せれば好感度が上がると思いました」

「そうであるなー！ さすがはあずみだ！」

この主従関係は信頼し合っているって事と解釈していいのか？

少々疑問に思つ所もあるが暑苦しさあつたがそれを遙かに凌駕しのぎしていた。

「では行って参るぞー！」

英雄はそう言って一子の方に向かって行ったのだ。

「……」

準が「げっ！ 英雄の奴一人で行っちまったよ」と言いながらゆつくり何処かへ逃げようとしている。

英雄が行ったのを確認したあずみは準とか他の人を関係なしに紫郎の方を向いて

「てめえー！！ どの面下げてあたいの前に出てきやがったッ！」

先程の戦っていた四人にも負けなほど早く動いて小刀二刀を紫郎の首に当てていた。移動も抜刀の速さも達人クラスであった。

周りはずみみの本性を知っていたので言葉の変わり様とかには驚きはしなかったのだが、いきなり動いたと思っただら怒って武器である刀を容赦なく転入生に当てているのだから驚いてしょうがない。

「相変らずいい動きしてるな……怒っているなら謝るから刀を下ろしてくれないか？」

久し振りに会う戦友にいきなり武器を向けられたらそれは誰でも動揺してしまう。だが紫郎は眉一つ動かさず逆に笑っていた。

「お前が言えるか、私の腹部に当てている銃を退どけな。それとお前の側近の二人の武器を退けな」

「悪い悪い、条件反射で“つい”抜いてしまっていたよ。それと愛紗も凧も下がっていいぞ」

紫郎も紫郎であずみが刀を首に当てる瞬間に懐から銃を抜いていたらしく二人同時に致命傷を負える状態になっていたのであった。紫郎は元々軍人だったので持っているのは当たり前だったのだが学生になっても隠して持っていたのであった。愛紗も凧も自分の武器を構えてあずみに向けていたのであった。

「ふん。お前も腕は落ちてないみたいで安心したぜ」

まるで自分の事のように…珍しくあずみは自分がニヤけているなっと感じていた。

「それはこっちのセリフだ。あずみこそメイドとして技能を高め

過ぎて戦闘の方が鈍くなっているじゃないかと思ったがキレが増してやがるな」

二人共武器をしまつてそれぞれ話し出していた。

周りから見たら一瞬の事で何が何だか分からないものが大半であったが全員一致で驚いた事は……あずみがあまり罵倒はとうしていない事と笑みを浮かべている事について驚愕していたのであった。

あずみとは戦場で出会つた仲であった。あずみと一緒に大佐という人物やあずみが所属していた傭兵団を助けたのが出会つたきっかけであった。一緒になって戦つたり、時には敵になって戦つたりと色々な思い出があるがあずみ的には戦友と言つていい程紫郎の事を気に入っていたらしい。

「お前には恩があるからな。この学園で分かんない事があつたらあたいに相談しな！ 表の事情から裏の事情まで全て教えてやるよ」

あずみはそれだけ言つて英雄の後を追つたみたいだ。

これだけの為に英雄の後をすぐに追わなかったのかと紫郎は内心驚いていたが自分の事を気に掛けていてくれたのかと思いちよつと嬉しい思いでいた紫郎であった。

そして話を戻すと一子とクリスの事は心に聞いたのだが、何やら嬉しそうに話してくれて機嫌が戻ったみたいで紫郎的には「良かったな」と感じていた。

心から話を聞いてクリスと一子の揉めていた事について紫郎は何もなかったのもであった。喧嘩するほど仲が良いという感じで済ませてしまった。

そしてまだ生徒達の興奮が治まらないものの…

「決闘も終わったことじゃ、生徒は自分の教室に戻りなさい。」

鉄心や教師陣が生徒を教室へと帰して行った。

俺も教室に戻ろうとしたのだが

「紫郎は少し残りなさい。話したい事があるのじゃ…」

紫郎は鉄心の表情から見て何か重要な事だと把握したらしく、一子を保健室に連れて行くこうとしていたのを京に頼んでその場に残ったのであった。

・ ・ ・ ・

生徒達や教師陣もそれぞれ戻った。今は鉄心と平蔵と紫郎の三人しか残っていないかった。愛紗や凧もこの場にはいなかったのだった。

「話つてもしかして一ヶ月前に言っていた事でしょう？」

紫郎が言ったことに対して二人共頷いて答えた。

一ヶ月前に紫郎はあらかじめ百代と戦う事を鉄心と平蔵に伝えていたのであった。

「強者に餓えている故に紫郎と戦って貰いたいというのだが…」

「本当にお主は大丈夫なのじゃな？」

鉄心、平蔵の二人の強者でも百代の相手をして唯ただでは済まないと改めて紫郎に確認を取っていた。

百代の存在は世界中の者が知っている程に有名な人であり、最強の存在であるために挑戦者も絶えず挑んでくるのだが百代はそれを

軽々倒してしまっている。物足りなさはずっと残り続けているのであった。今では欲求不満でいつ爆発するか分からない核爆弾みたいな存在になっていたのであった。

鉄心や平蔵も百代の相手をしているのだが四年前に習得した“瞬間回復”に二人も苦勞しており単体での戦闘力は二人を凌駕してしまっているといった状況であった。

「大丈夫だよ。久し振りに百代を見て一瞬で分かったよ。アイツは本当に強くなっているっていうことがね。あのレベルは世界でも両手の数はいないと思うよ。でもね」

紫郎の表情は穏やかであったが

「アイツはまだ俺やウチの家族のレベルに達してはいないから（まあ、今の俺の状態や制限を掛けている愛紗達をいつかは越えてしまっただろうがな、百代は。）」

紫郎がそう言った瞬間に二人はとてつもない殺気に当てられ汗がダラダラと流れてくるのを感じていた。こんな濃い殺気は久し振りなのとまさかこんなタイミングで来るとは思っていなかった二人であった。この殺気はまるでこの場で鉄心や平蔵を殺してしまいそうな程濃かった。

「まあー今日は俺の家に泊めて俺と戦って欲求不満を解消させるので、これからはそんな心配せずに済むと思うよ」

殺気を放つてたのから一変して子供の様に無邪気な笑みを浮かべている紫郎であった。

「そ、そうか。お主の気持ちは分かった。なら百代を頼んじやぞ！」

「お前ならどうにかすると期待させて貰うぞ！」

勇名を馳せる二人がまだ二十歳にも満たない青年を頼っているのだ。これはスキャンダルになるぐらいの事だっただろう。

・ ・ ・ ・

そして生徒達が教室に戻り授業を始めたのであった。

紫郎は右に瀬麗武、左にクリス、後ろにスバル、前に一子という席になっている。愛紗と凧とは離れてしまった。

最初の授業は梅子の歴史の授業であった。



「ではこの文を橋に読んで貰おう」

梅子の指名で瀬麗武に当たったのだが瀬麗武は静かに黙っていた。

「教科書が無いんだ」

確かに、瀬麗武の机には筆記用具とノートしか無かったんだろう。

「そういえば転入生達はまだ貰っていなかったのだな？」

梅子は他の転入生組にも聞いた。

「自分は昨日貰いましたので持っています」

「俺はつい先程貰いました」

「私も同じです」

「私も紫郎さんや愛紗さんと同じです」

他の転入生達は貰っていたらしい。

「そうだったのか。じゃあ隣の紫郎にでも見せてもらいなさい」

「先生！ここは俺が…」「是非ともそうさせて貰う」「ちよっと橋さん！？」

新一をまったく相手にせず紫郎の方に机を寄せている瀬麗武であった。

「はいよ、もうちよっと近づいた方が見えやすいと思うぞ」

紫郎は自分に向けられている視線をまったく気にせず机と机をくっつけて瀬麗武とは肩と肩が触れるぐらいの距離まで近付いていたのであった。

「う、うむ。ギリシア神話の話か、本当に神話のような人はいると思うか？」

少し頬が赤い様に感じられる瀬麗武。

そして教科書に目を通して自分が指されているのにも関わらず紫郎と指された部分の神話について話していたのであった。

「俺は居ると思っているよ（実際に会ってしまったからな）」

瀬麗武の質問に紫郎は普通に応えたのであったが内心では、自分がこの世界に来る前に会っているのどう答えたらいいかと迷っていたもの普通に応えたのであった。

「そうか、わた「橋、早く読め」そうだったな」

瀬麗武は紫郎に理由でも聞こうとしたのだが梅子先生に言われて話を止めて自分の読むべき文を読んでいたのであった。

瀬麗武が読み終わった後も少し喋るのはまずいと思いノートに言葉を書きながら瀬麗武と話していた紫郎であったが周りから見たら凄いいム力つく空間になっていたのに気付かない二人であった。

「おいおい、席をくつつけただけでこいつらなんでこんなイチャイチャしているように見えるんだよー！」

「ハイハイ、どうどう。ガムやるから少しばかり静かに見てよござ（それにしても紫郎は鈍感なのか鋭いのか分からないな。まあーそれだから紫郎は紫郎で良い）」

きぬが暴れそうなのをスバルが止めていたのだがスバルは紫郎と瀬麗武の事を優しい表情で見っていたのであった。その表情は誰でも見惚れてしまいそうな表情であった。

「ふ〜ん…（自己紹介の時は無愛想な表情を浮かべていたのに、紫郎の前だと可愛らしい綺麗な表情をうかべるのね…まったく、華琳さんなんて言ったらいいのかしら？」「モテモテですよ」「つて言ったらまず間違いなく私は“お仕置き”を受けるでしょうね…）はあー」

髪を弄りながら黒板を見ていたが目線に紫郎と瀬麗武が仲良さそうにしているのが目に入っていたエリカであった。エリカの内心では転入生二人をもうちょっと観察しているつもりだったけど、結論から言くと二人共紫郎の事が好きだと分かっていたのだが、また紫郎を好きな人が増えたと思ってしまう、頭が重い状況になっていたのであった。

「（エリーが溜め息吐いてる！？ やっぱりこの二人を見て何か思ったのかな？ クリスさんや橘さんも櫻井くんの事が好きみたいだし、風間ファミリーの女性陣も櫻井くんの事が好きみたいだし、そしてエリーも櫻井くんの事が好き……容姿は確かにカッコいいけどそんなに良い人なのかな？ こ、今度話しかけてみようかな……）」

エリカの前の席であつた良美はエリカが溜め息をしたのが聞こえたので少々驚いていたものの表情には出していなかった。そして自分の唯一の親友のエリカが好意を持っている紫郎に対して興味も抱いてたが同時に容姿だけの人なのかとも思っているようだ。まだ良美には良いイメージが無いみたいであつた。

そして何故だか瀬麗武と紫郎が仲良くしているのを見ていてペンを握る力が強くなっていたのを良美自身は気付いていないみたいだ。

「（また書き間違いをしてしまった。これも全部紫郎のせいだぞー！ 何を紫郎は瀬麗武とノートに字を書いているフリをしながら会話みたいな事をしているんだ！ 自分も紫郎の隣だから丸見えなのが分からないのか！？ まさかッ！？ これは日本で言う“策略”というものなのか！ 自分より一歩、二歩差を広げようという瀬麗武の策略なのか！ いや、そんなはずはない。瀬麗武がそんな事をする訳が無い、自分は瀬麗武を信じるぞ）」

クリスは内心で激しく勘違いをしているようだ。瀬麗武は微塵も思っちゃいないのに物凄い誤解をしている。自分の好きな人が他の人と楽しそうな表情を浮かべていたら何かしらイラッと来るものだがクリスのそれは羨ましいといった気持ちなのでまだ良かった。

そして授業もあっという間に終わり昼休みの時間になり……

別の話だが教室に戻る途中での出来事であった。

紫郎がまだ鉄心や平蔵と話をしている時の事である。

「そういえば姉さんは体育館ではクリスマスや橘さんに反応していたのに決闘の時には何もしなかったね」

大和が「ふっ」と思った疑問を言葉に出して百代に言っていた。

風間ファミリーのメンバーは「確かに！」という表情をしながら百代に耳を傾けた。大和の声は意外に結構大きかったらしく教室に戻ろうとしていた生徒達の耳に聞こえていたみたいで皆が大和達の方に耳を傾けていた。

「まあ、本音を言うとは確かに飛び付いて、抱きしめて、愛でたかったぞ……けど、前々から紫郎が帰って来たら軽々しく他の誰かを抱いたりしないようにしようとは決心していたので私は動かなかつたんだ。分かつたか舎弟よ」

百代は大和の頭に手を乗せて撫でながら言ったのであるが、その言葉を聞いて場が凍ったのに気付かない百代である。

だがすぐさま

『ええ〜!?!』

生徒達の大声が聞こえてきたのであった。

「ふむ。百代の奴も大胆な事を言うものだ」

「そういう揚羽ちゃんだって、紫郎くんが帰って来てから良く笑うようになったよね」

百代と同学年で百代とは違うクラスである二人もこの事を聞いていたらしい。

「黛さん、昼休みになったらセンパイの所に行かない？（川神先輩か……強敵になりそう）」

「おっ！ さすがはなごみんだね。紫郎から離れたくないみたいだね」

「松風、それを言ったら私も同じです。あ、はい、もちろん行きましょうか！」

紫郎より一つ下の一年生の子達も嬉しそうに話していたのであった。

## 第九話 決闘後、二年S組（後書き）

紫郎と出会った事により百代は自分で高みを目指し鍛錬を積んでお  
った為に異常に強くなっています。

やべえ〜TOW3をやりこみ過ぎてこっちの方が手抜きになってし  
まったぜ。

っていうか、あれだな……まだこの話の中では一日が終わっていな  
いんだよな……疲れるぜ

でもなごみやまゆつちを多く出したいと思っっているのだが……他  
のヒロインが目立ってしまったっているな。まあそれはそれでいいので  
ある。

主要メンバーの席の順は の通りです。

愛 紗 大和 レオ 凧

小 雪 一子 京 新一

クリス 紫 郎 瀬麗武 良美 岳 人



翔一 スバル きぬ エリカ 卓也

く強さランクく

忠勝、冬馬、準、英雄を追加しました。  
瀬麗武が一つ下に下げました。  
釈迦堂は三つ程上がりましたしました。  
京と心の位置を変えました。

紫郎 家族組（恋姫メンバーの武官組） 百代 平  
蔵いたがき 幾蔵いたがき 鉄心 由紀江いたがき 揚羽いたがき 乙女いたがき 板垣辰子いたがき 南斗星ナトセ  
マルギツテ・エーベルバツハ 瀬麗武しやかう 釈迦堂刑部きやうぶ フラン  
クいたがき（メフィストフェレス状態） はずみはずみ ルー師範代しはんだい 大佐だいさ  
板垣亜巴いたがき クリスクリス 小雪こゆき 京きやう 心こころ 一子いっし エリカえりか 板垣天使いたがき  
板垣竜平いたがき 武蔵小杉むさし 上杉レンうえすぎ 小十郎こじゅう 準じゆん スバルすばる キ  
ヤップやっぷ 忠勝 英雄 岳人たけひと レオれお 冬馬 大和 モロ。

## 第十話 昼休み（前書き）

誤字脱字があった場合は報告を御願いします。

後書きの方の強さランクの順位を入れ替えた部分や参戦した人物も  
います。

## 第十話 昼休み

紫郎達は教室に集まって昼飯を食べようとしていたのだけれど紫郎は用事があるみたいなので少し抜けて先に食べているように言っ  
といて問題を解決しに行こうとするところであった。

「えっと、此処でいいのかな？」

紫郎が向かった所は一つ上の学年の三年生のクラスであった。

「……」

そして目的のクラスの目の前まで来たのであったが何故だか見知らぬ少女に「じいー」と見られている紫郎であった。知らん振りしてやり過ぎるのが良いと思っていた紫郎であったが、その子の表情からして「話しかけて!」、「構って!」、「と言っている風に見えるでしょうがなく話しかける紫郎であった。外見はとても知的に見える女の子であった。

「私は何か変ですか？」

紫郎は意を決して不思議少女に話しかけたのであった。

「……ヤー」

女の子はビシッ!、と手を上げて挨拶してしてきたのである。そ

の行動が理解できず紫郎は訳が分からない状況に陥っていた。

「ヤーヤー、お兄さんは夢の恋人？」

急に話し出したと思ったらとんでもない事言い出した女の子であったが為にこけそうになる紫郎であったが向こうはまったく意識していないのか、これが至って普通だと思っただけで聞いてきたようだ。

「夢嬢とは全然そういう関係じゃないから、簡単に言つとだな……友達みたいな関係だね」

先程とはうって変わって紫郎はとても冷静に目の前の女の子に話しかけた。焦る様子も動揺した様子も伺えないほど冷静に対処していた紫郎であったが内心ではとても不思議な子だと思いつつ喋っていた。

「……間違えちゃったから、オシオキして」

「……へっ？」

さすがの紫郎もこの言葉を聞いて啞然とするしかなかった。まさか初対面の女の子に“お仕置き”をして欲しいと要求されると思つてもみなかったのであつて予想の斜め上をいつていたのだ。

「くら！ ミイてめえー！ また人様に迷惑掛けてやがるな」

その女の子のすぐ後ろから飛び掛る勢いで現れたのは男のような言葉遣いで元気が良く、明るそうな女の子であった。

「お前は問題の転校生！？　なんでまた俺ら三年の所に来ているんだ？」

紫郎に気付いた元気な女の子は紫郎の方に指を差しながら聞いてきた。

「夢お嬢様に会いに来たのですけど…」

紫郎は元気な女の子の方を見ながら言っているのだが目では知的そうな女の子の方を見ているのであった。

向こうもそれに気付いたみたいで「なるほど」といった表情をとってくれて分かってくれたようだ。

「夢なら教室にいるぞ。それと俺の名前は稲村圭子いなむら けいこって言うんだ。気軽に“ケイ”って呼んでくれ。ヨロシクな！」

「私の名前はアナスタシア・ミステイーナって言います。“ミイ”って呼んで（この人からは森羅様以上にSっ気がビンビン感じるの  
お〜）」

二人は紫郎に自己紹介して新しく入ってきた転入生を見たのである。ケイは面白い物を見つけたような表情で言ってきたのだが、ミイの方は体をくねらせて悶えるという行動をしていた。ミイの行動に苦笑いしながらも紫郎も自己紹介してお互いの事を知った仲間になったのであった。

ケイとミイは夢と同じで陸上部である。ケイが陸上部のキャプテンにも見えるが夢がキャプテンらしい、表のキャプテンがケイで裏が夢なのであった。ケイは強気に見えるがプレッシャーや逆境に弱いというのが弱点であった。だがそういう場面じゃなければ、明るく面倒見が良く、裏表無い分かりやすい性格で女の子らしさに欠けるものさういうのを気にせず、わが道を行くタイプである。簡単に言ってしまうえば姉御肌だ。

ミイは知的に見える外見が示すように、成績も良好で優等生である。だがその反面性格・性癖は常軌を逸いつしているのであった。重度のマゾヒストでそれをカミングアウトしており言葉責めされたりするのが大好きと言う困った女の子である。陸上部で長距離を走っているのだが、理由は長距離の苦しみが快感だからといった度肝を抜く答えである。そして紫郎を見て何か感じているのである。

二人共夢の親友であり仲よし三人組で名が通っている程この学園では有名である。

「夢ー！ 客人だぜ」

教室に勢い良くケイが入って行ったせいでドアの方に視線が集中してしまっているのです。その後から入ってきた紫郎に物凄い視線が集中しているのである。此処に来るまでに廊下とかでも視線が集中してきたり、話しかけられたり、と色々が目立つ紫郎であった。

「あ、紫郎君だー」

「紫郎ではないか!」

夢と揚羽が仲良さそうにご飯を食べている時にお邪魔したようであつた。

「どうもです。夢嬢に話があつたので伺つたのですが二人共お食事  
中でしたか」

紫郎は申し訳なさそうに頭を下げて二人に言ったのであつた。

「大丈夫だよ、気にしないでいいからねー」

「我も気にしてはいないぞ」

二人共まったく気にしていなさそうに言い返してくれたので気が  
楽になれた紫郎である。

「それは感謝します。それでお話というのはですね…」ちよつと待  
て!」「…はい?」

紫郎が話し始めようとしたのを揚羽が軍配で紫郎の顔を擦れ擦れ  
に押し付け止めていた。夢は何で止めたのかと疑問に思っていた。

「先程から敬語なのが気に喰わないぞ! 何時ものように普通に喋

るが良い！」

揚羽は紫郎が敬語で自分や夢に喋っているのが嫌だったらしく注意したのである。昔から揚羽には遠慮がちである紫郎は意識している時は敬語で接しているのだが、まったく意識していない時は素で普通に喋っているのであった。今回は意識しているみたいだ。

「……分かったよ。普通に喋ればいいんでしょう揚羽姉さん？」

「うむ、それで良いのだ！」

揚羽は満足そうに笑みを浮かべたのであった。それはもう清清しいぐらいに。

「話を戻すけど、明日、学校が終わったら久遠寺家に行こうと思うから夢姉さんにはその事を森羅さまや未有さまに言っておいて欲しかったのでここに来たんだ」

紫郎はここに来た理由を言った。

昔から櫻井家とはお世話になったり、お世話したりという関係で非常に仲が良かったのでせっかく帰って来たので久遠寺家に挨拶に行こうという事をまずは夢から知らせておいたのであった。

本当は今日行きたいのであったが予定が入ってしまった為に明日にしたのであった。



本当の事を言うと一番最初に挨拶をしたかったのだが、数ヶ月前に森羅とは喧嘩別れみたいな状況になっていた為に会うのが少々気まずいかったのであったので紫郎は避けていたのであった。久遠寺家の未有や美鳩や大佐からは「（森羅さま/姉さん）が悪い」と言っていて気にしなくていいと言われていたのだが、それを紫郎は気にしていたらしく数ヶ月間久遠寺の関係者には会っていなかった。

「うん、分かった……もしかしてまだ気にしているの？」

その事について分かっていたので心配そうに紫郎の事を見る夢である。

「俺が謝れば解決するんだけどな、俺が強がっていたのが悪かったんだよ」

紫郎も「悪くない、悪くない」と周りの人に言われているのだが……自分のせいだと気にしているらしいので、そしてこれ以上森羅と険悪なままではいたくなかったので自分から謝ろうと決心したのであった。

「でも……シンお姉ちゃん（森羅）も紫郎君に謝りたがっていたよ。あれからずっと元気がない状態で家の空気が重かったんだよ。新聞やテレビで紫郎君が出る度たびに悲しそう表情して、その度にベニちゃんも励ましてくれて見てられなかったんだよ。シンお姉ちゃんも紫郎君とは仲悪いままではいたくないって思っているからね」

夢の表情から紫郎は悟った。夢の表情はいつもの明るい表情から一転して暗い表情であった。

自分達の問題で周りを巻き込んでしまった事について紫郎は罪悪感が自分の内から沸いてきていたのであった。紫郎も夢と同じくらい暗い表情を浮かべてしまったのであった。何時も堂々としている紫郎であったが身内や知り合いの事になると異常に気にしてしまう体質なのである。

だが二人の会話を横で聞いていた人が…

「何をめそめそしているかあー！」

夢の向かい側で黙っていた揚羽が突如大声を上げて紫郎に殴りかかってきたのであった。その拳は並みの人では到底避けられない程の速さと岩を砕きそうな威力を秘めていた。

「なんだよ。急に！」

紫郎はそれを易々（やすやす）と片手で受け止めて涼しげな表情をして、まるで何も無かったのかのように揚羽に問いただした。だが、周りは被害を受けていたのであった。

受け止めた紫郎の後ろを風が爆風の如く吹き付けてその風により机が軽く吹っ飛んでいた。怪我人や壊したものは無かったものの机を

元に戻すのが大変そうだ。

「我が認められた男ならそんな顔するな！　もつと堂々としろ！　お前らしくないだろうがぁー！」

揚羽の言葉からでも分かるがかなり怒っている。揚羽の中の紫郎は、常に堂々として誰にも弱みを見せずにいる孤高の王様のような印象が強く執着しており、揚羽もその存在感に感服もしているほどののだが、今の紫郎を見て非常にムカついたらしい。

「……そうですね、こんなイジイジしているのは俺らしくないよな……」

揚羽の拳を受けた手に力が入る。力を入れた事に紫郎は気付いていないようだが、揚羽の方は笑みを浮かべ「分かったか！」という表情で満足したらしい。

紫郎も紫郎で自分がなんでこんなに不甲斐ふがいない事をしているのかと、自分の馬鹿らしさに苛立ちを感じてしまっていた。

「そうそう、紫郎君は胸を張ってシンお姉ちゃんに会ってね（でもお姉ちゃんって紫郎君にこれほどの影響力を持つほど信用されてるんだー）」

先程の暗い表情からとても綺麗な笑みを浮かべている夢であった。

内心では紫郎の落ち込んだ様子をまったく見た事無かった夢が自分の姉である“森羅”が紫郎にとってどのような存在なのか気になっていた。

「そうだね。ありがとうございます揚羽姉さん、夢姉さん」

紫郎は本当に感謝しているようで夢と同じで綺麗な笑みを浮かべていた。

だが夢とは違い、笑みを浮かべている後ろの背景にバラが出てきているというエリカの特技を使っていたのであった。エリカが開発したのであったが紫郎も自力で開発したのであった。

「う、うむ（こやつはなんでこんな綺麗な笑みを出せる！ それといつまで手を握っているつもりだ）」

「う、うん（相変わらず背景にバラが見えるって凄いなー）」

揚羽も夢も少し頬を赤く染めているのであった。ケイやミイや教室内にいる女子も多少被害を受けていた。

揚羽は未だに自分の手を握られているのに対しても頬を染めている様であった。意外に初心<sup>ウツ</sup>である揚羽である。

「じゃあ夢姉さん宜しくね……さてと帰ろうかと思っただけど机を直さなくちゃな」

紫郎は二年F組に帰ろうとしたのだが、先程の揚羽の拳の衝撃波で机が錯乱さくらんしていた状況であったのを見て自分のせいでもあるので元に直そうと机を動かしていたのであった。

それを見ていた教室にいる人達も手伝い、すぐに終わったのであった。散らかした張本人でもある揚羽や夢、ケイ、ミイも手伝ってくれた中に入っていた。

「じゃあ俺はこれで……ちよつと待って」えっ!? ってミイさんですか」

帰ろうとした紫郎を止めたのはミイである。でも誰が見ても分かるぐらいミイのようすが変だと分かった。

「まだオシオキしてもらってない、はあ……ハア……」

「ちよつ!?!?」

振り返った紫郎はびっくりしていた。ミイの状態は瞳が潤んでいて頬が少し赤くなっており、息も荒くなっているという状況で一体何が起きたの理解できていない紫郎であった。急に知り合った女の子が発情している状態になっているのだからそれは焦る。

「櫻井、コイツはDMだし、マゾなんだよ。ったくよ、このメス犬

が、しまいにゃ根性焼きいれるぞ！」

その様子を見ていたケイが慣れた手つきで容赦なくミイの尻を叩いた。ビシッ！ ビシッ！ っという音が聞こえ痛そうだと分かるぐらいである。

「あんっ、んあっ、はうん……はあはあ」

何故だが、ぶたれて悦んでいるミイであった。

紫郎は「なんぞやー」という感じで目が飛び出そうなくらい驚いていた。普通の人がコレを見たら驚かずにはいられないだろう。叩かれて悦ぶ人なんてそうはいないものだ。

「……すうーはあー、うん、落ち着いたぞ。へえー、ミイは凄い性癖持つてるんだな。じゃあ」

紫郎の返答に教室に居た男女共に驚いていた。普通はドン引きしたり、嫌味嫌うはずなのだが、紫郎の取った行動はミイに近付いて顎を掴んで自分の事を見ると言わんばかりに顔を力尽くで自分の顔の近くまで近づけたのであった。

紫郎の行動に対してどんどんミイの息遣いが荒くなってきており、それを見ていた男子は脚をもじもじしておりこそばゆい感じであった。それに比べて女子は何をするのかという目で見ており、ワクワクしていた。

そして顔を近づけた紫郎はミイの耳に語り掛けるように言った。

「てめえを　　して　　してやろうかあー」

小声でミイだけに聞こえるように言った紫郎である。そのときの紫郎の顔はまるで相手を見下すかのような表情であった為に間近で見えていたミイには精神的に大ダメージなのか、それとも快感なのか、分からない所である。

「……………」

そしてミイは硬直状態で動かなくなってしまったのであった。

ミイより先に紫郎が動き、ミイからゆっくり離れていき、教室を出ようとした所で立ち止まったのであった。

「……………というのは冗談ですからね、ミイさん。ケイさん後は御願いますよ」

そう言って紫郎は手を振りながら三年の教室を後にした。

紫郎が居なくなってからケイが固まっているミイに話し掛けようとしたところ……立ったまま気絶していた。けど表情はとても良い事があったみたい嬉しそうな表情をしており、ケイが無理矢理叩き起こして途端、急に喘ぎ<sup>あえ</sup>始めて床にゴロゴロ、クネクネとしながら紫郎の名前を呼んでおり、クラス中の連中がドン引きしたそう  
だ。

・ ・ ・ ・

そして自分のクラスに帰ろうとして三年の廊下を歩いていた紫郎は自分が出て行ってから揚羽や夢のクラスが五月蠅くなつたと思つた紫郎であつたが気にせず二年F組に戻るうとしたのだが……

「何やら騒ぎを起こしたみたいだな。紫郎」

肩を抱くように隣に百代が抱きついてきた。紫郎も百代の気配がしていたので急に殴ってきたりしないだろうと信用し、抱きつくのを許したのであつた。抱きついてきた時に一瞬歩くのを止めた紫郎であつたが離れそうに無いと分かつたのか、そのまま百代を連れて歩いたのだ。紫郎が歩くのと同時に紫郎の腕に抱きついて歩きやすくした百代であつた。

廊下を歩いている二人を見て男子からは憎い目で見ている者もいれば、羨ましそうに見ている者もいる。女子からも「キヤー」という黄色い歓声が聞こえてきて、どういふ反応をしていいか迷っている紫郎であつた。

「百代姉さんもこれから何処か行くのかい？」



紫郎は歩きながら自分の腕に抱きついている百代を気にせず聞いた。

周りから見たらまるで恋人同士にも見えてしまうぐらいの自然体である二人である。百代の内心では周りの事など気にせず久し振りに会えたんだから甘えたいという気持ちで一杯のようだ。

紫郎も紫郎で何時もの事だなっという感じで百代を受け入れていたのであった。

「ああ。これから放送室に行つて私と井上準と放送する所だ」

紫郎の言つた事に応える百代であった。

「へえーそれは楽しみだな。じゃあ教室で皆と聞いているよ」

「任せておけ」

その返事と一緒に笑みを浮かべてくれる百代に紫郎も笑みを浮かべていて、まるでイチャイチャしているようでもある。いや、イチャイチャしているのだ。

「それと鉄爺（鉄心）から今日は俺の家に泊まるの許可を貰つたから何か必要な物を持って家に来てね。じゃあまたな」

百代と行く道が違ったのでここで別れて紫郎は自分のクラスに戻つたのであった。

。 。 。  
そして用事も済み教室の前まで来たのだが、そこで重要な事に気が付いたのであった。

「あつ!? 弁当とか持ってきて無いじゃん(食堂あるのは知っているが場所が分からんし、今から購買とか行っても無理だしな...)」

朝にサンドイッチを食べただけであったので少々お腹が空いていた紫郎であった。食堂も今の時間はある頃だと思っし、購買も時間が過ぎすぎて良い物がないだろうと察した紫郎。

そしてお腹を空かせて教室内に入った紫郎は感謝せざる負えない事になるのであった。

「あつ! センパイ、お弁当作ってきていないと思ひまして余分に作ってきましたのでどうですか?」

きぬと睨み合っていたなごみが入ってきた紫郎を見た瞬間に一変して嬉しそうな笑みを浮かべて紫郎に近付いて来た。なごみの手には四段重ねの重箱を持っていた。作り過ぎたつてどれだけ作ったんだよつと内心でツツコミを入れていた紫郎であったが、自分の事を心配して作ってくれたんだと思ひ凄じ嬉しい気持ちになっていた紫郎である。

そして端の方で隠れるようにしている由紀絵の姿も紫郎は目撃し

ていた。

「ありがとうよ。なごみ」

紫郎は笑みを浮かべながらなごみの事を優しく撫でた。紫郎にとつて撫でるといふ行為は癖になってしまっていたので無意識でもしてしまっていた。

「…えへへ。愛紗さんや凧さんの分もありますのでどうぞ」

重箱を一人で食べるのはさすがに辛いだろうと思っていた紫郎だが「なるほど」と納得した。愛紗や凧の分も作ってくるとはさすがはなごみと内心で褒めていた。

「いやはや、すっかりお弁当の事を忘れていましたよ。このご恩はきつと返しますよ。椰子さん」

「何か手軽な物ぐらい作ってくればよかったですね。ありがとうございませす。椰子さん」

愛紗も凧も紫郎と同様で、すっかり昼休みにお弁当が必要という事を忘れていたのだ。

そして紫郎は席に戻ろうとするのだが紫郎の机を中心に二年F組のほぼ全員が集まっていた。

昼休み前にも授業終わりの休み時間の時も色々と紫郎に話し掛けてきた男子や女子が居たりして、紫郎だけではなく転入生の周りにも人が集っていた。

「悪いな。待たせてしまつて」

それから紫郎は皆と一緒に楽しく喋りながらなごみの手料理を食べ始めた。最初は食べ始めたといつても紫郎は箸を持っておらず、なごみが「あ〜ん」とさせながら食べさせていたのであつて紫郎もそれを受け入れながら食べていたのであつたが、男女共に目線が紫郎に一点集中して耐えられなくなった紫郎はなごみから箸をもらつて自分で食べていた。

そしてなごみの嬉しそうな表情を見て、何人かの男子が胸の心臓付近を押さえて悶えていたのであつた。レオや大和も含まれる。

周りから見たら紫郎となごみの行動に「なんなんだ、コイツら!」という感じであつただろう。いきなりカップルみたいな行動をして紫郎達に問い質す二年F組メンバーであつた。

質問攻めにされる紫郎であつたが、それを止めたのが生徒会長であるエリカである。だが此処でも全員が予想もしない事を仕出かすそうとするエリカであつた。止めに入つたはずのエリカであつたがエリカ自身が「あ〜ん」とさせてきたのである。その表情はとも嬉しそうであり「食べなさいよ」と呼びかけている様にも紫郎は感じ取つたので、この行為に甘えて食べた紫郎であつた。そしてエリカだけではなく、愛紗、凧、瀬麗武、クリス、京、きぬも参加してきたのであつた。それを全部捌ききろうと紫郎は決意してそれを全部食べきつていたのであつた。

小雪や一子は逆になごみの料理が美味しそうで手をつけ様としたのをなごみに止められていたのであった。でもなごみの絶品料理を知ってもらいたいと紫郎は思っていたので一子や小雪に食べさせてあげたのであった。もちろん、なごみの許可を取っていた。そして食べた瞬間物凄い勢いで「美味しい！」と言い出した二人を見て紫郎は満足してなごみを見たのであった。

なごみも強気な表情をしていたが少し頬が緩んでるように見えた紫郎であった。ずっと見続けていたせいで紫郎の視線に気付くと綺麗な笑みを見せてくれるなごみなのであって紫郎の前では心の底からデレるなごみであった。

それからも食べ進めていきながら皆と喋っている紫郎であった。

・ ・ ・ ・

そして今現在

「ちよつとっ!?! その子顔真つ赤よ! とうかもう一人の子はなんか嬉しがっているような...!」

「櫻井くん!?! ちよつと自重した方がいいと思うよ!」

千花と真与の注意に紫郎は…

「可愛いのを愛<sup>め</sup>でて何が悪い」

まったく止める気がないようだ。可愛い者に目が無い百代に似てきてしまっている紫郎であった。

「あ、あわわ、あの、し、紫郎さん」

「センパイ、やっぱり人前というのは恥ずかしいです…」

そして紫郎の右隣で頬を赤く染めながら撫でられているのを受け入れながら由紀江が慌てふためいているのいる。左隣では紫郎に抱き寄せられて紫郎の懐で頬を染めながら悶えているなごみがいるのであった。そしてなごみはさっきまでは人前で堂々と抱きついていたのに今になって恥ずかしくなったのか、と対馬ファミリー、生徒会組、なごみの事を知っている人達は思ったのであった。

そして何故こういう状況になっているのかという…

十分ほど前の事である…紫郎は皆と親交を深めていたのであった。

小笠原千花とは、最初は逆ナンみたいに「放課後アタシとスイーツ食べにいかない？」と言われ、普通に了承していた紫郎であったが、仲見世通りにある有名な久寿餅を食べに行こう、と提案したところ、急に驚いた表情で色々とその久寿餅について聞いてきたのであった。紫郎は家族がよく持って帰ってきてくれる久寿餅がとても美味しかった事を千花に説明したところ、そこはなんと千花の実家である事が判明したのであった。それから千花が自分の家の久寿餅の事について一方的に質問攻めをしてきたのであった。紫郎は本当に美味しかったので自分の本心を千花に言っていた。紫郎の言葉や意見を聞いたら千花はとても嬉しそうな笑みを浮かべて、他のお菓子の事や甘い物全般の話も紫郎と話し始めたのであった。

そして、その会話に千花の親友である甘粕真与。食通で「食についてはクマに聞け」と言われるほどの情報通の熊谷満などが参加してもっと話が盛り上がったのであった。

満とは千花も混ざりながら食べ物のお話をしたのであった。満も千花も川神市のお菓子や甘い食べ物を知り尽くしていたので討論とうろんみたいな事になっていたが、紫郎が二人の話を聞きながら、見た目は？どんな味？食感？後味は？と色々質問しながら二人はその事を説明したりして二人と仲良くなっていたのだ。そして満には「明日、僕がとても美味しいと思ったメロンパン持って来るね」、と言われるほど仲良くなり、千花にも「放課後にお店に来て一緒に名物の久寿餅食べよう」と誘われるぐらいの仲になったのであった。もちろん、紫郎は行くつもりだ。

そして真与も話に参加していたのだが満や千花とは違い食通ではなかったので話しについていけなかったのであったが、満と千花の討論が激化したせいで紫郎の事が忘れ去られた時に紫郎と二人だけで話していたのであった。紫郎の第一印象的に「準が絶対に好きそうだ」、と想ってしまったのであった。色々このクラスの事を真与に聞いたりしたのであったが真与がよくこのクラスの一人一人を見ている事を聞いているだけで分かるぐらいであった。それぞれの癖まで言っているので相当洞察力が良いと紫郎は思っていた。そして何時の間にか真与の家庭の事情や将来の夢の話になっていたのであった。真与の家庭は親の事業の失敗で貧乏な生活になっており、家族総出でバイトをしたりして真与の弟達も新聞配達をしたりして本当に貧しいのであった。一家団結で貧乏に対処しているのであった。自分が勉強ができる事を幸せに思い、学問を役立ててお金を稼いで家族に楽しませてあげたいと強く願っているのを聞いた紫郎は感動していた。そして是非とも自分の会社で働いて欲しいと真与に伝えたのであった。真与の方も最初の方は驚いていたのだが、紫郎が世界的に有名な“櫻井家”の関係者だと聞いて真剣に紫郎の話聞いていた。色々な分野に手を出している櫻井家だから就職口は色々ある事を紫郎から聞いて、学校を卒業するまでに決めておく事を紫郎と約束したのであった。紫郎的にも真与のご家族の為にも何か協力したいとも思ったのもあるし、こうやって必死な人は良く働いてくれるので是非とも欲しいと思っていたのであった。

その他にも大串スグル、福本育郎、源忠勝、楊豆花、浦賀真名などとも結構話をしたのであった。だが、イガグリや羽黒黒子とは話さなかったのであった。



スグルとは、紫郎や千花や真与や満が楽しく話しているのを少し離れた所で睨んでいたのを紫郎は見ていたのであった。そして紫郎はスグルに近寄り話しかけたのであった。千花に止められたりもしたがそれを無視して話し掛けたのであったが最初は話しづらかったものの決闘後のあずみに突き付けた銃について真剣に話を聞いてきたスグルのおかげですんなりと話せるようになったのであった。スグルもスグルで紫郎達がドイツ軍服を着ていた事が気になっていたらしく、それからは銃やドイツ軍についての話で盛り上がったのであった。意外にも話せば分かる奴だと分かったので仲良くなった二人であった。

育郎とは岳人や新一が面白い話をしてそうだと思ひ話に入つた時に話したのであった。でもその話の内容がエロい話をしていたので聞いた瞬間に距離をとつた紫郎であったが、その内容が自分の親しい者の話を始めた瞬間に殺そうかとも思つたのは紫郎の心の内で思つた事であった。その内容は「あの一年胸大きくない!?」「あつちの一年も尻が良くないか?」という話を三人がした瞬間にその三人の頭を鷲掴みにしてドスの利いた声で三人を脅したのであった。その声は三人にしか聞こえなかつたが背中からゾツとして鳥肌が立つてしまったのと同時に土下座をした三人であった。それもそのはずだ、その一年というのはなごみと由紀絵であった。そしてなんとか許してもらつた三人であったが紫郎を怒らせない様にしようと心に誓つたのであった。次、怒らしたらシバかれるので絶対にしないように決心したのであった。

忠勝とは教室の端の壁にいる由紀江と話しているのを目撃したのでそこに割って入っていたのであった。ちょっと遠い距離から二人の会話する所を見ていた紫郎は忠勝が由紀絵を脅しているのかと思っ  
ていたらしく割って入ったみたいだ。由紀絵はオドオドしながら忠勝と喋っていたのであって別に脅されているのではなかった。紫郎の早とちりであつたのだ。少し忠勝と揉めたものの由紀江のおかげで解決してからは忠勝と色々と話したのであった。由紀江も忠勝にはお世話になつたらしく「色々友達を作るアドバイスを頂いた」と言っており「なんだかんだで困っている人を放っておけない忠勝なんだ」と紫郎も軽く笑つたのであつた。それに対し忠勝は「勘違いすんじゃないやねえ、同じ寮の奴が何時もオドオドしてるのがムカつただけだ！」と言つたのに対し紫郎は「やっぱり忠勝はいい奴だな」と言つたのであつたが、それを聞いた瞬間に忠勝は教室から出て行つてしまつたのであつた。怒らせてしまつたと思つたのだが由紀江が言うには照れている、と言っており紫郎も由紀江も曖昧な答えであつた。どう思っているのかは忠勝しか知らないものであつた。でも紫郎的には久し振りに会つた友<sup>ダチ</sup>が全然変わっていない事に対して嬉しかった心境であつた。

豆花とは、なごみの料理を食べている時になごみに話し掛けてきたのがきつかけであつた。なごみの料理を一口貰つて食べた豆花がなごみを是非とも料理部に来て欲しいと話しかけたのであつてそれを拒否するなごみに対して紫郎は「これもいい経験だぞ」と言つて豆花を支援したのであつた。だけどなごみは断固拒否を続けたのであつて理由を聞いたところ……「センパイという時間が減つてしまつから」と言つたのを紫郎が聞いた途端になごみに抱きついて愛で始めて「やっぱりなごみはやらん。ダメだ」と先程と言つてい

ることが真逆になっていたのであった。その事について豆花が黙っているはずもなかった。豆花は紫郎に料理ができるかと聞いて「できる」と紫郎が答えた瞬間になごみを掛けて料理勝負をしろと言い出したのであった。そして勝手に景品みたいにされたなごみは「センパイが負けるはずありません!」、と言つてその条件で良いと応えたのであった。勝手に決められた決闘みたいな事に紫郎は少々戸惑ったものの挑まれた勝負は受けるのが男だろうというのが紫郎の考えであった為に勝負を了承したのであった。近々勝負すると口約束をしたのであった。豆花は料理部の部長であるが果たして結果はどうなるか…?

真名とはきぬが紫郎に絡んで来た時に一緒に絡んできたのであった。最初は軽く自己紹介をして、きぬと話しながら真名とも話していた紫郎であった。豆花も混ざり世間話や自分達の趣味の話にもなった時に真名の趣味が陶芸と聞いて意外だなと紫郎は思っていたが、真名が陶芸の良さを熱心に語るものだから本当に好きなんだと分かる事が出来た。「世界でひとつのしかないオリジナルの陶芸作品ができる」「生涯ずっと楽しめるものだ」、と色々と熱弁してくれるうちにやってみたいと紫郎は思ってきたってしまったのだ。そして今度暇なときに真名と陶芸教室に行くという約束していた紫郎であった。

他のメンバーも紫郎や転入生と話をして盛り上がっているのであった。クリスマスや瀬麗武も弁当を食べながら仲良しそうに話しているのであったが風間ファミリーメンバーや対馬ファミリーメンバーも話

し掛けたりして友好を深めたのであったが、瀬麗武が皆に対して素っ気ない態度を取った為にきぬがあだ名をつけてしまったのであった。名前から「お嬢」や「ヒルズ族」と名づけた……エリカは「銀ちゃん」と言っているみたいだが、瀬麗武はまったくそれを気にしていなかったので良いみたいだ。そしてその会話に紫郎が入ると瀬麗武の態度が思いつきり正反対になっており紫郎の前では喋るようになっていたのであった。瀬麗武の変異に新一や岳人や育郎は「ギヤップ萌え」とか言いながら騒いでいたのであった。

そして話は戻り、何故に由紀江となごみを愛でている状態になっていたのかというと、由紀江は忠勝のおかげで教室の端から紫郎の近くには寄ってきていたのだが話す相手がなごみ、紫郎しかいなくてオドオドしている所を大和や翔一達、島津寮組が由紀江に話し掛けていたのを紫郎は見ていたのであって、話すならもつと真ん中に来ていという事で紫郎の隣に来た由紀江であった。なごみはその反対の隣に居たのであった。

そして二人は皆から同じ事を聞かれたのであった

『櫻井ノ紫郎とはどういう関係なんだ？』

という問いに対して紫郎は何か期待している表情で二人を見たのだが、由紀江がそれに気付いて何かを言おうするよりも早くなごみが言った：「私達は妻です！」、と大きな声でハッキリと言った

のであった。予想外の答えに紫郎は椅子から転げ落ちたのであった。そして周りに居た連中も由紀江も驚き過ぎて口が開いたままで硬直状態になっていたのであったがすぐに驚きの声をあげていた。そして紫郎に問い詰めに掛かる男達と、なごみや由紀江に問い詰める女子達で別れたのであった。紫郎は新一や岳人とかに色々と問い詰められたが五月蠅かったので黙らせたのであった（気絶というなの武力行使）、他にも紫郎に聞いてきた大和、卓也、レオ、スバルは普通に応えたのであったが大和やスバルにはなごみが言った事が嘘だろうと分かっていたみたいだ。

女子メンバーも京や瀬麗武やクリスが物凄い勢いで二人に掴み掛かりかけたがエリカがそれを止めていたおかげで問題も起きず静かに話し合う事ができた。そしてエリカを筆頭に一人一人質問を始めたのであった。京、瀬麗武、クリスが「自分こそ妻に相応しい！」と言っており、なごみや巻き込まれた由紀江を睨んでいたのであった。由紀江は「私が妻私が妻……」、とブツブツ言いながら赤くなつた頬に手を当てテンパっていた。

結局：「妹みたいな存在」だと紫郎が言ったのでその場を静めたのであったが、なごみは明らかに分かるくらい浮かない表情をしているのをエリカは見逃さず生徒会の方に弄るネタにしようと思つたのであった。由紀江の方はこの場が静まって良かった、と胸を撫で下ろしていたのだが、自分でも気付いていないみたいだが少々悲しげな表情が見えたのは紫郎と大和だけが見ていたのであった。だがそれだけでは終わらなかつた紫郎であった。隣にいる二人の表情が少し暗くなつたのが分かつたので付け加えて二人に聞こえるぐらい声で言ったのであった。

「今はだけどね」

その言葉を聞いた瞬間に二人共紫郎の顔を凝視したと思っただけではなく耳まで赤くなって俯いた二人を「萌えた」、と思いい愛で始めたのがなつた原因であった。

そしてその愛でている状況を黙っている者がいるわけがなく、京、瀬麗武、クリスがそれを止めに入ろうとするのだが、暴走状態の紫郎に掴まり愛でられるという状況になってしまったが三人共その行為を受け入れてしまい、紫郎の思い通りになってしまったのであった。だが女子だけではなく男でも翔一が抱きついたりした時は女子の悲鳴があがったのであったが、それは女子から見て翔一と紫郎が何かに見えたようだ。

それからその状態が続いたりして昼休みが終わったのであった。

後、紫郎が皆と話している時に百代と準の放送という名のラジオが始まったのであったが百代がどれほどモテているかというのが十分に分かった。放送が始まった途端、他の教室から黄色い声が聞こえてきたりしたので分かったのであったが、何よりも準がお便りでの質問やお願いが全部百代への告白やら好きな事やらとモテモテっぷりがはつきり分かったのであった。準も準で幼女の事を話したりするのだが、百代に殴られて止められている始末であった。皆は何時もおんな感じだから別に違和感がないみたいでも今日転入してきた

紫郎達にとっては驚くべき事だった。百代へのお便りも多かったが紫郎や転入生へのお便りも多かったみたいだ。

そしてあつという間に放課後になってしまったのであつた。

ホームルームも終えて生徒達は帰るなかで紫郎は呼び止められたのであつた。

「あ、紫郎、ちょっと竜宮まで来てくれないかしら？」

紫郎を呼び止めたのはエリカであつたが後ろに良美も居た。

「竜宮つてなんだ？」

紫郎はまだこの学園内の地理を把握していないのであつてエリカに言われた事がさっぱり分からないのであつた。

「簡単に言えば生徒会室ですよ」

分からなかった事についてエリカの後ろに居た良美が応えてくれた。

「おおー、紫郎を生徒会に入れるのか姫？」

きぬがそれに反応したのであった。さすがにエリカが竜宮まで呼ぶという事はそういうことになるのか。

「ええ。紫郎ほどの逸材を野放しにしておくのは勿体無いからね」

エリカの言う事は分かる気がする。それを聞いていた大和は思ったのであった。幼馴染であるから分かるみたいだが紫郎は何でもどんな作業も軽々とこなしていたし、初めての事もやっているうちに慣れてきて完璧にこなしてしまう存在なのであった。

「そういう事だから行くわよ　よっぴーも反対側に抱きついて！」

エリカは大胆にも紫郎の腕に抱きついて、反対側にも良美を抱きつけて逃がさないようにしようとするのだが、良美はさすがに遠慮しながらオドオドしているのであった。腕に抱きついて連れて行くとするエリカだが…

「ちよつと待て！　悪いな、大和達は先に帰っていていいよ、愛紗も凧もな」

そう言うと連行されて行った紫郎であった。



それを見ていた人達は…

「なんだよ、なんだよ、姫の奴：俺達の紫郎を連れて行きやがって！」

ブーブー言いながらだれる翔一が居た。

「まあまあ、これからずつと会えるんだからいいじゃんか（紫郎の奴も疲れが貯まってるのに大変だな）」

翔一を宥めるなだる様に接する大和であったが内心では帰って来たばかりの紫郎の事を気遣っていたのであった。

「明日も何かの用事があるって言うていたから一緒に帰れないけど明後日にある金曜集会にはちゃんと出るって言うていたよ」

卓也が言った。卓也も昼休みの中に色々と話していたみたいだ。

「久し振りに全員揃うって訳だな！」

岳人も嬉しそうに言った。

「わーい！ 本当久し振りの事だよね全員揃うのって！ 嬉しくない京？」

一子も嬉しそうな笑みで嬉しさのあまり飛び跳ねていた。

「そうだね、本当久し振りだね（姫もやるね、放課後に竜宮で紫郎を独り占めするつもりなんだろうな）」

一子に話を振られてそれに曖昧な表情で応えていた京であった。紫郎の事が気になってしょうがないみたいだ。

「家に帰ったら紫郎に甘えよう！。ん〜マシユマロ美味しい〜」

マシユマロを片手に持ちながら帰ろうとしている小雪であった。

風間ファミリーメンバーは紫郎と帰るつもりであったのだがエリカに紫郎を奪われてしまったからしょうがなく帰って行った。でも明後日にある“金曜集会”で全員揃うと思うと嬉しそうな笑みを浮かべる翔一と一子が居たのであった。

「これでもっと学園生活が面白くなるかもな」

レオはまだ分からない事であったがなんとなくそう思ったんだろう。昔から一緒に居て紫郎と居てつまらなかつた事は“あまり”なかつたから言ったのかも知れない。偶に本たまばかり読んでいて自分達に構ってくれなかつた事があつたから“あまり”だそうだ。

「早いとこ姫達を追いかけようぜえ！」

きぬは鞆を背負いエリカ達を追いかけようと走って行こうしているがスバルに止められたのであったが喚き始めたのであった。

「別に竜宮は逃げやしないぜ、焦る事ないだろう」

きぬを止めながら席から立って行こうとするスバルであった。常にクールでいるスバルはやはり対馬ファミリーのアニキ的存在だ。

「じゃあ行きますか、俺のハーレム空間に！」

突如何を言い出すかと思ったら新一ではありえない事を言ったのであって、レオ、スバル、きぬがじいーっつと可哀想な物を見る目で見ていたのであった。

「スイマセンっす！」

土下座で三人に謝っていた新一であった。

そして四人とも竜宮に向かって行ったのであった。

「では私達も帰りましょうか、小雪は先に帰ってしまいましたか」

愛紗達はこれから帰ろうとしている所であった。

「愛紗さん、先程、紫苑さんや祭さんからメールが来て今日の夕飯の材料を買わなくてはならなくなってしまいました」

凧はさつき来たメールを愛紗に見せたのであった。

「じゃあ私も付き合うから一緒に買いに行くか、二人は如何しますか？」

メールの内容に納得したみたいで二人で買いに行くことにして後の二人にもどうするかと聞いたのであった。

「買い物と一緒に良いのですが…川神市の案内を頼みたいのですが…？」

クリスは凄い丁寧口調で愛紗と凧に言ったのであった。

「いいですよ。それとそんな丁寧な口調じゃなくていいですよ、これから一緒に暮らすんですから」

愛紗はクリスの口調が丁寧過ぎていて可笑しいと思ってしまうって少

し笑みを浮かべてしまったのであった。

「そうですか、では宜しく頼みます（川神市とは一体どういう所なんでしょう）」

クリスはクリスで新しい場所に來た喜びで早く街を歩きたいと思っているのを必死で我慢している状態なのであった。

「瀬麗武さんはどうしますか？」

凧の問いに瀬麗武は…

「私はもうちょっと残って、この学園の地理を知ってから帰ります」

瀬麗武はまだこの学園を知り尽くしてはいなかったのであったが為に知っておきたかったみたいだ。

「分かりました。では私達は一足先に帰りますので」

愛紗達はそういうと鞆を持って帰って行くのであった。

## 第十話 昼休み（後書き）

今回の話であった豆花と料理勝負はオマケの話で書いてみます。  
真名も同様に陶芸をやりに行く話を書いてみます。

ミイに言った台詞は「陵辱<sup>じやうじゆく</sup>して俺の奴隷にしてやろうかあー」と言  
いましたが、周りの人には聞こえてません。  
そして聞かれたらまず最低な目で見られていたでしょうね。

スグルの中の人は“少佐”なのでネタにしてみました。

今回は長く書いてしまった上に更新する事を忘れるぐらい集中して  
書いてしまいました。  
申し訳ありません。

しかも今回は字ばかりなので誤字脱字が結構な数ありそうなので  
心配です。  
自分でも確認しましたがかなりありましたので「間違いすぎだろう」  
と内心で思ってしまうほどでしたからww

タイトルに「真剣で私に恋しなさい！」なのに、つよきす、君が主  
で執事が俺で、が話に良く出てきてしまうんですけどね。これって  
ありなのかな？

く四天王く

川神百代、九鬼揚羽、鉄乙女、橘天衣

（今の所はコレですが、絶対に後で変わります）

話を進めて行くうちに由紀江が天衣を倒してしまいますから。

く強さランクく

巨人と梅子を追加しました。（この二人の位置は予想ができなかったので適当に入れてしまいました）  
冬馬が二つ下がりました。

紫郎

家族組（恋姫メンバーの武官組）

百代 平

蔵 〓 幾蔵 〓 鉄心

由紀江 〓 揚羽 〓 乙女 〓 板垣辰子 〓 南斗星

「マルギツテ・エーベルバツハ 瀬麗武」 積迦堂刑部 フラン  
ク（メフィストフェレス状態） 「あずみ」 ルー師範代」 大佐  
板垣亜巴」 梅子 クリス」 小雪 京 心」 一子 エリカ」 板  
垣天使」 板垣竜平」 武蔵小杉」 巨人 上杉レン」 小十郎」 準  
スバル」 キャップ」 忠勝 英雄 岳人」 レオ 冬馬」 大和  
モロ。



## 第十一話 竜宮（前書き）

誤字脱字があつた場合は報告を御願ひします。

## 第十一話 竜宮

紫郎はエリカに連れられて竜宮という場所に来ていたのであった。

「あ、もうなごみんが居る（ふっ……予想通りね！）」

「早いね、椰子さん」

先に入って行ったエリカと良美は一番乗りで来たつもりであったが先にもうなごみが居たのであった。だが、エリカはなごみが先に来ている事を粗方あらかた予想していたのか、内心で笑みを浮かべていたのであった。そして先程まで一緒だった紫郎は一体何処に…？

「お姫様に佐藤先輩ですか……どうも」

なごみは椅子に座り読書をしていたらしく眼鏡を掛けていたのであった。エリカ達が入ってきたのに気付いたらしく、顔だけを二人に向けて挨拶をした。今のなごみは無愛想な態度である。やはり紫郎の前と他の人の前だと圧倒的に態度に違いがあるなごみであった。

「お前な、人に書類持たせるとは何様だよ！　　ったくよ……おおー、なごみじゃないか！」

エリカや良美から遅れること、数秒後に部屋に入って来たのは紫

郎であった。片手には鞆を持ちながら、もう片方の手には書類らしき紙を持っているという状態である。

「せ、センパイ！ あ、鞆と書類持ちます」

二人に素っ気ない態度をとっていたのから一転して、椅子から立ち上がり紫郎に寄り、手に持っている鞆と書類を持つ、と言って紫郎に寄って来るなごみである。まるで家に帰ってきた夫を玄関口で待っている妻のような行動に見えてしまうほどである。

「ありがとな、じゃあこの書類をエリカに渡してくれ」

紫郎は書類をなごみに渡して、空いている席に座ったのであった。

「ごめんね。本当は私が持つはずだったんだけど…」

席に座ってすぐに良美が紫郎に寄ってきて話したのであった。何時もエリカのサポートをしている良美は自分が持つはずであった書類を紫郎が持つてくれた事を気に掛けていたのであった。

「いいよ、いいよ。それにエリカがいつも佐藤さんに迷惑掛けているって聞いたからね、少しでも負担を楽にさせてあげたかったしね」

良美が話し掛けてきたのに対して笑みを浮かべて返答した紫郎である。竜宮に来るまでの少しの時間に色々としと良美と話した紫郎であった。朝から放課後まで常にエリカの近くに居て、何から

何までサポートしてくれる良美に少しでも疲れが貯まらないように紫郎なりに気を配っていたのであった。

「ありがとう…でも好きでやっている事だから気にしなくていいからね（私のことを気遣ってくれてるのかな…）」

エリカの綺麗な笑みを見慣れている良美でも何かが圧倒的に違う紫郎の笑みで、薄く頬を赤く染めているようであった。それとも違う事を思って頬を染めたのかもしれない。

「ちょっとー、紫郎は私の親ですか！」

その会話を聞いていたみたいでエリカが笑みを浮かべながら紫郎を指さで指している。

「お前が人様に迷惑を掛けていたりするのは止めて欲しいから言っているんだ」

少々呆れ顔でエリカに向かって言った紫郎であった。

「はいはい、私とよっぴーは親友同士なんだから別に迷惑じゃないんだから、ねー、よっぴー？」

素っ気なく返事をして親友と言っている良美に抱きつくエリカで

あつた。良美もそれを嫌とは思わず、笑顔を浮かべて受け止めているのであつた。

「心配してくれてありがとう。でもね、さっきも言ったけど私も好きでやっている事だからね」

抱きつかれながら紫郎に言う良美である。

「…分かつたよ。二人の仲にはそれ程の絆があるんだな、それにしても二人共良い親友を持って良かったな」

良美に言われて納得した紫郎であつた。そして二人共抱きつきながらとても嬉しそうな笑みを見せてくれて、本当に仲が良いんだ、と内心で思ったので言葉についつい言葉にして出してしまった紫郎であつた。

「ええ！ 最高の親友よ！」

「ちよつと、エリー…」

エリカは堂々と言ってくれたのが嬉しかったのか、頬を赤く染めて照れているようで恥ずかしがっている良美であつた。エリカの満面の笑みを浮かべながら言っているのだから、親友でもある良美にはそれが本心で言ってくれているのだと分かつたので嬉しかったんだろつ。

「センパイ、紅茶をどうぞ」

この話に参加していなかったなごみは何をしていたかというところ…台所の方で紅茶を入れていたみたいだ。だが、この場にはエリカも良美もいるのに紫郎だけに紅茶を淹れてきたのであった。

「あ、それは私がやろうと思って「センパイのはあたしがやりますので結構です」あ、あーう、分かった」

良美がやろうと思っていた事を先になごみがやってしまったらしい。なごみ的には自分が紫郎の何から何まで気であるという意気込みが伺える。本当の妻みたいに紫郎の面倒をみているなごみである。

「愛されているわね。あ、よっぴー、私も紅茶でお願い」

エリカに言われるよりも先に良美は台所の方に行っており紅茶を淹れているみたいであった。まるで主に仕えるメイドみたいに動く良美である。

「うん、美味しいね。さすがはなごみだね」

一口飲んで美味いと分かる程であった。

「本当ですか、嬉しいです」

なごみも紫郎に美味しいと言って貰えたのが嬉しかったのか、嬉しそうに笑みを浮かべて頬に手を当てていたのであった。そしてさりげなく紫郎の隣に座るなごみであった。

そしてなごみが淹れてくれた紅茶をじっくり味わっていると廊下の方から変な歌を歌いながら聞き覚えのある声が聞こえてくるのであった。

その声の主はきぬであった。なんでもフカヒレのテーマ曲を歌いながら現れたのであったが、相変わらず新一がボケまくっているのであった。テーマ曲は入場曲にも聞こえてしまつて、きぬと紫郎は同じ事を思っていたのであった、フカヒレみたいのが入場してきた瞬間に空き缶投げつけてやるという気持ちであった。新一も「冗談だろ」と言っておるが、全員で、じいー、と見続けた結果…冗談じゃないという事が分かったみたいで、良美に助けを求めると良美は良美で片手にビール瓶を持っていたのであった。それを見たフカヒレはガクブルしながら怯えていたのであった。

対馬ファミリーの連中が来て生徒会の顧問である祈先生も来て全員揃つたようにも思ったが乙女が来ていなかったものであった。スバルが言うには「部活に顔を出しているんだろう」という事でエリカに言われてレオが呼びに行かされそうになったが新一が立候補して呼びに行ったのであった。なんでかやる気に溢れているフカヒレにきぬが驚いていたが、フカヒレの事だから、ろくな事ではないと把握していたのであった。さすがは幼馴染だ。

新一が行った後は雑談をしながら良美となごみがケーキとクッキーを作ってくれていたのでそれを食べながら皆と話していたのであった。なごみはもちろん紫郎にクッキーを食べさせていた、昼の時と同様に「あ〜ん」言いながら甘い甘い空間を築き上げていたのだ。その行為に対して普通に受け入れている紫郎である。その行為を見ていたエリカやきぬもふざけ半分で「あ〜ん」とやっていたのであったが、祈先生も混ざってしまいハーレム空間になっていたのだった。レオやスバルは「お母さんは嬉しいわ」「お父さんも感動しているぞ」、と言いながら夫婦漫才みたいなお事を行っているのだった。

そしてそのハーレム空間を強化する出来事が起きてしまったのであった。

なんと！ エリカ一筋の良美が参加してきたのであった。フオークで一口ぐらいにケーキを取って紫郎に「あ、あ〜ん」と恥ずかしながらもさりげない仕草でしてきたのであった。この場に居る全員が唖然としていたものの紫郎だけは冷静に差し出されたケーキを食べていたのだった。紫郎はその良美に差し出されたケーキがとても甘く美味しいと舌で感じたので、ちゃんと本人に言っておいたのだった。良美は食べてもらって美味しいと言われたのが嬉しかったのか、うっとりとした表情で紫郎を見ていたのであった。一回だけでは終わらず何回もその行為にしている、いつの間にかカップルみたいにイチャイチャな空間が出来てしまっていたのだった。それを黙って見ているわけがない、自称“紫郎の嫁”を名乗っているなごみが割り込んで、左に良美、右になごみという美少女二人に挟まれるという状況になっているのであった。二人共積極的に紫郎



に体を寄せてくるので胸が当たったりして少々いかがわしい事を思  
つてしまっている紫郎であった。

「あのー、二人共少し離れてくれるかな？」

だいぶ困った表情を浮かべている紫郎に対して二人は…

「センパイはあたしが嫌なんですか？」

「なんで？」

なごみも良美も上目遣い全開で色気が出ており色っぽいと思つて  
しまうほどであった。二人共抜群のスタイルなのでそれを十分に生  
かしていたのであった。レオやフカヒレだったら絶対にイヤラシイ  
事を考えてしまうだろう。

「いやではないぞ……寧ろ歓迎！」

(こつこついう時…女に弱いな…俺…)

二人の上目遣いの攻撃に対して離れる事も振り払う事もできずに  
その行為を受け入れてしまっている紫郎である。受け入れてくれた  
紫郎に対して二人共嬉しかったのか、抱きついている腕に力を込め  
てしまっていた。

・ ・ ・ ・

しばらくしてから新一が戻ってきたのだが

何故だか、乙女ではなく瀬麗武であった。

「あら、どちら様？」

「名前覚えてあげようよ」。転校生の橘さんでしょ」

「ふーん……………小さいわね」

突然来た瀬麗武に慌てることなく対応するエリカであったが、瀬麗武の一部分を見て、隣に来た良美の一部分を瀬麗武と同じ感じで見、鼻で笑っているのであった。

その言葉が聞こえていた、レオとスバルが「胸か！ 胸なのか？」と同じ事を思ったのであった。そんな中紫郎は優雅に紅茶を飲んでいたのであった。

瀬麗武はいいとして皆が冷たい目で新一を見ているのであった。

「おい、乙女さんと呼んで来るんじゃないのか？」

瀬麗武にこの生徒会室の事を説明している新一に対してスバルが聞いたのであった。

「あー……、俺ってさ一つの事に集中しちゃうとそれにのめり込むタイプって奴なんだ」

その新一の言葉に皆は退いたのであった。きぬやエリカなどは鳥肌が立ってしまったらしく新一から五、六メートル離れているのであった。

「…紫郎はここに来ていたのか」

まだ新一が説明をしているのにも関わらず紫郎を見つけたらすぐに寄って来たのであった。新一の奴は生徒会の事を熱く語っているので瀬麗武が居なくなっていた事に気付いていない。

「それで今日はどの様なご用件で？」

髪を弄りながら少し軽い口調でエリカは言った。

「校内を見学している最中に、このサルがここへ連れて来た」

サルって言った直後に思わずこの場にいる全員が笑いかけてしまった。きぬは机を叩きながら笑いを我慢するどころか爆笑していた。

レオやスバルはフカヒレから見えないように笑っていた。なごみと良美も笑いを堪えているようであった。祈先生は椅子から落ちて床を叩きながら爆笑して、土永さんも笑っていたのであった。エリカもついつい笑ってしまったのであった。

そして当の新一はまだ瀬麗武が離れているのに気付いていないらしくまだ説明をしている。

「ふーん。それでフカヒレクンは何で連れてきたの？」

エリカの問いに全員が聞き耳をたてたのであった。

「…可愛かったから……かな？　ふう、まったく可愛いつて罪つてさ、よく言ったもんだと思わないか？」

「末期症状ですわ」

祈先生が言った事に皆が頷いたのであった。祈が言ったのは納得できたのであった。早く精神科に連れて行った方がいいんじゃないのかと思ってしまった紫郎である。もしかしたらこの場にいる新一以外の人も思っていた事なのかもしれない。

結局、乙女さんがいないと会議ができないので呼びに行く事になったのでレオとスバルが行く事になった。一人で良いと思っただけ、スバルは部活に顔を出してくるみたいなので納得したのであった。ついでに新一も連れてかれたので、男は紫郎一人、他は女性陣である為まさしく“ハーレム”な紫郎であった。

「で、紫郎の隣にいるダディアナはどのくらい強いのかしら？ 私には今朝の決闘で全力で戦っているようには思えなかったのよね」

「橘だ」

改めてここでエリカの凄さを思い知った紫郎であった。隣にちゃっかりいる瀬麗武も驚いたようで目を見開いていた。きぬやなごみや良美も驚いていた。祈はケーキを食べながら「まあまあ」と言いながら驚いた。祈の反応は瀬麗武の事なのか、ケーキが美味しかったからなのか、が分からない。

というかダディアナってなんだよという事を内心で思っていた紫郎であった。その事に冷静に対処する瀬麗武も凄いと思う。

「んー、確かに本気出してなかったよな？」

「ああ、あの二人ぐらいなら私一人で余裕だった（コイツはあれだけで私の実力が分かったのか？）」

紫郎も瀬麗武が本気で挑んでいなかったのに気付いていたみたいだ。紫郎は色々瀬麗武と鍛錬をした事があったので瀬麗武の實力は分かっていたのであった。

それよりも京や一子を相手にしても余裕で戦えるってどれだけ強いんだと思ってしまった人も居るようだ。この学園でも上位にくる實力者だと生徒達に知られているので驚くのはしょうがない。

瀬麗武も表情には出さないようにエリ力を警戒をしているようだ。瀬麗武はあの場では全開の實力を出してはいなかったのにそれに僅かながら感付いているエリ力に要注意すべきだと思っているのであった。

「一子はまだ成長中だからこれから期待できるし、もしかしたら瀬麗武ぐらいの實力になるかもしれないぞ。それに京はまだ實力隠しているぞ、クリスもだけど」

ここで新事実が発覚したのであった。紫郎の口から明らかになっ  
ていく事実。この場にいる全員は驚くしかなかった。でも瀬麗武は  
その事には気付いていたしく大して驚いてはいなかった。瀬麗武は  
戦っている中で違和感を感じていたので、紫郎から聞いた事により  
その疑問が解決したのであった。

「この学園って實力隠している人が結構いるんですね」

なごみが言った事に納得してしまう面々。

もしかしたらまだこの学園には隠れた実力者が居るかもしれない。

「話を戻すけど、瀬麗武の実力は俺が自己流で作った流派の“櫻井流”を使えば乙女さん以上かもしれないが…使わなければ乙女さんよりは劣るだろうな」

紫郎の言った事にまたもや驚くのであった。つまり瀬麗武は武道四天王の一人にされている乙女と同等ぐらいの実力という事になるのだ。

今いる武道四天王は……川神百代、九鬼揚羽、鉄乙女、橘天衣とされているが、瀬麗武のような存在が世界中にいる為にいつ四天王の誰かが倒されてその地位が変わるのか分からないのである。だが、唯一…川神百代は四天王の中でも別格とされている。

「……………（私は……………まだ……………くっ）」

紫郎の言葉に顔には出さないようだが、内心で本当に悔しそうにしている瀬麗武。顔には出ていないのだが、手をギュッと握り締め、強く握りすぎて血が出そうなくらい力を込めているのが分かる。

「俺達これから“ずっと居るんだし”まだまだ強くなれるよ、だからそんなに悔しそうにするなよな、瀬麗武」

紫郎は隣にいる瀬麗武が悔しそうにしているのに気付いていたらしく、自分が言った事でこんな風にさせてしまったんだと自覚していたので申し訳なさそうにして瀬麗武に言ったのであった。

「別に悔しくなんてしていない」

紫郎とは真逆の方を向いてしまった瀬麗武であったが、自分が悔しがっているのを紫郎に見抜かれて恥ずかしかったらしい。

「悪かったよ」

「別に気にしてはいない」

瀬麗武の機嫌を悪くしてしまったと思いきや撫でながら謝ったのであった。瀬麗武も全然気にしていなかったようだ。撫でる行為も受け入れているのであった。

「はいはい、その二人！ イチャつくのは止めなさい！」

手を叩いて、注目ー！ と言わんばかりにエリカが言った。その言葉を聞いて紫郎は撫でるのを止めて瀬麗武の頭から手を離したら



「あつ」と瀬麗武の口から漏れたのであった。瀬麗武も出すつもりは全くなかった筈なのに無意識で出てしまったらしい。周りの面々はその一言の意味が分かっているらしく、視線が瀬麗武に集中したのであった。その視線に耐え切れず下を向いてしまった瀬麗武であった。まだして欲しかったのか、と何故だか分かっていた紫郎は止めた手をもう一度動かそうとしたのだが反対側に居たなごみが求めてきたのでなごみにしてあげたのであった。

「ねえー、紫郎」

「な、何だ？」

不敵な笑みを浮かべているエリカに対して何か仕掛けてくると察知したので警戒する紫郎であった。

「さっきの「ずっと居るんだし」「ってどういうこと？」

その言葉を聞いて自分の凡ミスに気付く紫郎であった。瀬麗武も「あつ」と思い出したみたいで、隣にいる紫郎に視線を向けたのであった。瀬麗武だけではなく、この場に居る全員が紫郎の事を見ているのだ。

「紫郎ー、正直に吐きな！ さもなきや、僕のヘッドロックかますぞー！」

席の上に立ち紫郎に指を指して怒っているきぬである。

「どづいう意味なの？」

フォークを持って聞いてくる良美。

「センパイ……まさかとは思いますが……」

驚愕の表情を浮かべて聞いてくるなごみ。

「それは……私もわたくし気になり……ましたわ！」

ケーキを食べながら聞いてくる祈先生。

「ああ、えつとだな「お姉ちゃんもそれは気になるのだが？」えつと……えつ？」

珍しくどづやって応えたらいいか、戸惑っている紫郎であった。戸惑っている最中に何故だか背後から聞いたことのある声があったのであった。

「……乙女さん／先輩！」「……」

背後にいたのは刀を常に持ち歩いている風紀委員長、鉄乙女であった。祈先生以外は気付いていなかったらしい。祈は土永さんからいるのを聞いていたので驚きはしなかったのであった。紫郎はどうやって応えようかと悩んでいたので存在に気付かなかったのだ。

「ほら、蟹沢はちゃんと座れ、佐藤はフォークを人に向けない、椰子は紫郎から離れる！」

何故だか最後のなごみの注意のときだけは声が大きくなっていった。乙女の注意に全員それに従ったのであった。

「レオやスバル達は？」

「ここに来る途中で会ったが、伊達が部活を覗いてくるのに付き合っただけだからここに来ると言っていたぞ」

乙女は席について紫郎から聞かれたことに答えたのであった。

「で、だぞ！ 話を戻すが「ずっと居るんだし」とはどういう訳だ！ お姉ちゃん怒らないから言ってくれ」

（いやいや、笑顔を浮かべているのも怖いんだけど………まったく笑っていないぞ！ 怖すぎるー！）

別の話題に変えて逃げようとした紫郎であったが、話を元に戻す乙女に圧倒されてしまったのであった。「怒らないから」と笑顔で言ってくれているのだけどその笑顔は笑っていない………恐怖を感じるぐらい怖いのであった。逆にその態度で怒っているって分かっ

しまった紫郎である。

「……まあ、隠していてもどうせバレるから言うけど、今日転入してきたクリスと瀬麗武は家で暮らす事になったから、だから“ずっと居る”って言ったんだよ」

紫郎は正直に言ったのであった。

「……（なんだ、そういうことだったのか……私は将来もずっと居るのだと思っていた）」

瀬麗武は恥ずかしがっていたのが馬鹿らしくなってしまったらしい。でも「ずっといる」だけでそこまで想像してしまう瀬麗武は凄いなと思う。

「ちよつと！ それってもしかしてどう「お姉ちゃんは認めないぞ！」ちよ！？」乙女センパイ落ち着いて！ 地獄蝶々は館長の許可がなくちや抜刀しちやいけませんよー、よっぴー止めるの手伝ってー、ってよっぴー！？」

エリカが何かを言おうとしたみたいだが、乙女がそれを遮る様に発言したのであったが、乙女は目の前にある机を思いっきり叩いてしまつて机が悲鳴をあげていた。今にも地獄蝶々に手を掛けてるので暴走しかねない為にエリカが落ち着かせようとしているのであったが一人では荷が重いらしく良美を頼ろうとしたのだがその良美

も……

「へえー、二人は一つ屋根の下で一体何をしちゃうのかな？」

エリカの声など聞こえてもいない様子で目に生気が籠ってない良美は紫郎ではなく瀬麗武のを凝視している。でも瀬麗武は少し悲しげな表情を浮かべて何かを考えている状態だったので良美の目線に気付かなかつたのだ。

「センパイ！ ならあたしも家に住まわせて下さい！ 掃除・洗濯・食事の事まで家事の事は任せて下さい……それとセンパイの……」

服を掴んで必死に頼み込んでいるなごみ。そんなにも離れたくないのか。そして最後の言葉が声が小さくて聞きづらいいのであった。

「マジかよー！ 紫郎の家ってあの豪邸かよー、僕も住まわせやがれ！」

きぬも幼馴染なので何回も遊びに来た事があるので紫郎の家の事は熟知したのであった。そしてこの中で唯一遊び気分に住まわせる、と言っている。

「……皆さん紫郎さんにもお家にも事情というのがあるのですから  
わたしは教師ですから何時でもお家に伺えるのでいいですけど」

きぬとは違つてこの中で唯一正論を言つてくれたのであつたが、美味しそうにケーキを食べながらとても嬉しそうな笑みを浮かべていたのであつた。とても意味が有り気な笑みである。意味というか獲物をどうやって捕縛しようか考えている表情に見える。

「乙女姉さんは落ち着いて、佐藤さんも落ち着いて、なごみはのかさんもいるんだから住むのは無理だろ、きぬは何時でも遊びに来れるんだからいいだろが、そして皆も祈先生を見習つてくれよ」

それぞれに注意して落ち着かせようと思つた紫郎であつた。

だが、それでも落ち着く様子がなかつたので、少々困りかけていた紫郎であつたが、丁度いいタイミングでレオ達が戻ってきたおかげで話を逸らして生徒会の会議の話に強制誘導したのであつた、エリカも協力したのでどうにか話を揉み消せたのであつた。

それからはちゃんと会議を始めたのだけど全くと言っていいほど生徒会の仕事とは違つた内容だつたのだ。

「今日の内容は二つあるの、まず一つは今日来たばかりなのにもう有名になつた紫郎の事よ、彼をこの生徒会に入れようと思つているの、反対する人はいるかしら？」

多少、乙女やなごみが不機嫌なものの話が始まったのであった。良美はエリカが何やらよからぬ事を言ったみたいで、エリカが良美の耳元に近付いて何か喋っていたら顔を真っ赤にしてオドオドし始めたのだ。それで良美の病ヤシんだ状態は解決したのだ。

「別に問題はない（上手く話をはぐらかされてしまった、この後問い詰めて……あー、館長に呼ばれていたんだ、後、部活の連中も見に行かなくてははいけないし、くそ、家に帰ったら電話してやるぞ！）」

まだ話を逸らされた事を根に持っているらしく、誰から見ても不機嫌というのが伺える乙女であった。素っ気なくエリカの意見に応えて内心では紫郎に問い詰めてやろう、と思っているみたいだが、この後の事が色々あるらしく暇がない事に多少怒りが出てくるものの帰ってから電話すればいいという結論を出したみたいだ。

「あたしは大賛成です。お姫様もたまには良いこと言いますね（これでセンパイと居る時間が長くなるんだ……うん、嬉しい）」

乙女とは違って話を逸らされた事には怒っておらず、今出された意見に全力で応えるなごみ。

話を逸らされたのではなく紫郎の言った事に納得してしまったのであった。のどかと一緒に住んでいるのになごみだけ紫郎の家に行くとしたら一人だけにさせてしまうので、やむなく引き下がったの

であった。

「私も賛成かな（エリーが人を褒める事なんてなかったから、櫻井くんはきつと素晴らしい人材なんだと思うな。それに　ねえ）」

正常に戻った良美はエリカの意見に賛成の模様。多少、頬が赤いのは気のせいであろう。

「反対なんてするか！　賛成に決まってるぜー！」

きぬも賛成のようだ。反対する奴がいたとしたら殴りかかりそうな勢いである。

「俺も賛成だな。またこうやってつるめるんだからな、スバルもそうだろう？」

「そりゃなー、というか、反対する奴なんていないだろう」

「俺も賛成！（紫郎の近くに居れば女の子が寄って来る……そしてその子を俺の物に……でへへ）」

男三人も賛成である。そして一人はとても邪よこしまな事を考えているのであった。



「決まりですわね（もしも反対者が居たら、後でわたくしがお説教してあげましたのに）」

「おうおう、いい友人を持ったじゃねえか、若造」

祈も土永さんも賛成というか決定していた。

「はい、決定ね。そして二つ目も同じなんだけど、銀ちゃんも生徒会に入れようと思ってるのよね、どうかしら？」

皆の答えが分かっていたので決定事項にしていたエリカであった。

そして次に出た話題にみんなが肯定したのであった。反対する人も居ると思ったのだが、案外楽に生徒会に入る事ができた。

本人である瀬麗武もの方も「紫郎がいるなら」と納得してしてくれた。

「それで役職はどうしようか悩んだけど」

エリカが何かを言おうとしているのだが、その表情はとても邪悪な顔を浮かべているのであった。

「代役としているなごみんには辞めてもらって、紫郎をその代わり

に正式に入れようと思っただけど……ど・う・か・な〜？」

この場にいる全員が思った事、分かった事があった。エリカの言っている事が絶対にわざとだということだ。

この言葉を聞いてなごみが黙っているわけがなかった。

「……なんですかそれはあーっ！？ ならあたしは正式に入りますから、それでいいでしょう！（なんで急にそんな事になるっ！ センパイと居る時間が短くなるだろうがあっ！）」

もちろん、本人であるなごみは納得するはずもなく、猛講義するのであった。

「エリー、それ良いね。椰子さんって正規のメンバーが来るまでの代役だったんだし、これを気に櫻井くんを入れれば解決だね」

「いいんじゃないか！ 別にココナッツの代わりに紫郎が入ればこっちの方が僕的には良いね！」

いつも優しい良美もエリカの意見に賛同。きぬもココナッツと言って犬猿の仲なのでエリカの意見に賛同。約一人は本気で賛同しているに違いないが、もう一人はどういった心境なのかが分からない。だが、ちよつとした邪気を感じる。

「私的には優秀な者が居なくなるのは痛いと思うぞ。それに正式に入りたいと言っているのだから入れてやればいいだろ」

「俺も多い方が面白いから椰子は辞めなくて良いと思うぞ」

「俺も美少女が居なくなるのは嫌だ！」

乙女は辞める事には反対らしい、確かに……なごみはかなり優秀だったのだ。会計の仕事を今までミスをせずになしてきたのだから、かなりの逸材だ。それを辞めさせるといふのは生徒会的にも痛いのではないかと主張してくれた乙女である。

スバルも辞める理由なんて関係ないぜという事を言ってくれている。なんともカッコイイ事を言ってくれる。約一人馬鹿が居るが。

「俺もそう」「対馬くんも賛成派だよな?」「ちよつと!?」 佐藤さん  
何かあつ「賛成派だよな?」「はい……」

レオも乙女さん達と一緒に事を思っていたに違いないのだが、言おうとした瞬間に良美がレオの片腕に抱きついたのであつた。その行動に赤面しながらうろたえているレオであつたが、良美の行動があまりにもおかしいので聞こうとしたのだが、そこにエリカがもう片方の腕に抱きついて来たのであつた。エリカが抱きついた事でパニックになつてしまつたのであつた。そしてエリカに問われてあつけなく肯定してしまつたのであつた。

そして紫郎や瀬麗武はこの議題には参加できないとエリカに言われていたので見ているしかなかった。

祈先生は生徒会の顧問であるはずなのにこの意見には参加できなかったのであつた。でも参加してもあまり興味がなかったらしく無投票でいるつもりであつたのだ。

「は〜い！ では四対三で…なごみには辞めてもらいます〜！」

まるで見下したような表情をしてなごみを見るエリカである。

「……ふ、ふざけるなっ！ こんなふざけた事で辞めさせられて」  
落ち着けなごみ 「きゃうー、せ、センパイ、み、耳元は  
ちよつと、くすぐりたいですうー！ んっ、んー」

暴れかけそうであつたなごみを後ろから抱き着いて落ち着かせようとする紫郎。そして抱きつきながら小さい声でなごみの耳元で何かを言っている紫郎であつた。暴れそうになつていた状態から急におとなしくはじめて、そして耳元で紫郎が言っている事をくすぐつたそうに悶えながら聞いているなごみがいる。

「はあ、はあ……じゃなくて！ もついいですー！」

「あれれ、椰子さん何処行くのかな？」

なごみは凄いい勢いで部屋から出て行ってしまった。扉がバタンという大きい音がるほど勢い良くである。

「おいおい、あれはどう見てもやり過ぎだろっ」

呆れながらその場に立つ紫郎である。どうやらなごみを追いかけるつもりである。

「いいのよ、ちよつとやり返したかったの」

とても満面の笑みで言われても反応に困ってしまう紫郎であつた。

あれがちよつとなのかというのが疑問に思ってしまう。

・ ・ ・ ・

） ??? side ）

お姫様にも困ったものだ。

なんで急に辞めさせるって言い出すんだ。しかもあたしから正式に入るって言っているのに全くあたしの意見を聞いてないし、乙女先輩や伊達先輩の意見も聞く耳持たずにそのまま進めやがって、ムカつく。

そして対馬先輩はだらしなさ過ぎる。佐藤先輩とお姫様の色気に負けて、何を素直に従ってやがる。本当にだらしない。

それに比べてセンパイは……紫郎さんはとても頼り甲斐があつて、今もあたしを助けてくれるって言ってくれていますし、本当に好きになつて良かった。もしも今のアタシを見たら誰でも引いてしまうかもしれないね。

今、あたしは竜宮から少し離れた場所に居る。そしてある人を待っている。

「名演技だったぞ」

その人は私の思い人である、櫻井紫郎さんだ。

「いえ、あたしもあそこで頭に血が昇っていたので冷静な判断ができなかったので、本当にありがとうございます」

あたしは頭を撫でられている状態である。さっそくアタシを見つけてくれて近寄ってきてくれてすぐに撫でてくれる。全く嫌な気がしない、寧ろ気持ちが良いし、安心するのであたしはこの行為を拒否したことは一回もない。

「さてと、すぐに戻らないと怪しまれるから簡潔に言っぞ」

頭から手が離れた瞬間に何故だが、物凄い喪失感を感じてしまった。

本当にあたしは紫郎さんが居ないと駄目なんだな。こんなあたしを本当はどう思っているんだろう……稀まれに男っぽい言葉を言っしまつし、無口だし、愛想無いし、良い所なんてないんだけど……三年前にはアタシが好みって言ってくれていましたけど、今はどうなんだろう、聞いてみようかな……？

「おーい、なごみ聞いているか？」

考え事をしていたら何時の間にか目の前に紫郎さんの顔がある。急な事で頬や耳が熱くなる感覚がした。今のあたしは絶対赤面して

いるに違いない。

「聞いてるよな…?」

「すみません、聞き逃してしまいました」

紫郎さんが話しているのに考え事なんて駄目だ。

今は話に集中しなくちゃ!

「正直でよろしい、ではもう一回話すぞ」

その後、紫郎さんの話を聞いてあたしはつい自分がニヤけてしまっているの気付く事ができず、紫郎さんに言われるまでその状態であつたのが恥ずかしかった。

紫郎さんが考えて話してくれた作戦はあたしにとって嬉しい事でもあるし、お姫様に屈辱を与えられるという感情からニヤついてしまった。

〈 なごみ side out 〉

そして十分ぐらいして紫郎は生徒会室に戻ってきたのであった。だが、なごみの姿は何処にもなかった。

「あら、なごみは見つからなかったの？」

「……ああ、“帰ったのかもしれないな”」

帰ってきた紫郎に対して、とても残念そうな口調で言っている工リ力であったが表情の方は笑みを浮かべていたのであった。それ程なごみを負かしたのが嬉しいのか。

そしてこの時だ、乙女と瀬麗武が何かを言おうとしたのを紫郎が目で黙らせたのであった。簡単に言えばアイコンタクトだ。紫郎の視線に気付いた二人は言おうとした事を飲み込んで黙ったのであった。

「ちょっとやり過ぎちゃったかもしれない、私も探せば良かった。ごめんね櫻井くんだけに探させて……」

先程とは違ってかわって紫郎に向かって頭を下げ謝ってきた良美。先程のは何かあったに違いない。今とさつきでは全然態度が違うのであった。

「よっぴーいいんだよ、ココナッツは痛い目みた方がいいぜ！」

そして満足気であるきぬであった。犬猿の仲であったから清々しているようでもあった。



「…まあ、なごみんの事は紫郎が代行で宜しくね！ それともう一つ役職を用意しているのよ！」

多少は罪悪感があったのか、苦い顔を一瞬だけ浮かべたように見えたエリカ。そしてすぐに何時もの表情に戻して話を始めた。

「乙女センプイが生徒会副会長と風紀委員長を兼任しているから乙女センプイの負担を和らげる為に紫郎に副会長になってほしいのよ？」

エリカの言ったことに対して紫郎以外の全員が驚いたのであった。

「霧夜、私は別に大丈夫だぞ」

「いや、乙女センプイは今年はまだ受験で忙しくなるだろうし、少しでも負担を減らそうと思ひまして、風紀委員長も銀ちゃんという人物が居るので大丈夫ですよ」

そしてエリカの次の発言にも驚いてしまった。今度は紫郎も含めて全員が驚いてしまった。

「あら、別にそんなに驚く事ではないでしょう？ 紫郎が言っている事は私にも本当だとなんとなく分かったから、だから戦闘力的には問題ないでしょ？」

なるほど、と頷く面々。先程瀬麗武の戦闘力の話でエリカは瀬麗武を風紀委員に入れようと考えていたのであった。いや、朝の決闘の時から粗方決めていたのかもしれない。

「……私が、か……」

何やら思い悩んでいる瀬麗武である。でも視線が乙女の方を向いていた。そして乙女の側に置いてある日本刀である“地獄蝶々”を見ている。

そして瀬麗武の視線が乙女の刀を見ている事が分かった紫郎は何を考えているのかが何か分かっていたのであった。これは瀬麗武自信の問題である。

「それもそうだな。エリカの言うとおり乙女姉さんの負担が楽になるなら、俺は副会長をやるよ。だから瀬麗武もやってみなよ」

何気無く瀬麗武を背中から押している紫郎であった。

あまり人との交流がない瀬麗武の事を心配してなのか、それとも何か企んでいるのか。

「お姉ちゃんを心配してくれているのか？」

何故だか、紫郎が言った事に物凄い反応している乙女。弟のように昔から慕っているとはいえ異常な様にも思えてくる。

「そりゃー、心配だよ」

乙女の問いに平然と応える紫郎であった。

「……っ…分かった。副会長は紫郎に任せる！　だが、風紀委員長は私が見定めて、私が決める！」

紫郎の言葉を聞いて目元を押さえて感動したような行動を取って

いる乙女であった。そして副会長を譲ったのであった。

「ならそれでいきましょう」

あっさり納得したエリカ。他の面々も頷いて納得した。というか、乙女さんに逆らえない、逆らったら制裁を喰らうからであった。

「じゃあそれまで銀ちゃんは紫郎の仕事の手伝いをしてね、つまり補佐ね」

これで紫郎と瀨麗武の役職は決まったのであった。決まったといってもまだ瀨麗武は風紀委員長の座にはつかないのであった。乙女直々に瀨麗武の事をよく見て決めるという結論が出たので、乙女が自分の意志で指名して委員長の座を譲るという事になったのだ。

「エリカ、質問していいか？」

新生徒会副会長がいきなり質問したのであった。それに「どうぞと応えるエリカ。

「俺の仕事内容と権限はどのぐらいあるんだ？」

「そうねえー……仕事内容は私の仕事の手伝いかな。でも私やよっぴーがいるからあまりないと思うわ。それが、私もよっぴーも不在の時の代理の生徒会長にもなるわ。後は他の生徒会メンバーの手伝いとかでいいわよ。とはいっても乙女センパイぐらいしか手伝う相手はいないと思うけど、だから会計の仕事をやって頂戴ね。権限は……まあ、紫郎の事だから正しい事をしてくれると思うから、なんでもしていいわよ、私の許可を取らなくてもいいわ」

副会長はそんなに難しい仕事ではないと分かった。エリカや良美が優秀であるからあまり仕事が回ってこないのだ。

「言ったな」

待つてました、と言わんばかりの表情でエリカの方を向いて不敵に笑う紫郎であった。

この行動には全員が訳が分からなくなっていた。エリカは何か悪い事でも言ったのか？

「ちゃんと録音したか？」

「もちろんです“センパイ”」

扉が開いたと思って扉の方を見て驚いている面々も居れば、気付いている者もいたという状況になっている。

扉から入ってきたのはなごみであった。

「なっ！？　なんでなごみがいるのよーっ！！」

「げっ！　ココナッツでめえーまだ居やがったのかっ！」

先程までとても満足そうな笑みを浮かべていた二人が物凄い反応して苦い顔をしている。

「私は結構前から気付いていたぞ。椰子はさっきから扉の向こう側で息を殺していて隠れていたぞ……というか紫郎！　あんな目で睨むな！　嫌われたのかと思って泣きそうになってしまった」

「隠れていたのは私も気付いていたが、ただならぬ殺気が漏れていたので全員気付いてるものと思ったが…？」

さすがは武を極めた者達である。普通の人気付かないものに気付くという鋭さ。

「では、椰子なごみを正式に生徒会メンバーに加えて会計係にする」

紫郎は策が成功した事に満足な表情を浮かべていた。

「ちよつとツ！ そんなの私が認め「いいんですかお姫様？」…ツ  
…何がよ「このレコーダーにさっきの事が全部入っているのですが  
…もちろん、貴女が言ったことも」なあッ！？」

今度は立場がまるで変わってしまった。邪悪な笑みを浮かべて上から小物でも見るようななごみに対して、何か打開策がないかと考え込むエリカであった。

＼ エリカ side ｝

まさか紫郎も手を組んで私を嵌めるとはね……

乙女センパイや銀ちゃんが言っていたのが正しければ扉に隠れていたのよね、もっと気を配るべきだったわ、それに殺気も出ていた

という事はもつと気付き易かったじゃない、私だって武道を少しはやっているのだから。

本当…なごみんを少し弄って遊ぶ筈だったのに私が嵌められちゃったわ……

もつと自分が警戒し解くべきだった。あやしい場面は確かに一杯あったわ。

まずはなごみんが出て行く前に紫郎がなごみんを落ち着かせていた時に何かを小さい声で言っていたのが始まりだったのかも……それから紫郎が「帰ったのかもしれないな」って言った時もなごみんの鞆がこの場にあるのに帰るなんて事はないだろうと思っとくべきだったわ。

なごみんの泣きそうな表情を見てだいぶ浮かれていたわ……不覚だわ。

「今日はこれで終わりしようか」

私が色々と内心で整理していたら勝手に会議を終わらしてしまう紫郎。

ちょっと、何を勝手に終わらせてるのよッ！

「…エリカ、なごみの性格に苛立っているのは分かるがこんな幼稚な事をする必要はなかったらろう」

私の近くに寄って耳元で私にしか聞こえないように言ってくれている紫郎。周り人には聞こえないように気を使ってくれているみ

ただわ。

そんな事は分かっているわ……というか、アンタがデレデレしているのが悪いのよ！

「お前には大きな野望があるんだからそんな事は気にせず生きればいいんだよ、まあー、俺がムカついた場合は相手を徹底的に言葉攻めして精神的に立ち直らせないようにするけどな」

そっちの方が最悪じゃない。

うふふ、でも……そうね、あんなちっぽけな存在なんて気にせずには私は私の道を行かせて貰うわ。

貴方も手伝ってくれるのよね、紫郎。

でもその後、生徒会室から出て行く紫郎に付いて行くなごみが瞬間だけ私の方を見て見下した表情を浮かべてきた。

ふふふ、私は怒らないわよ、怒らないわよ。

「出し抜くつもりが出し抜かれてちゃったね」

よっぴー、それを今言っただけじゃなかったわ。

こっぴごうならよっぴーでこの気持ちを解消してやる〜

） エリカ side out ）

く きぬ side く

ちっ！ ココナッツめえー、紫郎を味方に付けて調子に乗りやが  
ってーッ

僕の方が紫郎と過ごしている時間が長いんだぞッ！

それを横から抜け抜けと入り込んできやがってー

いつか絶対に仕返してやるぜ！

まずはココナッツの近くから紫郎を引き剥がさなきゃな……どう  
すりゃいいんだ。

「おい、お前バイトだろ、いいのかよ」

ああー、うるさいなー！ なんだよ一体、今はそれどころじゃな  
いんだよー！

「ぐはぁッー！」

やべえーついつい蹴っちまったぜえー

「おいおい、やり過ぎだぞ、みぞおち鳩尾に綺麗には直撃したぞー！」



いいんだよ、レオだから。

僕が考え事している時に話し掛けて来るのが悪いんだよ。

「それより、もう解散したからお前も早くバイト行けよ、俺は部活  
見てくるぞ」

あいあい、分かったよスバル。

それから僕は悶々（もんもん）と考えていたらバイトに遅れて店  
長に怒られちゃった。

これも全部ココナッツのせいだ！

ぜってえー、明日ぎゃふんと言わせてやるぜーッ！

く きぬ side out く

## 第十一話 竜宮（後書き）

なんというか……手が止まってしまっていた。

エリカのイメージが何か違うような…？

もしも違和感があった人は遠慮なく言って下さい。

なんか無茶苦茶な展開になってしまったぜよ。

〈 第十一話で疑問に思う事 〉

今回から始めたいと思います！

クロスオーバーになって色々と混ぜてしまっているので分からない事があると思うので、今回は自分が疑問に思った事を取り上げてみました。読んで下さった方でも感想で分からない事や疑問に思った事にお答えします！（その分からない事や疑問につきましては次回の十二話の時の後書きでお答えしたいと思います！）

> のは疑問の答えです。

〈 作者：メルクリウス 〉

乙女さんはレオの家に住んでいるのか？

乙女：「いや住んでいないが？ 何かおかしいか？」

>乙女さんは原作通りではなくレオの家には住んでいません。

なごみんはレオとはどういった関係ですか？

なごみ：「知らん、眼中にない」

>レオとはまったくの無縁である。

なごみんはどうやって生徒会に入ったんですか？

なごみ：「お姫様に紫郎さんの事有话があると云われて行つたら強制的に入らされた」

>なごみんはエリカの手によって生徒会に入ったのであつた。

次回から感想に書かれた疑問にお答えいたします！

） 強さランク ）

今回は何も変わっていません。

紫郎                    家族組（恋姫メンバーの武官組）                    百代    平  
蔵 〓 幾蔵 〓 鉄心                    由紀江 〓 揚羽 〓 乙女 〓 板垣辰子 〓 南斗星  
〓 マルギツテ・エーベルバツハ    瀬麗武 〓 釈迦堂刑部                    フラン  
ク（メフィストフェレス状態） 〓 あずみ 〓 ルー師範代 〓 大佐  
板垣亜巴 〓 梅子    クリス 〓 小雪                    京                    心 〓 一子                    エリカ 〓 板  
垣天使 〓 板垣竜平 〓 武蔵小杉 〓 巨人                    上杉レン 〓 小十郎 〓 準  
スバル 〓 キャップ 〓 忠勝    英雄    岳人 〓 レオ                    冬馬 〓 大和  
モロ。

第十二話 帰り道、我が家、一子の思い（前書き）

誤字脱字があつた場合は報告を御願ひします。

『新たなる人生』の恋姫でまだ出ていないキャラが出てきます。

## 第十二話 帰り道、我が家、一子の思い

あの後は生徒会室のムードがやや悪くなってしまったので紫郎が強制的に解散させてしまったのだ。

紫郎はエリカが落ち込んでいるように見えたので二言ぐらい話してから生徒会室を後にしたのだ。

その時、紫郎の後をなごみと瀬麗武が付いて来ていた。もちろん、一緒に帰るためである。他のメンバーもやる事があるので生徒会室を後にしていたのだ。乙女、スバルとは途中まで一緒だったのだが、部活があるので別れたらしい。レオはきぬに構っているので一緒に帰っていなかった。新一はいつの間にか消えていた。

余談であるが乙女と別れる際に「今夜電話する」と二回も言われたのだ。二回も言ったからには重要な事だろうと思っていた紫郎であった。

それと帰り際に良美がちゃんとなごみに謝ってきた。なごみもそれ程気にしていなかったので許してくれたのであった。なごみ的にも紫郎が積極的に協力してくれたのが嬉しかったので、エリカの事なんてまったく眼中にしていなかった。良美のことも全然気にしていなかったのだ。

そして一緒に紫郎と帰っているのはなごみと瀬麗武だけであった。学園の外に出るからはなごみは人目も考えずに紫郎の腕に抱きついて、まるで恋人のようにしているの接している。そしてもう一人の

瀬麗武も多少恥ずかしいのか、頬を赤く染めてなごみとは反対側から抱きついているのであった。この二人には恥ずかしいという気持ちがないのかと思つてゐる紫郎とは裏腹になごみも瀬麗武も自分の方に振り向いて欲しい為にこういう積極的な行為をしているのであった。

この状態で仲見世通りに入ってしまったのだが、周りの通行人の目がとても怖かつたのであった。特に男性である。さすがに右左両方から美少女に抱き付かれてゐる奴に怒り心頭しているようだ。男なら誰もが羨むことをしているのだからそれはムカつくのはしょうがない。

そのまま仲見世通りを歩きながら進んでいくと昔から良く知つてゐる面々が話し掛けて来てくれて紫郎が帰つて来たが商店街中に広まつたのだ。小さい子、老人、主婦の人、店先の人、と色んな人が紫郎に話し掛けてきて紫郎がどれだけ慕われているのかが分かる。瀬麗武も「慕われているんだな」と思ひながら、紫郎が懐かしそうな表情を浮かべてゐる横顔を見ながらその表情に見惚れてゐた。

なごみもその横顔を見て、本当に帰つてきてくれたんだと、内心が嬉しいという感情で一杯だった。そして会つた人達と同じ事を何度も聞かていた「彼女さん？」と紫郎に聞いてくる人達に隣にゐるなごみと瀬麗武は顔が真っ赤かになつてしまつてゐるのであった。そんな二人にお構いなしに問いに対して紫郎は「はい」と応えると頭から湯気が出るぐらい恥ずかしがつてゐたのだ。

そして目的地に着いたのであった。

店の前で注文を伺つてゐた子がこちらに気付いて近付いてきたの

であった。

「ああ、遅いわよ！ あっ！ 椰子っちも銀ちゃんも来たんだ」

「悪いな、姫に呼ばれて竜宮に呼ばれたのもあるが生徒会に正式に入ってしまったな」

申し訳なさそうに謝っている紫郎に対して、その子は別に気にしていないかつたらしく、それよりか、ちゃんと約束を守って店に来てくれた事が嬉しかったので上機嫌な表情で受け応えをしてきている。

「エリちゃんに捕まっちゃたのね、それならしょうがないよ。別に謝らなくても全然気にしていないからね、それより食べるんでしょ？」

「当たり前だろ、その為に来たんだからな、千花」

店先にある椅子に座って両隣には勿論なごみと瀬麗武も座ったのであった。

千花と呼ばれた少女は昼休みに約束をした小笠原千花である。

「三人共、家の名物の久寿餅でいいよね？」

千花はペンを取り出して注文を取ってくれている。昼休みに物凄い熱弁してくれた名物の久寿餅を食べに来たので注文した。

「勿論！」



「いいですよ」

「頼む」

三人共、千花の言ったとおり久寿餅を頼んだのであった。注文を取り終わって店の奥に消えていった。

それからは色々と世間話をしながら久寿餅が来るのを待っていたのであった。

タツ姉……あれって紫郎じゃねー？

えっ！？ どこどこ、あつ本当だ！ あんなピカピカで長い髪の子って絶対に紫郎君だあー

誰かがこちらに向かってくる気配がしたので紫郎は振り返って見たところ……久し振りに懐かしい人達が居たのであった。

「紫郎君ー！ 帰ってきてるなら私達に会いに来てよー！！」

「タツ姉の言う通りだぜ！ 言いに来いよな！」

頬を膨らましながらぶーぶー、と言いながら可愛らしく怒っている女の子と明るく人懐っこい喋り方で紫郎に話してくる女の子、この二人とは三年前に川神市に戻って来た時に以来まったく会っていなかった。

「ごめんな時間が無くてよ。でもこれからは川神市に滞在するから何時でも会えるよ。それにしても……辰子たっこは髪が伸びて魅力が増しますます良い女性になっているね。天使てんしもまた可愛くなっちゃって」

恥ずかしげも無く紫郎の後ろから抱きついてきたのは板垣辰子という女の人だ。

「本当だね！？　これから何処にも行っちゃダメだよー！　もしもどこか行くなら私に言ってからねー。それより私って紫郎君好みの女性になったかな？　（わあー、紫郎君の感触だ、それに紫郎君の臭いだ〜）」

板垣辰子いたがき たつこという人物は板垣一家の次女である。常にポツィとしており、暇を見つけると寝ているという女の子だ。紫郎とは同じ年であるが辰子は学校には通ってはいないのであった。その理由は生活を支える為にアルバイトしているからであった。姉で板垣亜巳いたがき あみという人物も一家の為にお金を稼いでいる存在である。

辰子と紫郎が出会ったきっかけは紫郎が多馬川沿いで暇潰しにスケッチをしていたら気持ち良さそうに寝ている辰子が居たのが出会ったきっかけである。とても気持ち良さそうに寝ている辰子を起こさない様に近づいていき、寝ている辰子の近くで風景画を描いたのがあったが紫郎の気配に気付いた辰子がゆっくり起きて目を擦りながら紫郎の事を見始めた辰子に「おはよう」って口で言いながら手は絵を描くのの止めていないという状況になったのであった。そして絵を描くのの止めて辰子の方を向いてみると、何故だか、惚けた顔で顔を真っ赤にしながら紫郎の事を凝視していたのであった。それから惚けた状態である辰子と話を始めたのであったが、すぐに素の辰子に戻ってくれたおかげで話しが出来たのである。それから辰子とは多馬川沿いで会ったりして話をしたり、寝たり、とても気持ちが良い日々を送ったのであったが、それから三年間は海外へ行ったたりして紫郎は暇がなかったので会う機会がなかったのであった。

「べ、別に可愛いって言われても嬉しくないやい！ それからタツ姉と一緒に何処か行くなら、絶対に、絶対にー、ウチらに言っただら行けよ！」

辰子みたいに抱きついたりしていないものの可愛いと言われて嬉しそうに笑みを浮かべているので、嬉しがっているだという事が丸分かりであった。

いたがきんじえる  
板垣天使とは辰子を通じて出会ったのだ。自分の姉が毎日嬉しそうに帰って来ては楽しそうにご飯を作っているし、ご飯の量もサービスで多くしてくれるという事があった為に天使は一体何があったのか？ ということで色々辰子の事を監視という名のストーカーのように付けてみて探った結果……男が居る事がわかった。その事を知って天使はどういう奴なのか、気になって興味本位で話してみたら、意外にも良い奴だったらしく、それから辰子と一緒にその男と話したりしていたのであった。そしてその男とは櫻井紫郎である。

ちなみに天使の事をエンジェルというと怒られてゴルフクラブで殴られるので言わないように。

「二人も食べてくか、奢るぞ？」

その言葉を聞いた瞬間に二人共嬉しそうに頷いて紫郎たちとは反対側で空いている席に座ったのであった。今の席順は、なごみ、紫郎、瀬麗武、机を挟んで真正面に、天使、辰子、といった状態である。というか、周りが女の子しかないという嬉しい状況である。フカヒレや岳人が居たら絶対に羨ましがっていただろう。

「センパイ……この二人とはどういった関係ですか？」

「私も椰子と同じでお前に聞こう、どういった関係だ？」

なごみは紫郎の服をちよっぴり掴んで聞いてきて、瀬麗武は睨みながら服に掴み掛かろうとしたが紫郎の手によって止められたのであった。なごみはまだ良いけど瀬麗武は背中の曼珠沙華に手が触れている。

「うーん、どう応えればいいか……まあー友達タチと思ってくれ。三年間会っていなかったからな」

その言葉を聞いてホツとする二人に対して紫郎はある事を口に出した。

「別にお前らがそんなムツとする理由じゃなかっただろ……まあ、ヤキモチっていうのも可愛いけどな」

紫郎は二人の頭を撫でながら言った。

「センパイが好きだからこんなに妬いちゃうんですよ！」

「…私は別にヤキモチなど妬いていないぞ！」

一人は思いつきりデレており、もう一人は思いつきり否定するという面白い展開になっているのだ。でも二人共一緒の事は紫郎に撫でられているのを拒んでいないという事と赤面しているという事だ。

「紫郎君、ヒドイよー！、友達じゃなくて恋人だよー！」

「そうだぜ！ 一緒にメシ食ったり馬鹿みたいに遊んだじゃねえかよ！ ってタツ姉何言ってるのー!?」

紫郎の友達発言に辰子も天使も反応していた。辰子の狐目きつめが一瞬だけ開いて瞳の奥にある黄緑色の眼が紫郎の隣にいる二人を捕らえていたのだ。天使も馴れ馴れしく紫郎に撫でられている二人にめっちゃくちや睨みつけている。

片方の席は和みムードであるのにもう片方の席はいつでも戦えま  
す、という雰囲気が漂っているのであった。

「なに、なによこれは……空気ヤバくない？ というか女の子が増  
えてるしー!」

この雰囲気を壊してくれたのは先程とは服が違い店のはつぴを着  
て、お盆に久寿餅を乗せて来てくれた千花であった。

「悪いな、千花が店の奥に行った後に知り合いと会ってな、それで  
今こうなってしまうているのだよ」

「いやいや、そこは別に威張らなくていいわよ。事情は分かったわ。  
じゃあ、久寿餅をどうぞ!」

注文した久寿餅を三人分持ってきてくれた千花。

「サンキュー、それともう二つお願いできるか?」

「毎度!」

そう言って注文を頼みに店の奥に行った千花であった。

・  
・  
・  
・

それからは全員分が来るまで待つて全員分のが揃ってから食べ始めたのであった。一口食べて全員が思った“美味しい”と……なんでこんなに美味しい物がもつと注目を浴びないのかと不思議なぐらいであった。その言葉を聞いて千花はとても嬉しがっていた。千花が絶賛するだけの事はあると紫郎は語る。

そして定番のなごみからの「あくん」されながら普通に食べている紫郎がいたのであった。瀬麗武もこれを気に紫郎に「あくん」という行為をやってみたのだが、ちゃんと食べてもらった所までは良かったのだが……この後に問題が起きてしまった。食べさせて紫郎の口の中に入ったスプーンを見つけて顔を真っ赤にしていたのであった。辰子も食べさせてあげたり、食べさせて貰ったりとテレ全開であった。なごみと辰子は紫郎が見ていない時に睨み合いあっていたのだ。

二人の背後に狼と虎が具現したように見えたような気がしたと千花は言っていた。なごみが狼で辰子が虎である。

そして二人を気にせず天使は一心不乱いっしんらんに久寿餅を食べていたのであった。それからは談笑しながら一人三回は久寿餅を注文したほど食べたのであった。天使だけは五回も食べたのだ。紫郎の奢りだということもあってたくさん食べたと天使は言っているが、奢りじゃ

なくてもそれぐらい食べていそうだ。それからは休憩になった千花も混ざって雑談をしたのであった。

話に夢中になっていたら日もかなり沈んできてしまっていたので帰ることにしたのであった。ちゃっかり天使が持ち帰り用に何個か買っていたのであった。紫郎も紫郎でその事に関しては全く触れなかった。辰子や天使の他にも後二人いる事を知っているからであった。

「そういえば亜巴あまさんや竜兵りゅうべいは元気か？」

隣を歩いている辰子と天使に聞いてみた紫郎であった。なごみや瀬麗武は珍しい事に紫郎の後ろで何やらヒソヒソと話している。と、いつか何時の間にか二人共仲良くなっていたのであった。

「アミ姉もリュウもバリバリ元気だぜー！」

「うん、天ちゃんの言うとおりだよー」

二人共はつきり言ってくれて表情からでも二人は元気であると伺えるほどであった。

「……………そういえばウチら何か忘れてるような……………ってー!？」

「……………そういえばそうかも……………あっ!？」

二人共何かを忘れていたらしくその事を今思い出したみたいだ。

「……………夕食の買出しだ!……………」

なるほどな、と一人納得する紫郎であった。辰子は何時ものほほんとしているけど家事全般を担当しているのだ。それも姉である亜巳から押し付けられたようであった。紫郎が板垣家に来た時も一緒にご飯を作ったりしてその腕前は結構なものであった。

「それはヤバイな、早く帰らないと亜巳さんに“お仕置き”されるぞ」

板垣家は家族が全員揃ってご飯を食べるというルールがあったので全員揃うまでは何時間でも待つ一家だった。

「ヤバイヤバイ、アミ姉の“オシオキ”は超やべえーよッ！」

「……………ぐう……………」

天使は焦りすぎて電柱に話かけて挙動不審になっているし、辰子は立ったまま寝ており現実逃避状態になっている。

「タツ姉ー！ 起きろー起きるんだー！ というわけで紫郎またなー！」

「…もうー天ちゃん叩かないでよ、ごめんね紫郎君、今度あったらもっとお話しようねー！ じゃあね」

二人共そう言うってから走って去って行ったのであった。その後ろ姿を見ながら手を振っていた紫郎であった。

「あわただ慌しい二人でしたね」



「そうだな」

紫郎の隣に二人がいつの間にか移動していたのであった。

「じゃあ俺達も帰りますか！」

その言葉を聞いて二人共頷いて、まずはなごみを家まで送ろうとするのであった。

しばらく楽しく話しながら歩いていたらなごみの家である花屋が見えてきた。店先にはなごみの実の母親であるのだが、とても若い過ぎるので二人が並ぶと母親というより姉妹に思えてしまう程の容姿をしている人が椰子のどかさんだ。のどかさんもこちらの存在に気付いたらしく手を振りながら出迎えてくれた。なごみの隣にいる紫郎の事にも気付いたらしく、とても驚いた表情をしていたのでペタペタと紫郎の体や顔を触れながら成長した事を確かめていたのであった。

「あらあら、昔もハンサムの中間だったのに見ない間に磨きが掛かったわね」

「か、母さんッ!? なんでそこで抱きつくの!」

目の前にいるのが紫郎である事を入念に確かめてから前から抱きついたので。左右に居た瀬麗武もなごみも驚いていた。

「少しこのままにさせてくれない……おかえりなさい」

「うん、ただいま!」

二人共腰に手を回して抱き合っていた。瀬麗武もなごみもこの雰  
囲気にはツツコミを入れられなかった。でも二人は一緒の事を思っ  
た『まるで恋人同士じゃないか!』と。

のどかさんは満足気な表情を浮かべて離れた。でものどかさんが  
離れた時に瞳から涙が流れていたのは誰も知らない。

それから店先で軽く話をして別れたのであった。なごみものど  
かさんも紫郎達が見えなくなるまで手を振ってくれていた。その後  
にはのどかさんがなごみに色々と“お話”を聞いたのであった。話  
の大半は紫郎の事であった。

それから二人で無駄話をしながら家に帰ったのだ。「瀬麗武か  
ら見て学園生活は楽しく過ごせそうか?」とか「友達もつと増やせ  
そうか?」と色々瀬麗武の事を心配している紫郎に対して「問題  
ない」と一言で終わらした。クリスマスやなごみとは会って間もないの  
だが結構親しくなった仲でなっていた。特にクリスマスとは転入生同士  
ということ友達関係になっっていた

瀬麗武の心配もしつつ紫郎は久し振りの我が家に帰るので楽しみ  
であった。瀬麗武もこれから住まわせてもらう家がどういふのな  
か、と気になっているものの紫郎と一緒に住むという事で頭が一杯  
だったのだ。

そして家について思ったことが瀬麗武にはあった。

家が大きいという事だ!

つまり豪邸だ。

庭も結構な広さがあり、道場みたいのもあって外だけでも豪邸っ  
て感じがするのであった。

「ただいま！」

『おかえりなさい』

玄関を開けてすぐに大勢の人達が出迎えてくれたのであった。

家族もいれば、居候の人もいれば、使用人の人もいれば、動物達  
もいるのであった。

「紫郎！」

「紫郎お兄ちゃんなのだ！」

赤い髪にアホ毛がある女の子と桃色の髪に頭に虎の髪飾りをして  
いる少女が抱きついてきたの。それを受け止めて二人を抱きかかえ  
た紫郎。二人共嬉しいそうに紫郎の体の感触を確かめていた。

「こらっー！ 恋に鈴々（りんりん）、紫郎は疲れておるのだぞ」

「いやいいですよ桔梗、皆本当に久し振りですね！」

抱きついている二人の頭を撫でながら他の人達にも言ったのであ  
った。

桔梗という人物も紫郎の家族である。とても魅力的なお姉さん系

の女性であり服から巨乳である胸が零れ落ちそうになっているというインパクト大な存在だ。

お兄ちゃん、おかえりなさいー！

パパ、おかえりなさい！

兄様、おかえりなさいませ！

シーくん、おかえりなさい！

おかえりなさいませ、我が主！

家族である子供達も何時の間にか成長した子供も仕えてくれる使用人の人達も紫郎が帰ってきて本当に嬉しそうにしている。家に帰ってきてすぐに出掛けてしまふ事が多い為に仕事とかが休みの時は家族と一緒に遊んだりしている紫郎であった。

十人弱ぐらいの子供達、使用人達も十人いるのであるが、この子供達とは血は繋がっていない。戦争やら親に捨てられた子供達を引き取った孤児だった子供達だ。他にも色々な事情があつて預かつていたりしているのであつた。

「紫郎さんも疲れた事でしょう、一度部屋に戻ってからリビングに来てくださいね」

「ボクも手伝うよ！」

「私も手伝います」

「月はいいよ、ボクがやるから」

「サンキューな、紫苑、季衣、月、詠」

この家の全ての権利を任されている女性であり桔梗と同じでインパクトがある巨乳である。穏やかなそうな女性であるが、しれつとエロい事を言う時もある。

紫苑と季衣は子供達や使用人の人達を連れて夕飯の支度をしに行つたのであつた。

「恋も鈴々一時離れてくれないかな？」

そう言つと二人とも素直に離れてくれた。でもまだ抱きついていたかつたみたいであつたが愛紗や祭に止められていた。

「じゃあ、俺は一度部屋に行つてからリビングに行くから」

そう言つてから紫郎は自分の部屋に向かつて行つたのであつた。

「楽しそうでいいな」

さつきまで家に居る人の多さで呆氣にとられていた瀬麗武が復活して紫郎の後を付いて来ている。瀬麗武が一目見て思った事を口にした。

「何言つてんだよ、瀬麗武もこれからココで暮らすんだからな」

瀬麗武の生活環境を考えていたらこの家庭はありえないんだろうな、と思つている紫郎はこれから楽しくさせてあげようと内心で決心したのであつた。

紫郎は部屋に戻って制服からラフな服に着替えて瀬麗武とクリスの部屋に向かった。

紫郎が着替えてくる前に瀬麗武の部屋に案内したのだがクリスと同室になっていたのだ。同室になっていた理由は二人が同じ部屋になりたいと言ったから同室になったのであった。これからの学園生活でも私生活でも、もっと仲良くなりたいというクリスの意志に圧倒されて瀬麗武も了承したのであった。瀬麗武も何だかんだで仲良くしたいという気持ちがあったに違いない。部屋の広さも同室になったからといって全然窮屈ではなかったのだ、むしろその逆で広すぎる程であった。

クリスと瀬麗武の荷物整理を手伝いながら時間を確認していた紫郎。

ついさつき鉄心から電話があり「百代が家を出たぞ」と伝えてきたのでそろそろ着くんじゃないと気にしていたのだ。電話中に一子と電話を変わって「お姉様をヨロシクね！」って言っていたので「任された！」と返事をしたのであった。その後は一子も泊まりたかったって、多少愚痴られた。それから百代が来るまで一子と色々話し込んだのだ。決闘での反省点や自分に何が足りないのか、これからの修行内容の話もして、結構な時間帯電話してしまい長電話をしてしまったのだ。でも一子とは学園ではあまり話せなかったから電話を通して話ができ良かったと思っっている紫郎。それは向こうも同じだったらしく色々話したい事があったので話が出来て

良かったと思っていたのだ。一子も決闘で負けた事がショックだったらしく「もつと強くなりたい」という意志を紫郎に聞いてもらって欲しかったらしく、永遠にその事について話をする一子に対して、ちゃんと紫郎も話を聞いたのであった。百代が来るまで永遠に話を続ける一子であった。

そして余談だが、鉄心の前に乙女からも電話があったのだ。内容は同棲する事についてだ。受話器の向こうからでも「怒っています」というのが伝わってくる程のドスを秘めていた声であったと紫郎は語る。「お姉ちゃんはそんなの許可していません！」とか「お姉ちゃんも住むぞ！」と言っており、同棲に反対しているのか、自分も同棲したいのか、分からない状況になってしまった。どうにか誤魔化そうとするのもそれも利かなかつたので、最終兵器を使う事にした。「デートしよう」と言ったら一分ぐらい返事が返ってこなかった。ので寝落ちしたのか、と思って電話を切ろうかと思ったら受話器越しでも微かに聞こえてくるぐらいの音が聞こえたので切るのを辞めて、話し掛けてみたところ、やっと返事が返ってきた。乙女はどうにか納得してくれて同棲問題については解決した。

でも日時を決めたりして、まだ怒っているんじゃないかと紫郎は思っていたのでなるべき逆らわない様にしていただけだったがとつくに乙女さんは超機嫌が良くなっていたのであった。

• • • •

く 一子 side く

ああ、電話終わっちゃった。

「何やら熱心に語っておったが、気は済んだのかね？」

「あ、じーちゃん」

アタシが残念そうにしていたらこの川神院のトップである、アタシのじーちゃんが気配を殺して後ろに立っていた。

やっぱりじーちゃんは凄いなー！

「声が廊下の奥まで聞こえておったぞ」

あれっ？ アタシってそんなに大きな声で話してたんだあ！

「あやつと鍛錬するのじゃな？」

じーちゃん……アタシと紫郎と電話の会話聞いていたみたいだ。

じーちゃんが言っている“あやつ”って人は紫郎のことだよ。

・ ・ ・



アタシが紫郎に話した事は今朝にあった決闘のことよ。

アタシも重りを付けていて調子にのっけていて負けたのは分かっているわ……でも負けた事がアタシは悔しかった。そしてさっきの電話で紫郎は正直に言ってくれたわ……クリもせつちゃん（瀬麗武）も本気を出していなかったって事を……その事については薄々気付いていたわ。だってクリはアタシの『山崩し』に対して避けるんじゃないわ。だって雑刀の上に乗るといふあり得ないことをしていたもん。せつちゃんだって最後に見せてくれた瞬動が圧倒的にアタシの使っている瞬動と速さが違ったもん。

他にも紫郎は正直に言ってくれた。

重りを外していても一子では勝てないってね、それを聞いて本当に悔しかったし、泣きたくもなかったわ。でも受話器の向こう側に居るのに紫郎にはアタシの今の状態が分かっているかのように話し掛けて来てくれたわ。

「泣くのは百代に勝ってからにしろ」

アタシはその一言で目標にしている、アタシのお姉様の事を思い浮かべた。

何事にも恐れずに向かって行き、壁という壁は自分の拳で粉碎して、その脚で進み続けた結果、今は天下無双とまで呼ばれている存在の事を。

でもそんなお姉様でも苦手なものもあるのよ。

魑魅魍魎すぢめいりょうりょうの類は苦手中の苦手らしい。何でも物理的に殴れないから無理だつて言っていた。お姉様らしいっちゃらしい。

でもそんなお姉様が誇りでもあり、目標でもある。そんなお姉様をアタシは抜いてみせると思っていたけど、現実は違かった……いくら修行、鍛錬をしようがお姉様に追いつける気がしなかった。紫郎の“櫻井流”だつて覚えたのに……でもアタシにはそれしかなかったのよ！

でもこんなアタシにまだ希望をくれるの紫郎……？

「力なら俺があげよう……特訓という名の試練があるがお前は確実に強くなれる……さあ、一子どうする？」

何だか、怖いな紫郎……

受話器越しでも鳥肌が立つちゃった。

でも紫郎が言う事なら信じられる。何時だつて紫郎が言ったことは正しかったし、間違つた事もなかった。

だからアタシはちゃんと言ったわ！

「宜しく願います」

今の自分の顔が見えないけど、これだけは断言できるわ……絶対  
に笑みを浮かべて喜んでいるってことがね。

紫郎もアタシがそう言うてくるって事が予想していたみたいだつ

たわ。士郎の他に愛紗ちゃんや凧ちゃんや櫻井家の人達も協力してくれるって言うていたのでますます嬉しくなってしまったわ。

紫郎の家族って大抵の人が強いんだもん。

だからそんな人達に鍛えてもらえるなんて最高だわー！

それから決闘の時の反省点や今後の修行についての話をしたのよ。

決闘はアタシが重りを付けていた時点で悪かったわ。修行については今まで通りにしていて良いらしいけど、朝と夜に紫郎の家で直々に鍛えてくれるみたいになつたわ。だからもう明日の早朝から紫郎の家でやってくれるのよ。

それからもお姉様が紫郎の家に着くまでずっと話していたわ。鍛錬の事以外も色々と話したわ、例えば外国で色んな武人達と戦ったりとか戦争に介入したとかミサイルを投げ返したとか、アタシがびつくりする事ばかりだったわ。

紫郎も紫郎でお姉様と同じぐらい、それ以上な程ありえない存在だって改めて認識できたわ。

• • • •

もうちょっと紫郎と話をしていたかったけどまた明日も話せるからいいや、って思いながらじーちゃんに返事をした

「うん！」

じーちゃんの問いにアタシは自分でも分からないくらい嬉しそうに笑みを浮かべていたと思うわ。

じーちゃんも何だか嬉しそうにしてくれて、アタシの頭を撫でてくれた。

） 一子 s i d e o u t ）

一子との電話の最中に百代が来たのでそこで切って、今は全員が集まっているリビングにいるのであった。

他の家族も帰って来るのであったが子供達がお腹を空かせていたので先に頂く事にした。

夕飯を食べる前に今日から新しく住むメンバーである、クリス、瀬麗武の紹介をしてから食事を始めた。新しい人に子供達に怯えずにクリスと瀬麗武に接してくれて「クリスお姉ちゃん」「セレブお姉ちゃん」と呼ばれるぐらい仲良くなっていた。二人共「お姉ちゃん」という言葉に反応していたのを紫郎は見ていたのでクリスも瀬麗武も一人っ子だという事に気付いて弟や妹のような存在が欲しかったのかな、と内心で思っている紫郎であった。二人共優しく子供達に接していたので、あながち間違っではないと思う。

百代も結構紫郎の家を訪れているので子供達とはかなり仲が良かった。

そして紫苑が何か百代に関する事を口にしていただけだ。百代が速攻で紫苑を止めようとしていたのだ。頬を赤く染めて頭を下げて紫苑を止めようとしている百代を見て笑ってしまっていた紫郎であった。

だが百代が必死に止めようとしていることは紫郎も関係していることだ。

紫苑が言おうとした事は紫郎が不在中に何回も紫郎の部屋に百代が訪れていた事を言おうとしたのだ。当然、紫郎に知られたら恥ずかしいと思えば百代は必死に止めようとするのだが、紫苑も意地悪そうな笑みを浮かべてことあることにその事を口にしようとするので百代は気が休まる時がなかった。なので精神的にまいっていた。

そして遅れて結構な人数の家族が帰って来たのであった。帰って来た面々は櫻井家には欠かせないメンバーであった。

軍事部門担当の雪蓮、冥琳、風、真桜、護衛の明命

商業部門担当の蓮華、稟、亞莎、白蓮、護衛の思春

政治部門担当の華琳、桂花、穩、雛里、護衛の春蘭、秋蘭

福祉関係担当の桃香、朱里、流琉、護衛の蒲公英、焰耶

アイドル組、天和てんほう、地和ちほう、人和れんほう、美羽みう、七乃ななの

ドイツ軍で紫郎の直属の部下、星せい、霞しあ、優奈ゆうな、翠すい、音々音ねねね

これだけでも多いのに家に居てくれた家族も紫苑、桔梗ききょう、祭さい、季衣、月、詠、鈴々、恋、愛紗、凧、璃々(りり)

全員は揃っていないが大半の人数が帰ってきてくれたのだ。

海外でデザイン部門に力を入れてくれている沙和さわ、小蓮しょうれんは帰って来れなかったのだ。なんでも急な仕事が入ってしまったということであつた。でも明後日までには帰ってくると言っていたので心配する事もなかった。

他にも宝探しに旅立った麗羽れいは、猪々子いしえ、斗詩達としとは連絡がつかなかったので呼べなかった。三ヶ月前に紫郎が会つた時にはヒマラヤ山脈で遭難していたのを助けたのが三人であつた。そして今さつき皆で食事を取りながらテレビを見ていたらエジプトのピラミットで新たにミイラを見つけたとかで取材をされていたのであつた。それを見ていた紫郎や家族達は啞然として、ある者はお酒を吹いたり、ある者は喉に食べ物詰らせてしまつたり、と面白い反応をしていた。

他にも何処かのジャングルにいると思われる、美以みい、シヤム、トラ、ミケとは連絡が取れたのだが自分達が何処にいるのか分かっていなかったので来れなかったみたいだ。

・ ・ ・ ・

食事も終わってそれぞれが別々の事を始めたのであった。お風呂に入る者、鍛錬をする者、動物達とじゃれる者、後片付けをしてくれている者、テレビゲームをしている者がいたのであった。

） 小雪 s i d e ）

あれ、シロウ居ないな…

家の中をキョロキョロしながら僕こと小雪はシロウを探しているのであった。

「ユキちゃんどうしたんですか？」

「ユキどうしたの？」

僕の家族でメイド長と鬼の副長が話し掛けてきた。

「ちょっとユキ！ 今失礼な事思ったでしょ！」

相変わらず鋭いな

これがカリンさんやメイリンさんだったら絶対に読まれていただ

ろつなあー

「落ち着いて、詠ちゃん」

「私とした事が……ごめんね、月<sup>ゆえ</sup>」

あははー、やっぱり仲が良いな

「で、ユキはさっきから何してんの？」

「僕はねえー、シロウを探してるんだ、二人共知らない？」

一緒にお風呂入ろつって誘おうと思ったのにな

「あ、アンタ聞いてなかったの？」

んっ？ 一体何のこと……？

「紫郎さんなら地下に行って百代さんと戦つて言っていましたよ」

あ、そんなこと言っていたような？

ああ、じゃあ無理だね。

「三、四時間後ぐらいに来てもいいって言っていたから、それまでお風呂に入ったりしていないさい」

はっ！

でも三時間で、ちゃんと決着つくのかな？



「紫郎のはダイオラマ魔法球使ってるみたいだからね」  
なるほど、あれを使えば一時間が一日になるしね  
なっとくなつとくー

） 小雪 side out ）

そしてこの二人は地下に移動していたのだ。

「お前、地下にこんなデカイ空間を持っていたのか！」

初めて地下の空間に入った百代は驚きを隠せなかった。小さい頃からの付き合いである百代でも地下に入ったのはこれが初めてであったのだ。

「地下に入れるのは家族しか入れないからな、家族の誰かの許可で  
使用人が入ったりもできるけどな」

この地下は広い空間が広がっており、部屋も幾つもあるのだが、  
その部屋それぞれに色々な武器や書物があるのだ。危険な雰囲気  
の武器や失われたはずの武器もあるという物凄い空間だ。

「それで、百代姉さんにはこれに触って貰いたい！」

紫郎が指差しているものは、ただの丸い置物であった。

「…これにか？」

この置物を不思議そうに見る百代であった。不思議そうに見ても埒が明かなかつたので触ってみたのであった。

すると触れた瞬間に百代が消えた。百代が消えた後に何もなかったようにすぐに紫郎もその後を追う様に置物に触り姿を消したのであった。

．．．．

〈 百代 side 〉

……なんだなんだあーっ！

さっきまで地下に居たのに何で今はこんなところにいるんだーっ！

「まあまあ、落ち着いて下さいよ」

落ち着いていられるかあーッ！

どうやったたらこんな現象になるんだッッ！

私がいる場所は大きな城が目の前にあり海も森も見えるという状況だ。どこかの外国にありそうな城だし、周りには人の気配が全くないし、森の中に動物の気配もないという事は今居るのは私と紫郎だけという事だ。

「俺ら櫻井家の技術で作ったんだよ」

紫郎の自ら創りました。

どれだけ凄い技術なんだよーっ！

私が呆気にとられていたのに対して紫郎は慣れたような表情を浮かべていた。なんでこういうのにはあまり驚かないで女の事になると驚いたりするんだよ、と思っていた。

そんな事を思っていた私は　急に悪寒がしたので目の前に居る紫郎が構えをとっていたのだ。

「さあー、お楽しみの闘いを始めますかッ！」

…そうだった、な…私ココに何しに来た…コイツを…目の前に居るコイツを倒す為に来たんだよ！

急な展開や状況に吞まれて忘れていたが、私は今日コイツに挑むために来たんだ。

「四年前より強くなっているのを見せて貰うよ！　世界中に名を知られる程になっっているんだから、少しは楽しませてくれよ」

「まったく、こいつは……私との勝負で私が負け続けているからって調子に乗ってるな。」

「いいだろう、完膚なきまでに叩き潰してやるぞ！」

「……うん、気の密度、気の総量、筋肉の付け具合、どれをとっても素晴らしいね」

「少し闘気を出しただけでどこまで見抜いているんだ！」

「まあ、さすがは私の男でありライバルであり目標でもある奴だ！」

「今の私の表情は一体どうなっているだろうな……？」

「きつと嬉しそうに笑みを浮かべているに違いないな。」

「そして心の中では歓喜に満ち溢れているぞ。」

「何故か？ 何故かって……？」

「四年間だぞ！ 四年間も好敵手ライバルと闘えなかったんだぞ！」

「四年間という長い時を無駄に挑んでくる雑魚ザコを相手にしては無駄にストレスと欲求が蓄積していったんだぞ！ 挑戦してくる奴等も私を倒して名を上げたいのは分かるんだが、もっと修行をしてから来て欲しいぞ。」

「乙女さんや揚羽さん達とは軽くしか闘えないし、ウチのじいも平蔵さんも軽く手合わせしかしてくれなかったんだぞ！」

これでは欲求不満になるに決まってるだろうがぁー！

そしてだぁ！ 今のこの状況は何だぁ！

待ちに待った状況ではないか。

この一戦で一気に欲求不満を解消してやる！

それと、絶対にアイツを……紫郎を超えてやる！

「今はこの空間の事は気にするなよ、お前と闘える空間なんだ、これでお前が闘えないと言ったら俺の欲求は何処に向ければいいんだ！」

私が心の内で考え事に集中していたせいか、目の前にいる紫郎が少タイラついているようにも見えた。口調も変わっている。

「その欲求は私の体にぶつけてみてはどうかな……？」

「それは魅力的で……」

素っ気なく応えてくる紫郎に少タムカつくのだが、それよりも早く殺り合いたいという気持ちの方が上回った。

さぁー、お前は私とどれ程打ち合えるのだ。

まさか、弱くなっていたりはしないだろうな……

もしもそんな事があつたら私はお前を……そんな事はないだろうな紫郎に限ってな。

どんな時でも期待に伝えてくれるお前だから私はこれ程喜び、お前を欲しているのだよ。昔から私はお前を求めていた。

「……じゃあ逝くぞオー！」

ああ、逝くぞおおおおー！！

紫郎と私はほぼ同時に動き出した。

ただ単に目の前の相手に自分の拳を叩き込むだけだ。

だが、この一瞬、この時を私がどれ程待っていたか、拳に乗せて紫郎に叩き込んでやる！

） 百代 s i d e o u t ）

） クリス s i d e ）

ふう〜、この家には大きな天然温泉大浴場があるのだがなんて気持ち良いのだあ〜

なんでも滝湯というものもあるらしいぞ。後で行ってみるか。

「湯に浸かった瞬間に顔がだらけてるぞ」

なッ！？ 良いではない、瀬麗武！

こんなに気持ちが良いのは初めてでな……ゆったりと浸かりたい  
気持ちに分からないのかッ！？

「はっはっはっ！ 風呂というのはまつたりするもんだぞ、クリスを  
見習ってお主も肩の力を抜きなされ」

今言ってくれた人は祭さんという人だ。この人と最初に会った瞬間に思う事は『胸が大きい』という事を誰もが思うだろう。祭さんは家で子供達の面倒をみている人でもあり、近くにある小学校の校長でもある人だ。この人からはお母さんという雰囲気漂っている。他にも桔梗さんや紫苑さんも同じ雰囲気を持っている。

祭さんが言ってくれたおかげで瀬麗武がやっと肩の力を抜いてくれて自分の隣で一緒にまつたりと湯に浸かっている。

なんで自分の言う事は聞いてくれないのに他の人の言う事は聞くんだ。瀬麗武は性格も接し方も固いよ。

「……なあ、クリス」

んっ？

自分が内心で愚痴を吐いていると、深刻そうな表情で自分の事を見してきた。

私は何かしたのか？

瀬麗武が今何を思っているか全く見当がつかない。

「……なんでそんなに皆スタイルが良いのだ？」

その言葉を聞いて、なるほど、と納得してしまう自分がいた。

今は女性陣のお風呂の時間なので女性しか居ないのだが、この場にいる大半の女の人はスタイルがモデル並みだと思ってしまうくらい惚れ惚れする体をしているのである。瀬麗武が言ってくれて改めて思う……羨ましい！

女性だけだからといって皆さん胸を隠していないのでその大きさに感服してしまう。というかなんであんなに大きいのが不思議でしょうがないぞ。

「皆さんはなんでそれ程美しいスタイルをしているのですか？」

自分はついつい言葉に出して聞いてしまった。

「美しいだなんてよして下さいよ」

「あっはっはっ！　口が達者な小娘じゃな」

その事についてこの場にいる紫郎の家族メンバーが目を見開いて驚いていた。愛紗さんや祭さんはそんな事はないって言っているが、自分や瀬麗武から見たら美しいんですよ。

多分、他の人が見てもそう言ってくれるでしょう、まず間違いない。  
く。

「何か秘訣ひけつはあるんですか？」



ここで瀬麗武が聞いてくれた。意外だ。

「そうだな……」

「えつとだな……」

何だかとても言いにくそうにしている。

「愛ですよ」

急に誰かが入ってきたと思ったら紫苑さんが何かが入っている瓶を何瓶か持ってきて現れたのであった。

愛……『LOVE』しかないような気が……自分の頭ではそれ以外思い浮かばないのだが……？

それと、瓶に書いてある“川神水”とは水のことか？

「そうですね、愛ですかね」

「……あ、愛だな」

それに吊られて桔梗さんや愛紗さんが頷いている、他の人達も頷いている。頬が赤いのは湯に浸かっているからか、それとも恥ずかしいのかは自分では分からなかった。

「あ、愛ッ！？」

「愛とは『LOVE』ですか？」

自分や瀬麗武の問いに対して皆揃って肯定する。

愛とは偉大なんだなー、と思いつつこの場に居る人達を見ていた。

誰かを思い妄想している者や頬を赤く染めて小さい声で誰かの名前を連呼している者も居て、愛とはこんなにも人に影響を与えるものなんだと一人で納得していた。

人間には愛が必要である、と父様も言っていたな。

そういえば、愛があればどんな困難でも立ち向かって行けるというのを聞いた事がある。そして紫苑さんや桔梗さんも他の人の美貌ひまうのエネルギー源にもなっている愛とは凄**い**というのを改めて実感してしまった。

「その愛とは誰かを愛しているという意味ですか？」

瀬麗武が具体的に聞き始めた。確かに、自分も詳しくその人の事を知りたい！

「え、勿論決まってるじゃんー、紫郎の事だよ」

「愛しているという言葉では収まりきれない程、私は主……紫郎に身も心も捧げたからなのでな」

「そつやな、星の言っている事にウチは同意や」

恥げずかし気もなく言っている、天和、星、霞は言った事に嘘偽りはなく自分の本心を言ったに違いない。

「「ええーっ！！」」

これは驚くしかない！！

天和さん、星さん、霞さんだけではなく、この場に居る全員が頷いているので、この場にいる全員が紫郎の事を愛しているって事になる。

自分も瀬麗武も驚き過ぎて湯から立ってしまっていた。

「別に恥ずかしいことじゃないと思うよ、この場に居ない他の人達も「愛している」って言うに決まっているよ！」

はつきりと嘘偽りつい全く感じさせない桃香さん言葉を聞いて、その事について問いただそうと自分と瀬麗武が近づこうとしたのだが、紫苑さんの言葉で動けなくなってしまった。

華琳さんや雪蓮さんやその側近の人達は仕事を終わらしてから来るそうなのでこの場に居なかったのだ。

「あら、貴方達だってそうじゃなかったの？」

その言葉を耳にした瞬間に自分と瀬麗武は石像のように硬直してしまった。自分もその言葉を聞いてこんな態度を取らなければ紫苑さんや桔梗さんや祭さんや他の人達に事情聴取という名の拷問に合わなかったんだらうと、逆上<sup>の</sup>らせてから気付いたのであった。瀬麗武も自分と同じで皆から色々と聞かれたらしく逆上させていた。

{  
ク  
リ  
ス  
s  
i  
d  
e  
o  
u  
t  
}

## 第十二話 帰り道、我が家、一子の思い（後書き）

はい！、ハーレムですね！

呆れるぐらいハーレムですね！

紫郎ぶつ殺し確定だ。

無理矢理紫郎のファミリーに恋姫メンバーを入れたような気がするのは私だけかな？

恋姫メンバーは一部居なかったりしますが、もしも誰かとの絡みが良いかどんな内容にしたいのか、感想文かメッセージ報告でご連絡を下さい。

一子魔改造決定だぜ！

どれだけ強くなるかは検討中……

某魔法先生の中に出てくる道具を使いました！

ダイオラマ魔法球は便利過ぎて使いやす過ぎるぞ。

前もそうでしたけど、小雪の喋り方がいまいち分からん。

オマケです。

く 政務をしている人達 く

「私達つてあまり出番ないわよね……」

「雪蓮うるさいわよ、愚痴るよりさっさと仕事を終わらしたらどうかしら？」

「姉様、冥琳や風や真桜は終わっているのですから」

「何よ！ 私より先に出番があったからって調子にのってえー！ 華琳や蓮華は全部終わってるの？」

「後、五分で終わるかしら」

「こっちも同じぐらいですよ」

「ぶーぶー、少しは手伝ってくれてもイイじゃない！」

「……そういえば私達の出番もちゃんと作ってくれるって言うていたような……」

「それ本当なの冥琳！」

「詳細は……書類を全部やった後に教えてあげるわ」

「よしッー！ やるわよおー！」

「さすがは冥琳様ですね、雪蓮様の扱いはお手の物ですね」

「風も冥琳さんを見習いますよー」

「穏はもうできるだろう……私が居ない時は風に雪蓮を任せるよ」

「何だかんだで皆さん仲が良いですよね」

「わ、私も同じ事を思いました！」

「亞莎も雛里も和んでないで手を動かさない、はあく早く温泉に入りたいわー」

「なら私とじっくり、ゆったり入る？」

「か、華琳様とですかッ！！ぶっはッー」

「はいはい、凜ちゃんは未だに慣れないんですね」

第十二、五話 家族団樂（前書き）

皆様お久し振りです。

永らく更新できずすいませんでした。



## 第十二、五話 家族団樂

この話は十二話の食事のときの話です。

） 家族 side ）

「いや、こうして揃うと結構な多人数だな」

使用人達に子供達を任せて久し振りに揃った家族と話をしている紫郎。

今現在この場にはクリスマスや瀬麗武や小雪や百代はいないのであった。

何故居ないかという紫郎が百代に頼んで家の案内をさせているのだ。

百代も別に拒否する理由もなかったので、それに久し振りに会った家族の人達とも積もる話もあるだろうと思いを承したのだ。小雪は子供達と一緒に遊んでいる。

「それはそうでしょうね……」

「私達は貴方に惹かれてここにいるのだから」

「ずっと一緒に居られて幸せだよ」

華琳、雪蓮、桃香が思い思い思っていることを言ってくれた。

三人とも微笑を浮かべて紫郎に抱きついている。抱きつかなくても言葉からでも彼女たちがどれほど紫郎の事が好きかが伝わってくるの。

ソファに座っている為に三人が一斉に抱きついてきている。真正面から桃香、右に華琳、左に雪蓮というハーレム的な展開だ。

「今夜は」

妖艶ようえんな笑みを浮かべて紫郎の耳元で雪蓮が言ってくる。

雪蓮は人前では凛々しく、上にいる者である威厳があり、家族内でもムードメーカー的存在で欠かせない存在である。

偶たまに仕事をサボってカジノに行って持ち金を何十倍にして返ってくる程の驚異の的中率を誇る「勘」の持ち主もある。

「私達が満足するまで」

雪蓮に続いて華琳も紫郎の耳元で甘い声で言ってきた。

華琳の言葉でゾクツと背筋から電気が走ったような感覚に襲われ鳥肌が立ってしまった紫郎、何故だか、華琳の言葉には交感神経を直接刺激してくる何かを持っている。

雪蓮と同じく人前では、まるで何処かの国の王様のような存在であり、威厳があり、隠しても隠しきれない覇気を放ち、才気煥発溢れる存在、そして自らの信念を貫き通し誇り高い女性である。

ただし、美しいものに目が無く、家族内の部下は女性、会社の部下も全員女性という可愛いもの好きである。認めた男はある程度話したりするが興味を示しはしない。だが紫郎は全く別な存在と扱っている。心から信用……愛しているので特別なのだ。

そして彼女の最大の性格は“ド”が付くほどのSなのだ。

華琳の護衛である春蘭、秋蘭が言っていた話によれば……

とある企業が華琳の存在が邪魔だったらしく暗殺者を放ったのであるが、その暗殺者は春蘭、秋蘭により取り押さえられたのであるが、華琳は殺しに来たはずの女の暗殺者を才能があるからという理由で自分の部下に強制的にさせたのであった。理由は「綺麗だったから」だと華琳は言っていた。

華琳の洞察眼は簡単に相手の心理や思考を読み取れるほど長けているので才能ある者にはそれ相応の礼儀を払っているのである。

「相手してくださいね」

真正面から抱きついていて桃香が笑みを魅せてくれている。

桃香が魅せてくれる笑顔はとても綺麗であり、純真で邪心のない笑みで人を惹きつけさせる魅力を秘めている。例えるなら絶望から

希望へ変えてくれる慈愛に満ちた存在感が桃香である。

家族内でも慈愛の象徴とされている程であり、華琳や雪蓮が「私達には無い魅力を持っている」と言って賞賛しょうさんしている程であるのだ。

「はいはい、頑張りますよ！」

少々困った表情をしている紫郎であるが、そこまで動揺や焦ってはいないようだ。

誰もが羨望せんぼうするであろう美少女達に囲まれて平然と応えている紫郎はある意味凄い存在だ。

第三者から見れば一人の男に三人の美少女がそれを囲んでいるという羨ましい限りである。

「私達も忘れられては困りますよ」

ソファに座る紫郎の後ろから首に手を回して抱きついてきた人がいる。

頭全体にとっても柔らかい物が当たって枕より感触が良くて気持ちいいと紫郎は内心で思いながらその柔らかさに浸っていた。

「分かっているよ、紫苑……んっ！？ 私達……？」

後ろから抱き着いてきたのは母性溢れる熟女　美女である紫苑であった。

妖艶な笑み浮かべてまるで紫郎のことを美味しそうな食べ物の中から食べようとしているかの如く紫苑は迫ってきている。

そして紫苑の言葉に疑問を思いつくところがあつたらしく紫郎は反応した。

「ご主人様、私達の事絶対に忘れていましたよね…?」

「いいご身分ですよ、紫郎さん…?」

青筋立てて真正面に堂々と立っている愛紗と凧が居たのである。多少どころか相当怒っていると思われる。

紫郎は朝に約束したのをすっかり忘れていたのある。

「……すまん」

さつきまでは笑いながら華琳達と楽しく笑っていたのに、今は絶望的な表情を浮かべていた。

「心配しなくてもご主人様なら“ちゃんと”してくれるよ！だから嫉妬しちゃダメだよ愛紗ちゃん」

「桃香の言う通りよ“ちゃんと”責任を取ってくれるから心配しなくてもいいわよ、凧」

一部分を強調して言うてくる二人に紫郎は何も言えなかった。紫郎も何かを言おうとしたのだが二人共が掴ってきて言おうにも言えなかったのである。

「おやおや、主は大変ですね、私は次の機会がいいですよ。ここは愛紗達に譲りますよ」

（まあ、私は後日に主の寵愛を受ける予定ですからね、ここは一步退いておいて主の信頼をあげるのが得策ですからね）

紫郎と一緒に軍に属して行動を共にしていた一人であって櫻井家の一人である。櫻井星<sup>さくらいせい</sup>だ。

美少女、美女に囲まれている紫郎に余裕を持った表情と口調でメシマを食べながら言う星である。だが、内心では策を巡らせているのであった。

星は一言で言うと男女問わずにモテそうなクール美少女だ。

彼女の魅力は普段でもとても魅力的なのだが戦場でこそ輝く存在だ。

切れ長の目で長い水色の髪を宙に躍らせて、まるで踊っているかのように敵を倒していくのが星である。敵もその美しさに見惚れてしまう程である、それ故に速さには定評がある。

そして彼女は『舞姫』、『青龍』<sup>ブルードラゴン</sup>と色々な異名<sup>いみょう</sup>で呼ばれるようになっていた。

でも彼女には家族にも隠している事がある……

表では誰もを魅了する存在である彼女は

美と愛をもたらず正義の化身、華蝶かちょうかめん仮面として世界中の紛争地帯、街、村に現れては世にいう悪事を働いた者や悪の組織といったものを片っ端から潰しているのである。罪人を殺すのではなくボコボコにしてから説教をするという平和的なものである。

これが意外にも子供や正義の味方に憧れる者に人気なのだ。華蝶仮面の写真を売りに出せば高値がつくほどの人気なのだ。

そして何故だか誰も正体が分からないというのが謎である。クリスも存在に気付いていないのであった。

家族内でも正体を知らないものが居る程である。紫郎の知り合いの人は一部だけ正体が分からない人も居るのである。大和が言うには「バレバレだろ」ということである。

「星は分かつとるやないか！　ウチも次でええでー」

（星のあの表情は何か企んでるんよ、星のことだから自分だけ愛して貰うつもりやろうけどそうはいかなへんでえー！）

この人も紫郎の家族で、櫻井霞さくらいしあという。

武と義を重んじ、俠気きやくいに満ちた武人である。

彼女はムードメーカーで場を盛り上げるのがとても上手なうえに

誰に対しても同じ態度を取っているので、星と同じで男女問わず人気があるので結構モテる。

霞は相手が強ければ強いほど闘志が高まっていき自分の強さも増していくタイプだ。

これは一対一とは限らずに回りにもかなり影響力を及ぼすので部下達も勇猛になるといふ。

過去に自分の部隊で五十名弱の隊員達と一個師団を撃破したといふ武勲をたてているのである。

重傷者は居た者の死亡者はいないという実績を持っていることから彼女を中心に周りの人も影響を受けて士気が高まり、一人一人が限界異常の力を出したからこそ撃破できたと紫郎は語る。

常に前線で指揮をする霞の事を『勝利の姉御』『神速』と呼ばれているのであった。

彼女自身も自分が姉御肌である事を分かっているのである。

「確かに、我らは他の皆とは違い結構な時間紫郎様と居たからな、ここは私も遠慮します」

(我らドイツ軍組は他の人達とは違って紫郎様に何度も愛してもらったからな、星も霞もそこを配慮はいしりしているんだらうな)

<sup>51</sup>顎に手を当てて納得をしているこの女性は紫郎の家族である、櫻さくら



井優奈<sup>ゆいな</sup>である。

顔も整っておりスタイルも良い美女である。

星や霞のように速さに特化した存在ではなく防御面で特化しているのが優奈の特徴である。

体に気を何十にも纏わせて防御力を上げるのが得意であって、その強度は鉄球を頭で砕いても何とも無いほどある。でも未だにどのぐらい限界なのか把握できていないのであった。試しに戦車の砲弾を喰らったところ……体は無傷であったが脳震盪<sup>のうしんとう</sup>を起こしていたので限界がいまいち掴めていないのである。

個人の防御力も大したものであるが仲間を守る為の戦いになると四倍ぐらいの強さを発揮する。幾ら自分が倒れようが血を流そうが立ち上がってくるので『ガードディアン守護者』、『不屈の魂』と呼ばれるようになっていた。

彼女自身も気に入っているらしい。

「全く、ご主人様は見境が無いんだからな」

（皆には悪いけど、あたしらはかなりご主人様に構って貰えたからな、ここはあたしも我慢すべきところだね）

この少女も家族の一人である、櫻井翠<sup>あいらいす</sup>だ。

一言で彼女の事を言うと 元気一杯で明るい女の子である。頭がちよっぴり弱いのが難点だけだ。

頭に手を当ててハーレム状態の紫郎に呆れている様子だ。

呆れている翠も実は紫郎に抱かれた一人でもある……勿論、他にもいますよ。

今は何ら変わった様子はないですが紫郎と二人になった時や夜の営みの時には物凄く甘えてくるのである。まるで猫みたいに……

軍に居た時は人前で甘える事はけしてなかったが買い物や紫郎と話している時は普段とは違う一面が出てしまったのを部下の何人にも見られているのである。当の本人は知らないようだ。

他の家族と同じで彼女にも異名が付いている……『人間戦車』『<sup>トロンク</sup>竜巻』という名だ。

敵陣に突撃をして爆撃の如く敵を倒してゆく彼女のことを表したそうだ。

そして竜巻というのも彼女が通った後は何もかもが破壊されて駆逐されているからその名がついたのだ。

「ドイツからちんきゅー達を呼んどいて何を紫郎はイチャついですうー!」

(全く貯まっていた仕事があったというのに……でも恋殿に会えるのならいいです)

この子も紫郎の家族であり、さっきまでの武人組とは違って戦術

戦略に長けた子である、名前は櫻井音々音さくらいねねという。

通称は「ねね」と呼ばれている。

八重やえは歯可愛らしく、元気で、ちょっと生意気なちびっ子な少女。

彼女は武より知の方が遥かに実力があるので部隊を率いた時は軍師的位置に居る。だが、時々最前線に出て戦っているときもあるのだ。

彼女にも異名が付いている、『ちびっ子軍師』『せつせい節制』

最初の異名は見た目から判断したもので、もしもねねの前で言ったら「ちんきゅーきつく！」をもらうであろう。

『節制』という異名は度を越すことなく、ほどよい具合に敵を弱らせるので付けられたのである。

「部隊にも休暇を取らせてあるから大丈夫だろ、それに仕事ばかりじゃ疲れるだろ？ 休まなくちゃ倒れるぞ」

抱きついてきていた四人を剥がして普通に座らせてねねの方を向いて言った。

「主、向こうにも複製したダイオラマ魔法球があるのをお忘れですか？」

「……そうだったね」

すっかり忘れていた紫郎である。

「紫郎は天然なのじゃな！」

「いやー、それは違うと思いますよ、お嬢様」

今言葉を発したのは、さくらい みつ 櫻井美羽とさくらい ななの 櫻井七乃である。

この二人はアイドルとして有名である。

主に美羽の歌声はかなり癒し効果があるとかで人気絶頂である。

七乃はそんな美羽のサポート役であり、マネージャー的な存在である。

美羽は歌手活動だけではなく劇もやったりしているので世間ではとても人気で評判はとても良いのである。

「ねえ、紫郎！」

誰かが話してきたのでそっちの方を振り向いた紫郎の前には桃色のロングヘアの巨乳の美少女がいた。

「ダイオラマ魔法球使ってこの場に居る全員相手すればいいんじゃないの？」

その子の言葉は部屋に居る家族全員が一斉に黙った。

全員が何らかの行動をしていたのにも関わらず静止したのである。

「姉さんナイス！」

「天和姉さんナイスです！」

桃色ロングヘアの子に向かってポニーテールの子とショートカット眼鏡の子が二人揃って親指を立てて嬉しいそうに言った。

この子達も紫郎の家族である。

桃色ロングヘアの美少女は櫻井天和さくらいてんほうという。

ポニーテールの美少女は櫻井地和さくらいちーほうという。

ショートカット眼鏡の美少女は櫻井人和さくらいれんほうという。

三人は姉妹であり、アイドルユニット『数え役萬 姉妹』という名である。

天和、地和、人和という順に長女、次女、末妹である。

美羽とは違って活動しているものの人気は美羽以上である。特に男の人に人気であり日本では知らないものが居ない程の人気である。なんでもそろそろ世界進出すること。

「それは魅力的だな。そうだと思わないか、風？」

「ですね。風も参加したいですよ」

紫郎の周りには何時の間にか話しに入りたいという美少女、美女で囲まれていた。

そして今発言した人は知的なお姉さん、最強装備である眼鏡を付けている、櫻井冥琳さくらいめいりんであった。

そして二人目は金髪ふわ髪で常にアメをくわえている不思議少女、櫻井風さくらいふうであった。

冥琳は一言で言うと『知的美女先生』という感じである。

雪蓮の補佐をして外交や討論では並ぶ者がいないと言われるほどの人物でもあり、的確に相手の弱みを握り、そこを攻めてきて相手につけている隙を与えないので彼女と交渉の話をした者は精神的にボロボロになって帰ってくるのであった。だが、胸には理屈では測れないほどの熱さを秘めている。

そしてもう一人の風の方を一言で言うと「不思議ちゃん？」という感じだ。

風も冥琳と同様に雪蓮を補佐しており、冥琳と同じく交渉術や話術に長けており、冥琳と風だけで櫻井家との交渉では勝てないと言われている程である。

風は見た目とは裏腹に人付き合いが上手で顔が広いので各国家重要人物達とも知り合いになっているらしい。

「それやあー、それに賛成や！」

「わあー、いいですね！」

白衣を着た関西なま訛りの子と猫を抱きながら長い髪の子が満面の笑みを紫郎に向けながら言ってきたのだ。

二人以外にもニヤニヤしながら紫郎を舐める様に見ている者もいるので、紫郎は軽く冷や汗を流していた。皆の目はまるで最高級の獲物を前にして食べようとしている猛獣のような存在であった。

さすがの紫郎もヤバイと内心で思い始めたようだ。

関西訛りの少女も猫を抱いている少女も紫郎の家族だ。

関西訛りの少女は、櫻井真桜ちんくわい まおひという。

彼女は雪蓮と同じで軍事担当であるがおもに軍事の開発部門担当であり、開発部門の局長である、つまりは最高責任者であったりする。

武器や兵器を多少作ったりしているが、専門はロボットを作ることだ。

何でも人口知能搭載型のロボットを何台か開発したという報告が

あつたので直接見てみたら……ロボットというより人に近かつたのである。例えるならKOS・MOS、コスモスT・e1osテロスだったと紫郎は言っている。

真桜の護衛として二人共行動をしているのである。

なんでも真桜の技術力が欲しいらしく狙ってくる刺客から守ってくれているのであつた。真桜以外にも家族である櫻井家の人達の仕事も助けてくれている。

もう一人の猫を抱いている少女は、さくらいみんめい櫻井明命という。

彼女は主に雪蓮達の護衛が仕事である。

護衛としては非常に優秀で一気に五十人の刺客が襲ってきても三十秒以内で鎮圧できるほどの実力を持っている。

彼女の武器は動きの速さと正確に相手の弱点を突いてくるところである。

でもそんな彼女も猫だけには勝てないのである。

どんな猫に対してもときめいてしまつて仕事をほっぽりだしてしまつほどお猫さまLOVE娘なのだ。

自分の自室にも猫を放し飼いにしていたり、猫のぬいぐるみも置いてあつたりしてネコまっしぐらである。



「……俺死ぬんじゃね？」

真桜や明命の視線以外に向けられている目線がいかにも危険かがないとなく分かっていた紫郎。

「姉さま達だけずるいと思うのは私だけかしら？」

「蓮華様の意見に私も同意です、公平にするのが当たり前ではないか！」

最初に発言した子は、さくらいれんぷあ櫻井蓮華だ。

紫郎に抱きついていていた雪蓮の事を“姉さま”と呼んでいて、奔放な姉の雪蓮とは対照的な性格で、真面目で気難しいところがあるが内面はとても穏やかな気性であり、心を許した相手には甘えることもある。紫郎には人一倍甘える。

さくらいししゅんそして蓮華の事を様と呼んでいて、常に蓮華の側に控えている、さくらいししゅん櫻井思春である。

常に主である蓮華の側を離れず、影から日向を支える忠義者である。

蓮華の姉である、雪蓮に忠義を誓っている。

クールであり感情を表に出す事はないが、誰よりも蓮華の事を考え思っている人物でもある。

ツンデレでは無いので、あまり紫郎に甘えたりしないのも彼女の魅力でもあり、稀に魅せてくれる思春のギャップがなかなかのものだと紫郎は言っている。

「……私達が紫郎さんを陵辱して、たつぷり、たつぷりと喘あえぎさせぶっ……!」

「ちよつと稟さん! え、えつと……確か、この辺りをトントンするんでしたよね?」

眼鏡を掛けた真面目そうな女の子が突然鼻血を出してその場に倒れてしまった。

そしてもう一人の片眼鏡の女の子が鼻血を出した女の子を介抱しているのだった。

「櫻井」を名字に持っているので、二人も紫郎の家族である。今は蓮華の部下として働いている。

鼻血を出して倒れている子は、櫻井稟さくらいりんという。

もう一人の片眼鏡の子は、櫻井亞莎さくらいあしえだ。

二人とも優秀な存在だ。稟は堂々とした態度を取り、自分の発言したことに對して絶対的自信を持って行動するので無駄がなく成果

を出すので今の上司である蓮華からは絶対的な信頼を寄せられているのである。

だが、身内の事になると堂々とした態度とはまったく正反対になっってしまうのだ。一番酷いのは重度の妄想癖だ。

男性が軽く触れただけで自分が責められることを想像しては、鼻血を吹いてしまう天邪鬼あまのじやく&むっつりスケベなのが稟である。

そしてもう一人の亞莎は目つきが鋭く無愛想な印象を与えてしま  
うのだが、それは近視&乱視の為であるゆえだ。本人もそれを気に  
しており、ますます人付き合いが苦手になってしまっている。

……でもそれは過去の話である。

今は人付き合いが苦手ではなくなっているので相手から掛けられ  
ても焦らず、動揺せずに会話ができるようになったおかげで人付き  
合いは良好だ。

稟と同じで蓮華のサポートしており、鋭い洞察眼で相手の先の先  
をよんでいるので話術による交渉術に対しては家族内では並ぶ者が  
いないほど長けている。

「あ、このお料理美味しいよ、朱里ちゃん」

「本当だね！？ 今度二人で作ってみようよ、流琉ちゃん」

色々と並べられている料理を味わいながら話をしているこの二人は、櫻井朱里、櫻井流琉である。

彼女達にも役割があり、桃香の補佐が主な役割でもあるが、ドジをする桃香のお世話をするのも彼女達二人の役割でもある。

朱里は持ち前の頭脳を生かして福祉関係で使える物や技術をどんどん作っては世に貢献している。

提案しているだけではなく、自分達で介護したり、お世話したりもしているのだ。

流琉も同じで桃香の世話だけでなく、高齢者の人達への介護を朱里と一緒にやっている。

それだけではなく、流琉は自分の趣味である『料理』で名も知られている程の料理人でもあるのだ。

かなり名が知られているので毎日のように弟子にしてくださいとお願いしてくる人が絶えないのであった。

「全く、イチヤイチャしちゃって」

（あゝん、華琳様と紫郎様と私で三人で……あんなことやこんあことを…）

今現在トリップ状態になっているこの子は櫻井桂花だ。

彼女は華琳の補佐役として付き従っているが、DMである。

毎度毎度、華琳に苛められては喜んで、罵られても快感を覚えるほどの異常な心酔ぶりである。

そして男を異常に毛嫌いするのが桂花の特徴でもある。

紫郎は過去に一度だけ桂花の態度にキレてしまった為に徹底的に苛め、苛め、苛め、調教したのであった。そのせいで華琳並みに紫郎の事も心酔してしまっただけらしい。

それ以外で彼女の仕事っぷりは優秀としか言いようがない程である。

華琳も「彼女の頭脳が必要である」というほど褒め称えている。

「はあくん！ 私も久し振りに紫郎さんに抱かれました〜」

（やっぱり普通の人とは違う魅力がありますね〜、流石は穩の旦那様です〜）

のんびりとした喋り方で紫郎にベタ惚れなこの子は櫻井穩ちくわいのんという。

喋り方からでも伺えるように彼女はとてものんびり屋さんで、その穏やかな人柄は、家族達の信頼を集めている。

穩は家族内でも人一倍紫郎に甘えたり、甘えさせたりしている一

人でもある。だが、意外とヤキモチ焼きで独占欲が強い。

華琳の補佐として桂花ともう一人と穩と一緒に仕事をしているのだが、穩にはとある悪い性癖があるのだ……

それは新たな知識を会得すると性的な興奮をするという癖の持ち主なのだ。

華琳も桂花もこれには大変困っているらしく、毎度毎度紫郎を呼んでは抑えてもらっているらしい……いろいろな意味で。

「すごい事になってしまったな」

（わ、私の相手もしてくれるのか!?!）

周りの現状を見ながら彼女は一言述べた。

でも内心では構ってほしいと思っているのであった。

「皆さん……欲望駄々漏れです」

（あわわ、恥ずかしくないんですかね……）

冷静にこの状況を見守っているが、内心では恥ずかしがっている少女がいた。

最初に一言言った彼女も恥ずかしそうにしている少女も紫郎の家族だ。

最初の子は櫻井白蓮、もう一人は櫻井雛里という。

白蓮は蓮華達と一緒に商業の部門を任されている。

そして白蓮は中でもこれといって飛び抜けた才能や能力もない、ましてや思春のように武の方も強いわけではないのだ。あえて言うなら平均よりは上と言える。

ある意味で凄い存在だと紫郎は評価しているのである。仕事もやれと言われた物はちゃんとやっているので蓮華や他のメンバーからも信用されている。

家族内ではネタキャラにされているのである。

「私のことも抱いて下さるだろうか…?」

「蒲公英も蒲公英も!」

体育会系の少女と翠と容姿がとても似ているサイドポニーの少女が言った。

この子達も櫻井家の一員である。体育会系の少女は櫻井焰耶、も

う一人の少女は櫻井蒲公英さくらいたんぽうへいという。

彼女達は桃香の護衛として行動しているのであるが、二人共仲が悪くて毎度毎度喧嘩しているのであった。昔と比べたらだいぶ減ったといえる。喧嘩の原因の大半は蒲公英のだが、焰耶も簡単な挑発に乗って蒲公英に襲い掛かるのでどっちもどっちなのである。でも桃香や紫郎が「やめろ」と言えば焰耶は止めてくれるので、まだ助かっているほうだ。それに比べて蒲公英はつまらなそうにして不機嫌になってしまう。朱里や雛里が「天性のイタズラっ子」というほどであった。

「ダイオラマ魔法球を使えばどうにかなるかな…?」

全員を相手するつもりでいる紫郎である。

「お茶どうぞ」

紫郎が悩んでいると横からメイド服を着た月がお茶を持ってきてくれた。その後ろには当然の如く詠が付き添っていた。

「ありがとう」

お茶を受け取りじっくり味わった。やっぱりお茶が一番美味しいと内心で思いながら呑んだ。

「ちょっと紫郎、私達も相手しなさいよ!」



「詠ちゃん！？ 私は別にいいよ……」

お茶を飲んでいると詠が怒鳴ってきた。

「そんなことは分かっているよ、皆でダイオラマ魔法球に入る予定だから」

「そ、そう……」

平然と応える紫郎に驚く詠であった。

「おっと、言うのを忘れるところだった、皆ちよつと聞いてくれ！」

詠に返答して何かを思った紫郎がソファから立ってこの場に居る全員に呼びかけた。

「皆の相手は勿論するんだが、先に百代姉さんと闘う予定が入っていてな、三つ四時間は一応闘うと思われるからその間は入って来ないでくれよ、巻き込まれなくなかったらね」

学校の際に紫郎は百代と手合わせをするのを約束していたので、それをダイオラマ魔法球内でやるうということのを皆に伝えたのだ。

「三つ四時間という事は三日間から四日間は闘うつもりなのじゃな」

「百代の奴も相当溜まっておったからな、せいぜい頑張っただいてしてやることよ」

祭と桔梗はお酒を飲みながら言ってきたのだ。二人の後ろには何本もボトルやら瓶が転がっているのが見えるのだが。

「四時間……四日間も取ったのはあくまで保険だからな、そう簡単に決着がつかない様な気がするしね」

お酒を飲んでいる二人を苦笑いしながら自分の勘が百代とは簡単には終わらないだろうとっているみたいだ。

「分かったよー、その間は皆と久し振りに会ったから話したいことが山ほどあるから話してるよ！」

桃香が言った事に皆も頷いてくれた。久し振りに全員ではないが大半が揃ったので皆も話したい事がいっぱいあるので、三時間から四時間は余裕で話してそうだなと内心で紫郎は思っていた。

「主、くれぐれも油断せずに……」

「そうね、百代ちゃんって世界中に武で知られているんだから」

百代の知名度は尋常ではないくらい知られているから星も雪蓮も当然知っていた。

「一目見て百代の奴が欲求不満だと分かったぞ」

「姉者も思ったか、彼女の目はまるで餌を求めている猛獣のようだったぞ」

春蘭、秋蘭もこの家で百代と会った時に感じていたらしい。

櫻井家の武芸者メンバーは全員思っていただろう、彼女は餓えていると……

紫郎は別格として、紫郎の家族の中でも一応百代に勝てるメンバーはいるが、まだ百代の潜在の能力が未知数なため確実に勝てる相手は紫郎だけだと言っていていいだろう。

「まあ、油断せずに百代姉さんを満足させますよ」

紫郎も学校で殴りかかれた時に感じていたのだ。彼女の欲求が限界にきているのが……

そして自分も久し振りに強者と闘える喜びを感じて胸が熱くなるのを……

第十二、五話 家族団樂（後書き）

恋姫メンバーです。

最近はガチで忙しくて小説を書いていませんでした。でも今後はちよくちよく書いていくつもりなので宜しく願います。

迷惑をかけますがすいません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9265p/>

---

真剣で私に恋しなさい！～新たなる人生の始まりpart 2～

2011年11月12日22時55分発行